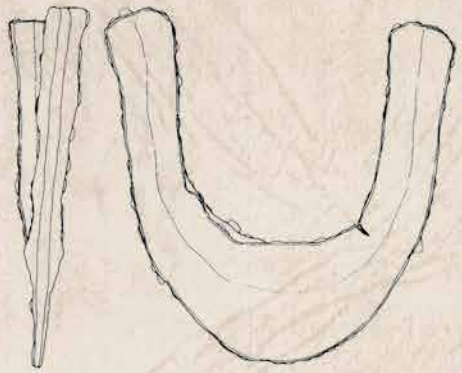
宮古市埋蔵文化財調査報告書36

——農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書——

細越（ほそごえ）Ⅰ遺跡
芋野（いもの）Ⅱ遺跡



1992.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書36
A Report on the Archaeological Research in Miyako City. No.36

—農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書—

細越 I 遺跡 Hosogoe I Site
芋野 II 遺跡 Imono II Site

1992.3
岩手県宮古市教育委員会
The Miyako Board of Education Miyako, Iwate, Japan

序　　文

標高1124.4mの亀ヶ森の麓から流れ出した芋野川と亀ヶ沢は落合周辺でひとつになり田代川となります。

この田代川流域には縄文時代から中世にわたる遺跡が40ヶ所以上確認されており、そのひとつひとつが地域の歴史を刻み込んだ記念碑として私達の世代まで受け継がれて来ました。

また、遺跡以外では君田地区にある絵入追分道標（道しるべ）と、田代川流域のチョウセンアカシジミ生息地が宮古市指定文化財とされています。

私達はこうした文化遺産に対して調査・研究を進めながら必要な保護措置をとり、次世代へ受け継いで行くべきであると考えて居ります。

さて、本書は平成２年度から平成３年度にかけて田代地区において実施された細越Ⅰ遺跡と芋野Ⅱ遺跡の発掘調査の概要をとりまとめた報告書であります。

調査の結果細越Ⅰ遺跡からは田代地区を代表する古代の大集落が発見され、しかもこの集落は鉄づくりに深く結びつくことがわかってきました。

また、芋野Ⅱ遺跡からは比較的類例の少ない古代のお墓や弥生時代の遺物が発見されています。

これまで田代川流域での発掘調査件数は比較的少なかったのですが、今後はこのような調査を積み上げることにより田代地区の移り変わりがより明確になってくるものと思われます。

最後に、本書が文化財保護の一助となることを願いつつ、発掘調査の実施にあたり御協力を頂いた関係各位に感謝申し上げて序文といたします。

平成４年３月

宮古市教育委員会

教育長　佐　藤　勇　逸

例　　言

1．本書は平成２年度から平成３年度にかけて宮古市農林課より依頼を受けて実施した細越Ⅰ遺跡および芋野Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

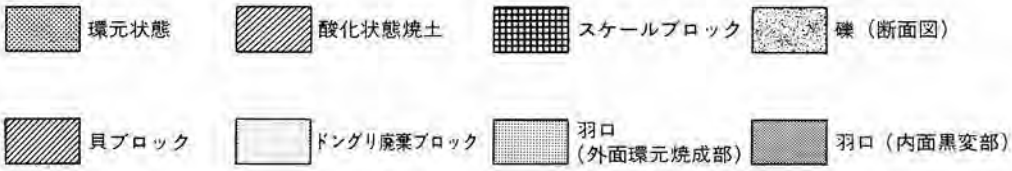
2．発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長　佐藤勇逸）で、発掘調査は高橋、鶴田、鎌田、阿部が担当した。

　また、本書の執筆、編集は高橋が担当し、鎌田、阿部が補佐した。

3．調査座標は、周辺に公共座標の基準点が無かったことから任意に設定した。

　また、高さは標高値をそのまま使用した。

4．遺構、遺物の表現については下記のとおりとした。



5．発掘調査および遺物の整理、本書の執筆に際しては次の方々から御教示、御指導を頂いた。記して感謝申し上げる。

渡辺　　誠（名古屋大学文学部）　　小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）

相原　康二（岩手県教育委員会文化課）　　岸　　昌一（宮古市教育委員会市史編さん室）

高橋　信雄（　　〃　　）　　竹下　将男（　　〃　　）

熊谷　常正（　　〃　　）　　斉藤　英樹（宮古市文化財保護審議委員）

中村　英俊（　　〃　　）

6．本文中の引用文献は次のとおり略記した。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1983～86『宮古市分布調査報告書１～４』　武田将男→『分布調査１～４』

1986『宮古市遺跡分布図　昭和60年度版』　武田将男→『分布図86』

目　　次

序　文
例　言
目　次
Ⅰ　調査経過……1
1　調査に至る経過……1
2　調査要旨……1
3　調査体制……2
Ⅱ　遺跡をとりまく環境……2
1　自然的環境……2
2　歴史的環境……7
Ⅲ　調査の内容……11
1　細越Ⅰ遺跡第1次調査……11
(1)　調査の方法……11
(2)　基本層序……11
(3)　遺構の検出状況……11
(4)　検出された遺構と遺物……12
a）　Ⅰ区……12
b）　Ⅱ区……48
c）　Ⅲ区……48
2　芋野Ⅱ遺跡第1次調査……55
(1)　調査の方法……55
(2)　基本層序……55
(3)　遺構の検出状況……55
(4)　検出された遺構と遺物……58
Ⅳ　調査のまとめ……71
1　細越Ⅰ遺跡……71
(1)　遺構について……71
(2)　遺物について……72
(3)　動物遺存体と炭化種実について……73
2　芋野Ⅱ遺跡……74
(1)　遺構について……74
(2)　遺構外出土遺物について……75

図 版 目 次

第１図版　細越Ⅰ遺跡作業風景・細越Ⅰ遺跡検出遺構
第２図版　第１号竪穴住居跡・第１号竪穴住居跡内鍛冶炉群
第３図版　第１号竪穴住居跡内鍛冶炉群・第２号竪穴住居跡
第４図版　第２号竪穴住居跡埋土堆積状況・第２号竪穴住居跡内第18号鍛冶炉
第５図版　第３号竪穴住居跡・第３号竪穴住居跡鉄製品出土状況
第６図版　第４号竪穴住居跡・第４号竪穴住居跡カマド
第７図版　第５号竪穴住居跡・第６号竪穴住居跡・第５号竪穴住居跡、第６号竪穴住居跡埋土堆積状況
第８図版　第５号竪穴住居跡内第５号土壙跡・貝ブロック検出状況
第９図版　貝ブロックＥ・第７号竪穴住居跡
第10図版　第９号竪穴住居跡・第９号竪穴住居跡カマド
第11図版　第10号竪穴住居跡・芋野Ⅱ遺跡調査区全景
第12図版　芋野Ⅱ遺跡堆積状況・第１号土壙跡完掘状況
第13図版　第１号土壙跡埋土堆積状況・第１号土壙跡遺物出土状況
第14図版　遺物出土状況
第15図版　細越Ⅰ遺跡出土遺物１（土師器）
第16図版　細越Ⅰ遺跡出土遺物２（鉄製品・椀形滓）
第17図版　細越Ⅰ遺跡出土遺物３（フイゴ羽口・カマド支脚）
第18図版　細越Ⅰ遺跡出土遺物４（ハンマースケール・炭化種実）
第19図版　芋野Ⅱ遺跡出土遺物１（第１号土壙跡）
第20図版　芋野Ⅱ遺跡出土遺物２（土器）

挿 図 目 次

第１図　田老川周辺遺跡分布図……3、4
第２図　田老川周辺地形分類図……5、6
第３図　細越Ⅰ遺跡遺構配置図……9、10
第４図　第１号竪穴住居跡……13
第５図　第１号竪穴住居跡土層断面図・鍛冶炉群検出状況……15
第６図　第１号竪穴住居跡内鍛冶炉群……17
第７図　第１号炭窯跡……19
第８図　第２号竪穴住居跡・第１号土壙跡……21
第９図　第２号竪穴住居跡・第１号土壙跡土層断面図……23
第10図　第３号竪穴住居跡・第２号土壙跡……25
第11図　第３号竪穴住居跡土層断面図……26
第12図　第３号竪穴住居跡カマド……27
第13図　第４号竪穴住居跡・第３号土壙跡・第４号土壙跡……29

第14図　第４号竪穴住居跡・第３号土壙跡・第４号土壙跡・土層断面図……31
第15図　第４号竪穴住居跡カマド……32
第16図　第４号竪穴住居跡焼土Ｂ……33
第17図　第５号竪穴住居跡・第６号竪穴住居跡・第２号炭窯跡・第６号土壙跡……35
第18図　第５号竪穴住居跡・第６号竪穴住居跡・第２号炭窯跡・第６号土壙跡土層断面図…36
第19図　第５号土壙跡……38
第20図　第７号竪穴住居跡・第１号焼土遺構……41
第21図　第８号竪穴住居跡……42
第22図　第９号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡・第２号焼土遺構……44
第23図　第９号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡・第２号焼土遺構土層断面図……45
第24図　第９号竪穴住居跡カマド……46
第25図　細越Ｉ遺跡出土遺物１　（土器－１）……50
第26図　細越Ｉ遺跡出土遺物２　（土器－２、石器－１、鉄器、鉄塊－１）……51
第27図　細越Ｉ遺跡出土遺物３　（鉄器、鉄塊－２）……52
第28図　細越Ｉ遺跡出土遺物４　（鉄器－３、土製品－１）……53
第29図　細越Ｉ遺跡出土遺物５　（鉄器－４、土製品２）……54
第30図　芋野II遺跡周辺地形図・調査区設定図……56
第31図　第１号土壙跡……57
第32図　芋野II遺跡出土遺物１　（第１号土壙跡出土鉄器）……59
第33図　芋野II遺跡出土遺物２　（土器－１）……61
第34図　芋野II遺跡出土遺物３　（土器－２）……63
第35図　芋野II遺跡出土遺物４　（土器－３）……64
第36図　芋野II遺跡出土遺物５　（土器－４）……65
第37図　芋野II遺跡出土遺物６　（土器－５）……66
第38図　芋野II遺跡出土遺物７　（土器－６）……68
第39図　芋野II遺跡出土遺物８　（土器－７、石器－１）……70

付表目次

第１表　鍛冶炉観察表……18
第２表　自然遺物集計表……37

図表目次

図表１　ドングリ状炭化種実長軸毎の出土点数（No.9Ｈカマド出土）……49
図表２　ドングリ状炭化種実長幅比（No.9Ｈカマド出土）……49

Ⅰ　調査経過

1．調査に至る経過

今回の発掘調査は、宮古市農林課による細越農道整備事業（農業農村活性化農業構造改善事業）及び芋野地区農道整備事業を原因とするものであり、細越Ⅰ遺跡（ＬＧ03－2102）及び芋野Ⅱ遺跡（ＬＧ11－1346）にて調査を実施した。

細越Ⅰ遺跡については、平成２年度中に農林課より事業計画案の提示があった。事業の概要は農道整備事業と農地の区画整理事業で、総事業面積は14,143㎡に及ぶものであった。

教育委員会は農林課と数回にわたり事前協議を重ねた結果、とりあえず平成２年度中に試掘調査を実施し、本調査が必要となった場合には平成３年度に実施することとした。

平成３年１月18日～１月23日にわたり事業区域内の試掘調査を実施したところ、古代のものと思われる竪穴住居跡を29棟ほど検出した。

この試掘調査の成果を受けて、両者は再度協議を行ったところ、区画整理部分は農地から農地への現状変更であり、遺構が検出された部分については、盛土により遺構を保存することとした。しかし、農道部分については適当な保存方法がとれず、結局記録保存を前提とした緊急調査を実施することとした。

また、芋野Ⅱ遺跡については、平成３年８月に事業計画案が提示された。事業の概要は農道の改良工事（舗装）であったため、拡幅部分についてのみ緊急調査を実施した。

2．調査要旨

○細越Ⅰ遺跡（ＬＧ03－2102）

試掘調査期間　平成３年１月18日～平成３年１月23日

本調査期間　平成３年５月28日～平成３年９月３日

検出遺構　古代の竪穴住居跡29棟（うち10棟を精査）・土壙跡17基（うち６基を精査）・鍛冶炉21基であるが、第５号竪穴住居跡の埋土及び土壙跡に岩礁性二枚貝類を主体とする小規模な貝層が形成されていた。
所属時期不明の炭窯跡２基。

検出遺物　土師器甕・鉄器類・フイゴ羽口・鉄滓・鉄塊・ハンマースケール・碗形滓・動物遺存体・炭化種実など。

○芋野Ⅱ遺跡（ＬＧ11－1346）

発掘調査期間　平成３年８月29日～平成３年９月13日

検出遺構　古代の墓壙跡１基・遺物包含層

検出遺物　墓壙跡に伴う遺物は、鋤先と土師器甕破片及び骨片などがある。また、遺物包含層からは、古代、弥生時代、縄文時代晩期の遺物が出土している。

3．調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査委託者	宮古市農林課（課長　菊地　政男）	
調査主体	佐藤　勇逸	宮古市教育委員会教育長
調査総括	大森　　翼	宮古市教育委員会社会教育課長
事務担当	小本　　哲	宮古市教育委員会社会教育係長（平成２年度）
〃	山崎　吉章	宮古市教育委員会社会教育係長（平成３年度）
〃	坂下　　昇	宮古市教育委員会社会教育課主任兼社会教育主事補
〃	坂本　邦雄	宮古市農林課農政係長
〃	下野真智子	宮古市農林課庶務係主任
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育課主事
〃	鎌田　祐二	宮古市教育委員会社会教育課主事
〃	鶴田　　均	宮古市教育委員会社会教育課主事
〃	阿部　　豊	宮古市教育委員会社会教育課埋蔵文化財調査員（非常勤）

調査の実施にあたり、次の各位から多大の御協力をいただいた。（敬称略）

〈発掘調査〉　佐々木茂、前川友宏、北村忠治、菊地清八、神林信吉、上坂サト、信夫ハナ
斉藤貞子、藤谷晶子、菅原テルミ、古館友三

〈整理作業〉　成田寿美江、佐々木茂、菊池清八、神林信吉、北村忠治、大越貞蔵、佐伯裕則

〈地 権 者〉　小坂秀雄、小坂義雄、小坂正雄、小坂良佐久、皆川政和

細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡から出土した鉄器類の保存処理は次の機関に委託した。

岩手県釜石市鈴子町23番15号　新日本製鐵株式会社釜石製鐵所
釜石文化財保存処理センター　（所長　岡庭憲一）

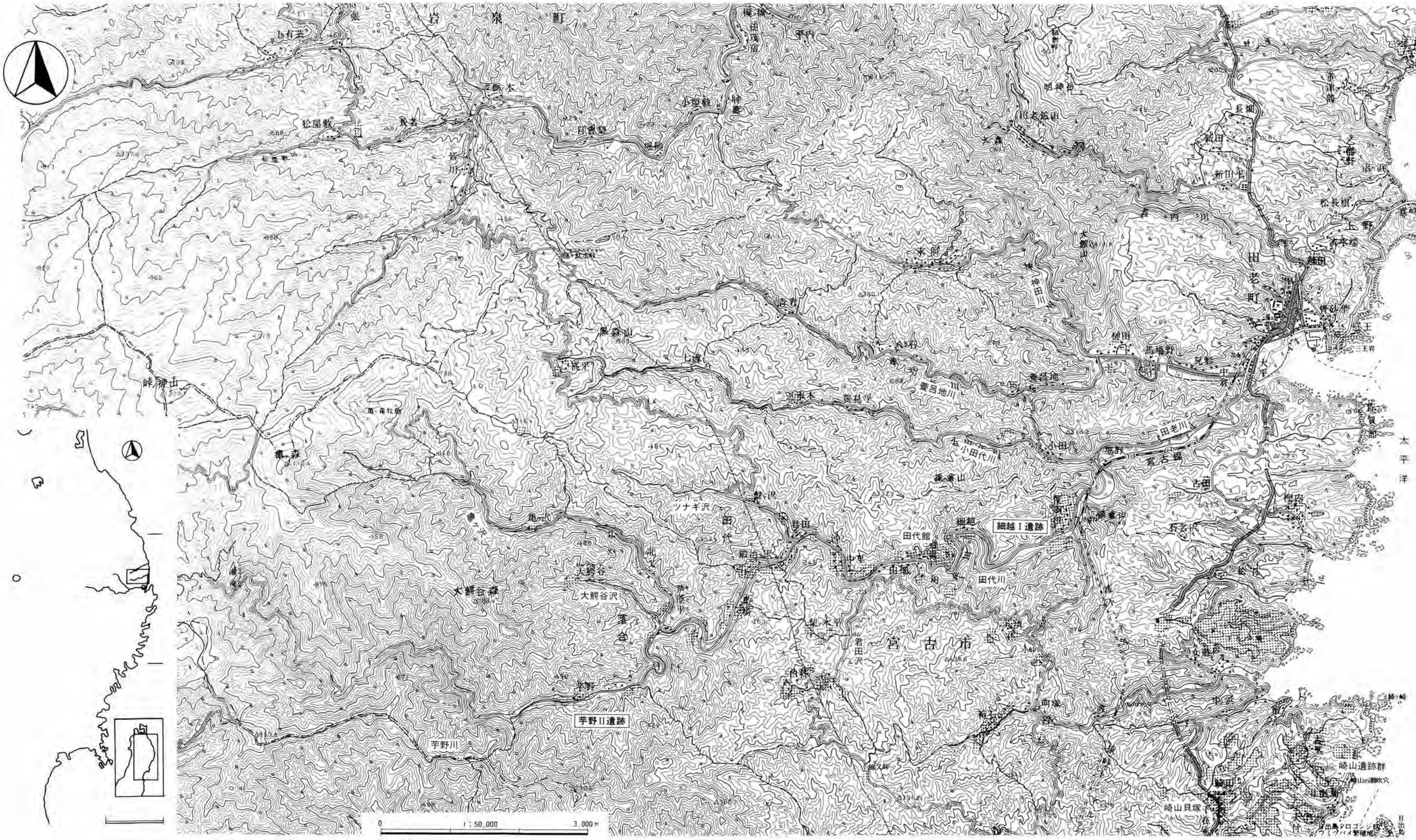
II　遺跡をとりまく環境

1．自然的環境

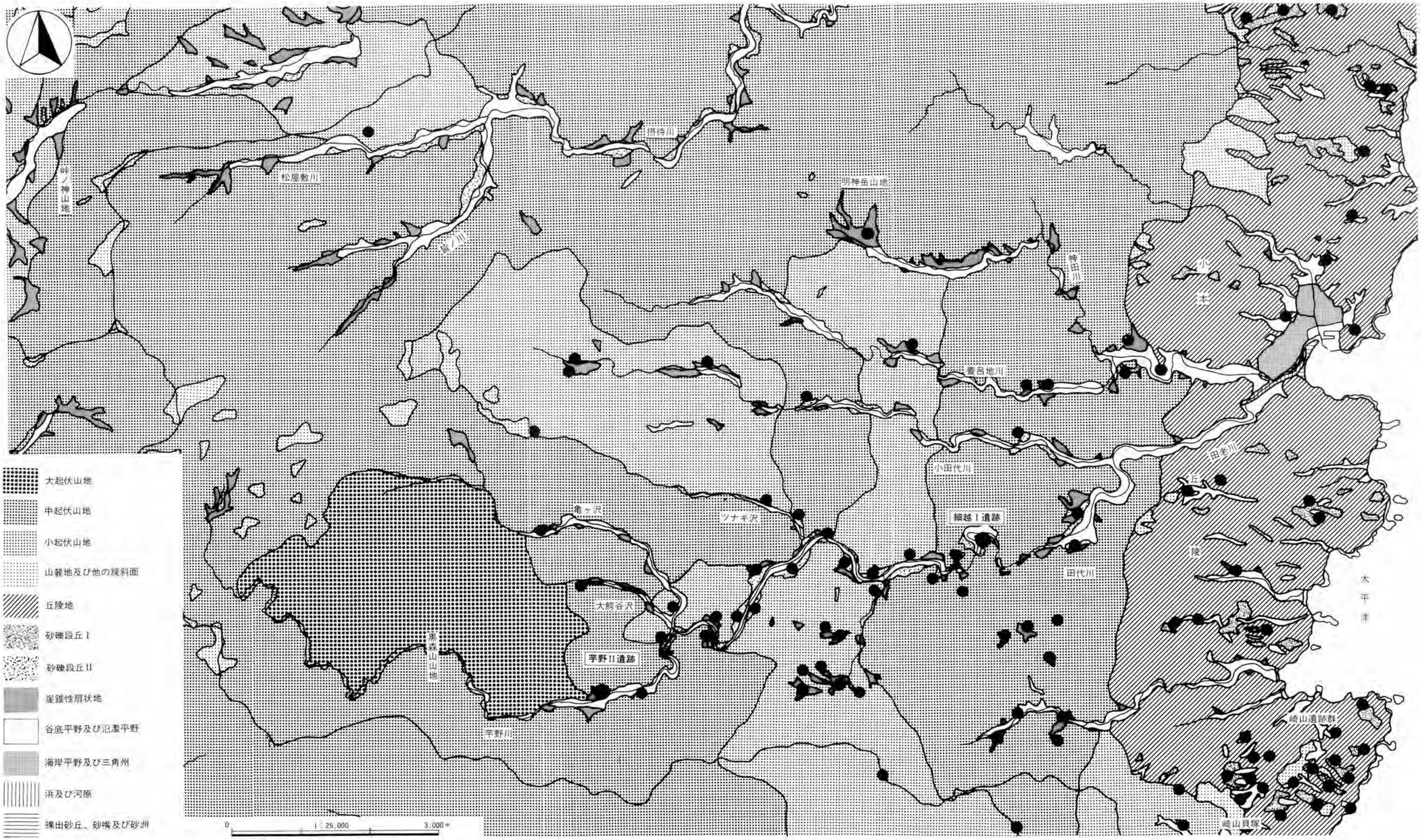
宮古市域の西北隅には亀ヶ森（1112.4m）、峠の神山（1229.7m）の山地があり、これらの山頂付近には準平原的な緩傾斜面が広がっている。現在、この地域は人工の牧草地（亀ヶ森牧地）として利用されており、大半は自然植生を失ってはいるが、局部的にはブナ林（ブナークマイザサ群落）が残されている。

田代川　この地域は田代川の源流部となっており、亀ヶ森の西側から流れ出す川を芋野川、東側から流れ出す沢を亀ヶ沢と呼んでいる。この２つの小河川と大鰐谷沢は落合地区で合流し、田代川となる。以下、流れは比較的穏やかになり、ツナギ沢、君田沢などの小河川を合わせながら佐羽根地区を境に田老町域へ入り、小田代川や神田川を合わせて、田老川と名を変え田老港にて太平洋に注いでいる。

田老川



第１図　田老川週辺遺跡分布図



第 2 図　田老川周辺地形分類図

田代川（田老川）流域の地形は、沿岸部の丘陵地と内陸部の山地に大別され、これらを貫く田代川（田老川）流域にわずかな低地や台地がみられる。

岩泉町毛無森（941.5m）から峠の神山に至る山地（峠の神山山地）は標高900m以上を有し、大きなひとつの塊状をなしている。これらの山稜部は比較的平坦であり、中起伏山地に相当する。峠の神山地の東縁部で、芋野川と亀ヶ沢に囲まれた大鰐谷森付近は比較的起伏量があり、大起伏山地に相当している。

峠の神山山地の東側に分布する山地は、ほぼ700m以下の高度を示し、一部不連続が認められるものの海岸部に向いゆるやかに高度を減じている。養呂地川河谷以南の山地は黒森山山地、以北の山地は明神岳山地と呼ばれ、いずれも起伏量が中～小程度の中起伏山地又は小起伏山地に相当する。

これらの山地の基盤岩は、亀ヶ森～大鰐谷森付近以南に古生代の泥岩が分布し、部分的に同じく古生代の珪岩質岩石が分布している。

他は大半が中生代白亜紀に貫入した花崗岩類で、宮古花崗岩体と呼ばれている。花崗岩類は周囲の古生層に対して、ホルンフェルス化作用をおよぼしており、また、中生層に対しては圧砕作用をおよぼしている。

山地東辺部付近には中生代前期白亜紀の火山活動によって生成した安山岩質岩石と中生代の砂岩などが分布し、花崗岩類の貫入により圧砕作用を受けている。

海岸線に沿って幅３～４kmにわたり分布する丘陵は、小本丘陵と呼ばれている。標高は西縁で200～240m、海岸線付近で100m程度の高度を有し、西から東へゆるやかに低下し海岸線で急崖を成す。

小本丘陵は、古い海岸段丘が開析されて生じたもので、概して段丘面の保存状態は悪く、小河川などにより樹枝状に開析されている。

基盤岩は、中生代に貫入した田老花崗岩体と呼ばれる花崗岩類を主体とし、部分的に中生代の安山岩質岩石や砂岩などが分布している。また、わずかに残った段丘面上には洪積世の砂礫が堆積している。

丘陵頂部にわずかに段丘面を残す海岸段丘以外に台地に相当するものは、田代川（田老川）流域に小規模に分布する河岸段丘であり、落合～佐羽根の中流域を中心として分布している。河岸段丘はいずれも厚さ数m以下の段丘礫層（旧河床礫層）で構成されている。

低地は、田老川の各支流にみられる小規模な谷底平野と氾濫平野のほかには、最下流部に小規模な三角洲性平野が形成されている。

また、河岸段丘や谷底平野の後背地には崖錐性扇状地が形成されている。

２．歴史的環境

田代川流域には前述したように、小規模な河岸段丘や谷底平野が形成されており、現在の集落はこうした地点を占地し形成されている。中流域の落合・芦原平・馬場・鍛冶ヶ沢・君田・沖・中里・田畑・吾妻・細越・佐羽根は、河岸段丘上に立地する集落で、ややまとまった宅地と耕作地が形成されている。一方、支流域は亀ヶ沢に亀ヶ沢・北の又、芋野川に芋野、大鰐谷

沢に大鰐谷、ツナギ沢に繋ヶ沢、君田沢に臼杆・梨ノ木平、八川に八川および小田代川上流部に笹平などの谷底平野に小規模な集落が形成されている。

縄文時代～古代の遺跡の多くもほぼ同じ立地状況を示しており、現在の集落域と重複するものが多い。同地区の遺跡についての記録で最も古いものは、大正11年に刊行された『下閉伊郡志』に中嶋吉兵衛が著した「附録　石器時代遺蹟考」であろう。中嶋はこの中で、田代地区に佐羽根・吾妻・君田の３遺跡を報告している。

下閉伊郡志

この後、わずかずつではあるが資料の蓄積があり、これらの成果をまとめて昭和61年３月に宮古市教育委員会より『分布図'86』が刊行された。

同書によると田代地区には40数ケ所の遺跡が報告されており、縄文時代～中世にわたるが、縄文時代が主体を占めるようである。時期別の分布状況をみると、縄文時代早期～前期は比較的山間部や沢の上流部などに立地しており、同中期ではほぼ全域に、同後期～晩期は田代川流域の河岸段丘上などのやや開けたところに立地する傾向がみられるようである。

縄文時代

余談ではあるが、亀ヶ沢と笹平地区の中間の亀ヶ森遺跡は、標高700ｍの山地に立地しており、市内で最も高い地点に存在する遺跡となっている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は極めて少なく、今回報告する芋野Ⅱ遺跡のみである。

古代

古代の遺跡も少なく、やはり今回報告する細越Ⅰ遺跡と芋野Ⅱ遺跡のほか、大鰐谷遺跡などが知られるのみである。

しかし、『分布図'86』は表面採集資料を中心としたものであるので、今後同地区の発掘調査が進むにつれ、異った所見が得られる可能性は大きい。

中世

田代館

中世に伴う遺跡は、田代地区唯一の城館遺跡である田代館跡がある。田代館は吾妻地区と細越地区の中間に位置し、田代川が湾曲した部分に舌状に張り出した台地（砂礫段丘Ⅰ）上に立地している。

館の構造は比較的単純で、頂部に空掘で分断された主部と副部を有し、これらの下部を２～３重の帯部が取り囲むというものである。尾根の基部は空掘で断ち切られるが、現在は吾妻と細越を結ぶ小道が通っている。

館主は田代氏とされるものの築城年代は不詳である。田村忠博氏によると、南北朝期の築城であろうとされている。

この後、三戸南部の家臣桜庭安房（田代安芸の娘婿）は田代安芸とともに閉伊地方を伐ったとされる。

また、天正19年（1591）の九戸政実の乱の折に桜庭安房は閉伊地方に滞在し、千徳・田鎖両氏に出兵の要請を行ったとされているが、結局は不首尾に終ったようである。『聞老遺事』の「九戸御陣御人数積」には「三百石　九人　田代清五郎」とある。

更に、慶長６年（1601）３月３日の『信濃守利直公岩崎御出陣人数定』には「赤幌御足軽大将　三百石　田代清五郎　此下十二人」とある。

最後に、製鉄に関連する遺跡について触れる。今回調査した細越Ⅰ遺跡からは古代に伴う鍛冶炉が検出されている。また、岩泉町域の龍ヶ飲水峠付近には近世期と思われる大規模なたたら跡である笹平鉄山が知られている。古代以降製鉄が行われたことは当地域に限らず、沿岸地方のひとつの大きな特徴ではあるが、その中にあって当地域も主要な生産地であった可能性を

第3図　細越Ⅰ遺跡遺構配置図

指摘しておきたい。おそらく、鍛冶ヶ沢や芋野（鋳物）などの地名は鉄づくりと深く結びつく地名なのだと思われる。

Ⅲ　調査の内容

１．細越Ⅰ遺跡第１次調査

(1)調査の方法（第３図）

細越Ⅰ遺跡は、田代川中流域の細越地区に位置し、田代川南岸の河岸段丘（砂礫段丘Ⅱ）上に立地している。遺跡の規模は、東西250ｍ程度、南北80ｍ程度で、面積は1.4haを超える。

遺跡の立地する河岸段丘上の平担面は、標高77ｍ～90ｍであり、西から東へおよび南から北へゆるやかに傾斜している。

また、田代川の氾濫原との比高差は７ｍ程度である。

平成３年３月の試掘調査時に、河岸段丘縁辺部の農道拡幅部分をⅠ区、農地の区画整理に伴い削平される遺跡南辺の西半部をⅡ区、同じく東半部をⅢ区として調査区を設定した。

試掘調査の結果、粗密はあるもののほぼ遺跡の全域にわたり竪穴住居跡や土壙跡等の遺構が分布していることが確認された。

この調査成果を受けて農林課と再三にわたり協議を重ねた結果、Ⅱ区とⅢ区については工法を変更し、盛土により現状保存することが可能となった。このため、農道の拡幅により破壊されることとなるⅠ区についてのみ発掘調査（本調査）を実施することとした。

本調査区は工事により破壊される部分のすべてを対象としたが、Ⅰ区東半のⅠｂ区については試掘調査段階で遺構が存在しないことが確認されており、西半部のⅠａ区に集中することとした。

調査座標は、周辺に公共座標が無かったため、農道のルートにあわせて仮に座標軸を設定しⅠａ区の中心部を原点として東西南北への距離を示した。

(2)基本層序

Ⅰ層は表土層で、黒褐色土を基本土とし、褐色土粒をわずかに含む。やや固く、ややしまりがある。

Ⅱ層は旧表土層で、黒色土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊を少量含む。固く、ややしまりがある。

Ⅲ層は地山層で、シルト質の褐色土を基本土とする。比較的層厚があるものの、東端部で漸移的に礫層へ堆移している。本層は田代川により形成された河岸段丘（砂礫段丘Ⅱ）を構成する河床堆積物であると思われる。

(3)遺構の検出状況（第３図）

本調査を実施したⅠａ区より検出された遺構は、竪穴住居跡10棟・土壙跡６基・鍛冶炉21基

・炭窯跡２基である。

このうち鍛冶炉は第１号竪穴住居跡の埋土中に集中して17基が検出されたほか、第２号竪穴住居跡～第４号竪穴住居跡の床面に伴って検出されたものがある。

他の遺構は、いずれも調査区全体に分布しており、Ⅲ層上面にて検出している。また、これらの遺構の中には重複するものもみられる。

今回の調査区は、河岸段丘の段丘崖付近に設定したことになるが、段丘南半部のⅡ区・Ⅲ区にも竪穴住居跡等の遺構を確認しており、遺跡全体では200棟以上の竪穴住居跡を有する大集落となるようである。

なお、竪穴住居跡としたもののなかには明らかにカマドを持たないものや、床面に鍛冶炉を伴うものがある。通常、前者は竪穴や竪穴状遺構などと呼称されるもので、後者は鍛冶工房跡などと呼称されるものである。

しかし、本調査では完掘できなかった遺構も多く、個別の性格について言及できる情報を収集できなかったことから、ここではこれらの遺構を竪穴住居跡と総称しておき、改めて検討を加えることとする。

また、土壙跡としたものはおおむね径が2.0ｍ以下のものについて呼称した。

(4)検出された遺構と遺物

ａ）Ⅰ区

Ⅰｂ区からは遺構が検出されなかった。Ⅰａ区から検出された遺構・遺物は次のとおりである。

第１号竪穴住居跡（第４図～第５図）

調査区西端部に位置する。第１号炭窯跡に切られるほか、埋土中より多数の鍛冶炉が掘り込まれている。

平面形　全体の1/4ほどを検出したが、平面形は不整方形を呈すようである。規模は、北東～南西方向で6.85ｍ、北西～南東方向で5.0ｍを検出した。壁は、ややゆるやかに立上り、壁高は0.35～0.2ｍを計る。主軸方向は不明である。

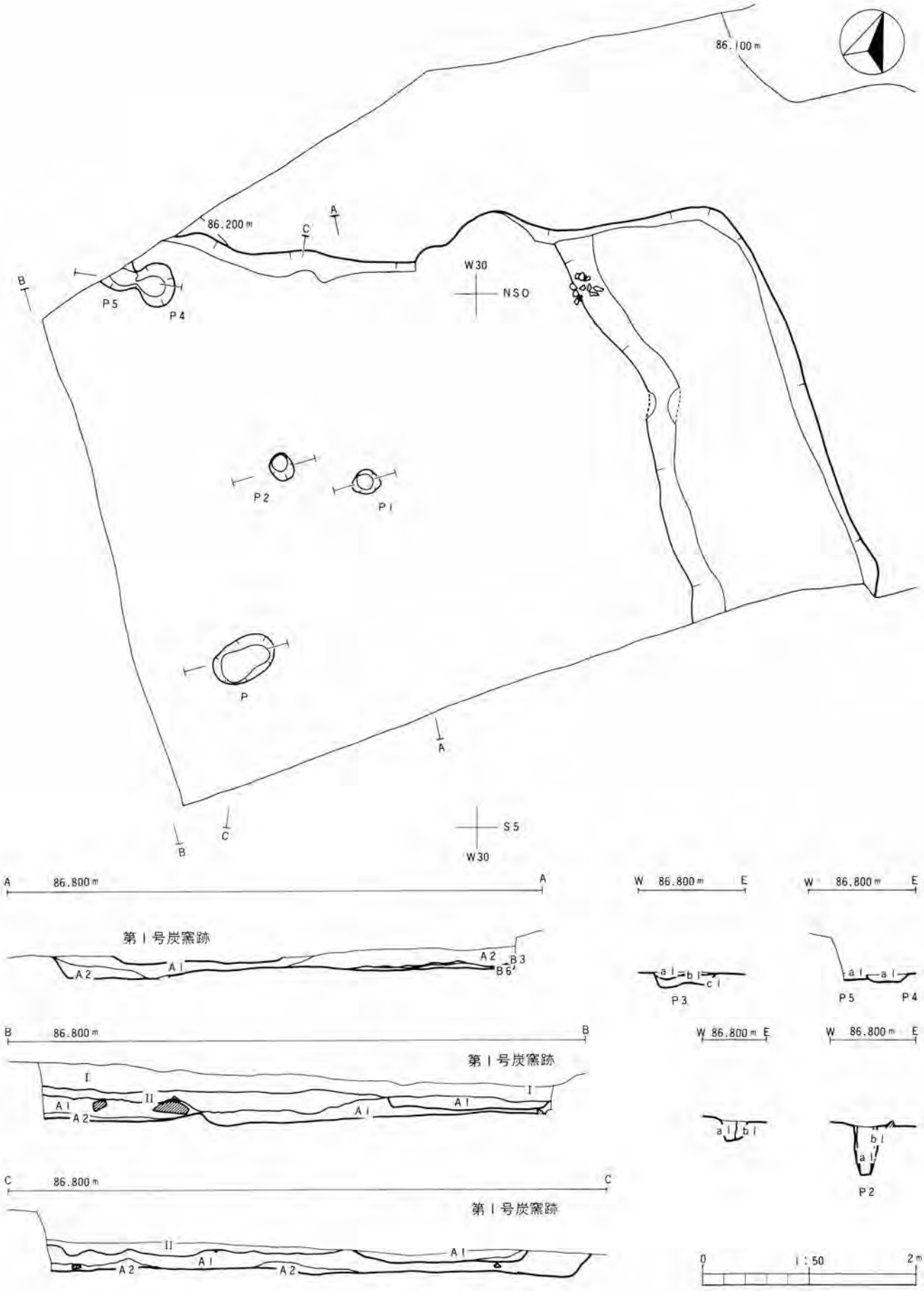
埋土　埋土はＡ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層・Ｅ層に大別される。

Ａ層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊などをやや多く含むほか、炭化物粒を微量含む。３層に細分され、Ａ１層とＡ３層がやや暗く、Ａ２層がやや明るい。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

Ｂ層は暗褐色土または黒褐色土を基本土とし、６層に細分される。

Ｂ１層・Ｂ４層・Ｂ５層は暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊などをやや多く含むほか少量の炭化物粒、焼土粒、スラグなどを含む。Ｂ１層はやや柔らかく、ややしまりがない。Ｂ４層とＢ５層はやや固く、しまりも中程度である。Ｂ４層には焼土粒とスラグがほとんど含まれない。

Ｂ２層・Ｂ３層・Ｂ６層は黒褐色土を基本土とし、黒色土塊・暗褐色土塊・褐色土塊などをやや多く含む。各層とも多量の炭化物粒を含むほか焼土粒やスラグも含む。Ｂ２層はやや柔らかく、しまりがないが、Ｂ３層とＢ６層はやや固く、しまりも中程度である。



第4図　第1号竪穴住居跡

Ｃ層はＣ１層のみで、やや明るい黒褐色土を基本土とし、黒色土塊・暗褐色土塊・褐色土塊などをやや多く含む。炭化物粒と焼土粒を少量含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

本層はＢ６層に類似するが、固さ・しまり・混入物に差異がみられる。また、後述するように本層の上面と下面から多くの鍛冶炉が検出されている。

Ｄ層は褐色土を基本土とし、２層に細分される。Ｄ１層はＤ２層よりやや明るい。両層とも暗褐色土塊などをやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

床面は、やや凹凸があり、東端部がわずかに落ち込んでいる。貼床は認められない。

柱穴　床面にはＰ１～Ｐ５のピット類を検出している。このうち柱穴に相当するのがＰ１とＰ２であり、いずれも柱痕跡を確認している。

Ｐ１は開口部径0.25ｍ、深さ0.45ｍで、柱痕跡の直径は0.16ｍである。ａ１層は柱痕跡で、やや明るい暗褐色土を基本土とし、少量の褐色土塊を含む。ｂ１層は掘方で、やはりやや明るい暗褐色土を基本土とするが、多量の褐色土塊を含む。両者ともに柔らかくしまりがない。

Ｐ２は開口部径0.25ｍ、深さ0.2ｍで、柱痕跡の直径は0.12ｍである。ａ１層は柱痕跡で、暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊などをやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりがない。ｂ１層は掘方で、やや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さ・しまりともに中程度である。

Ｐ１とＰ２の柱間寸法は芯々で0.75ｍほどであり、同時に機能したものでない可能性は大きいと思われる。

Ｐ３は長軸0.6ｍ、短軸0.4ｍ、深さ0.15ｍを計る。埋土はａ１層・ｂ１層・ｃ１層に大別される。ｃ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを少量含む。固さ・しまりともに中程度である。ｂ１層は焼土層であり、焼成を受け赤変しており良く焼けしまっている。ａ１層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。やや柔らかくしまりがない。

Ｐ３は後述する鍛冶炉に類似するが、埋土中や周辺部にスケール、クラグ、炭化物粒を検出できなかったために本住居跡に伴う施設と見做しておく。

Ｐ４とＰ５は重複しており、Ｐ４が新しい。いずれも深さが0.05ｍほどの皿状のピットである。Ｐ４・Ｐ５ともにやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含むが、Ｐ４のほうが混入割合が大きい。両者とも固さ・しまりともに中程度である。

出土遺物（第26図）

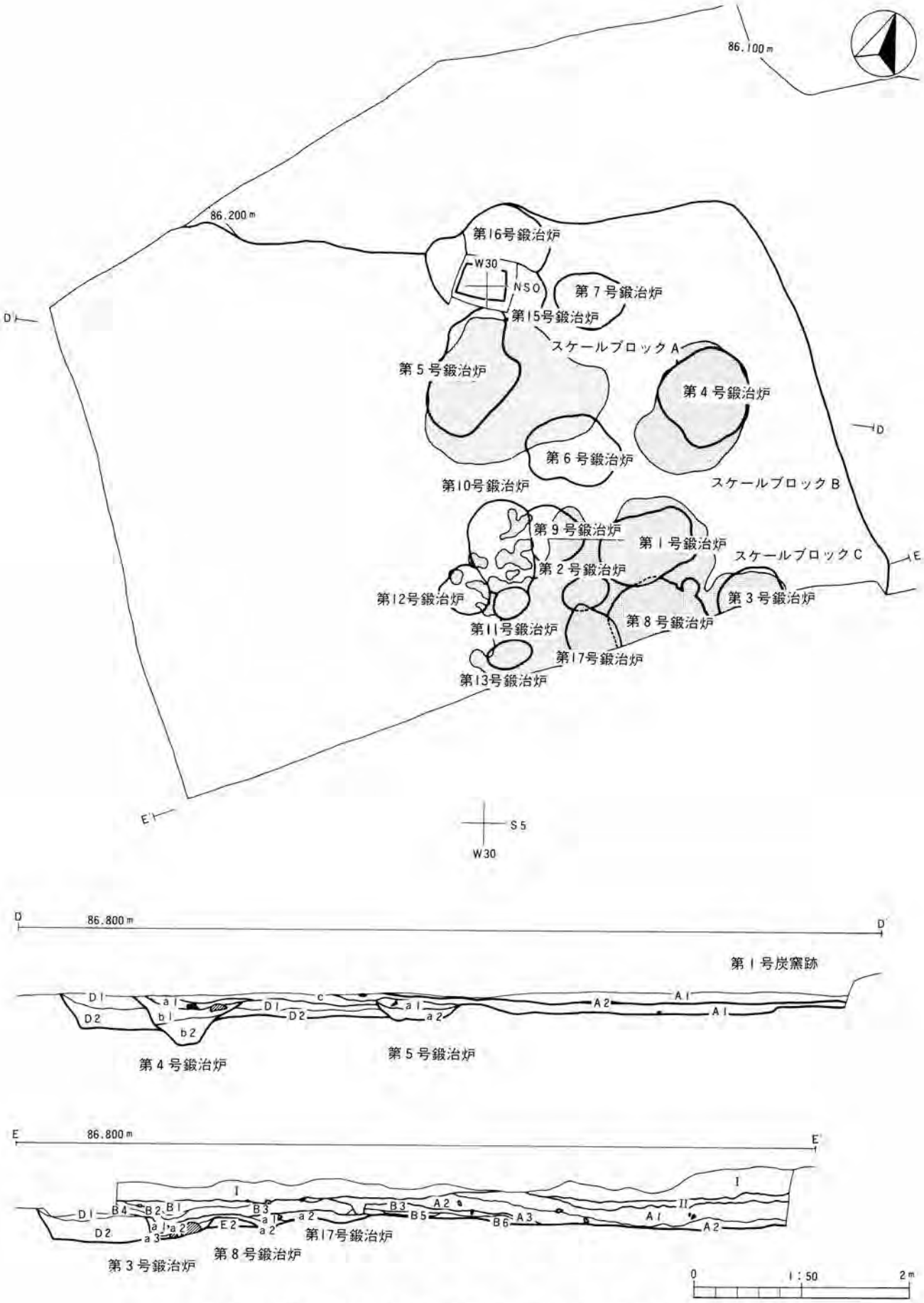
遺物の出土量は少ない。

12・13は板状の鉄製品である。いずれも先端部に向い次第に幅が狭くなっている。下半部を欠き全体の形状は不明である。

15は鉄塊あるいは椀形滓かと思われる。一部欠損しているが直径10ｍ程の不整円形を呈し、厚さは2.8cmほどである。上面はスラグ状を呈し、一部発泡しているところもある。下面は、砂粒が多く付着している。内部は比較的充実しており、メタルチェッカーでは強く反応する。

鍛冶炉群（第５図～第６図・第１表）

第１号竪穴住居跡の埋土中に17基の鍛冶炉を検出している。第５図は鍛冶炉群の検出状況を図示したものである。また、トーンで示したのはハンマースケールの集中が肉眼で確認できた



第5図　第1号竪穴住居跡土層断面図・鍛冶炉群検出状況

範囲である。これによると第１号竪穴住居跡の東半部に鍛冶炉が集中し、更にこの上面に３ケ所のハンマースケール集中ブロックが存在していることがわかる。

ここでは、ハンマースケール集中ブロックをスケールブロックＡ～Ｃと呼称し、各々のブロックに覆われる鍛冶炉群をＡ群～Ｃ群と呼称する。

また、土層断面の観察によると、第１号住居跡の廃棄直後の床面上にＤ層をつめて平担面を造成した後にＢ群とＣ群が掘り込まれる。この後、Ｂ群をＣ層により埋めてＡ群が掘り込まれている。従って、おおまかにはＢ群・Ｃ群からＡ群への変遷が確認される。

Ａ群　次に各群における重複関係であるが、Ａ群は、最も古い鍛冶炉が第16号鍛冶炉であり、これを切って第15号鍛冶炉が掘り込まれ、更に第15号鍛冶炉を切って第５号鍛冶炉が掘り込まれる。同様に第16号鍛冶炉を切って第14号鍛冶炉が掘り込まれる。

他には第16号鍛冶炉と第７号鍛冶炉が各々単独で存在している。

Ｂ群　Ｂ群は、第４号鍛冶炉のみである。

Ｃ群　Ｃ群は、最も古い鍛冶炉が第１号鍛冶炉であり、続いて第８号鍛冶炉、第17号鍛冶炉、第２号鍛冶炉の順に変遷する。

また、第３号鍛冶炉と第８号鍛冶炉はａ２層を共有しており、同時期か極めて近い時期に使用されたことが想定される。

更に、第10号鍛冶炉は第11号鍛冶炉、第12号鍛冶炉を切る。また、第11号鍛冶炉は第２号鍛冶炉にも切られる。

第９号鍛冶炉は第10号鍛冶炉とａ１層～ｂ２層を共有しており、同時期か極めて近い時期に使用されたことが想定される。

他には第13号鍛冶炉が単独で存在している。

これらの鍛冶炉は大半が不整円形～不整楕円形を呈し、長軸方向が0.9m程度の比較的大形のもの、0.7m～0.5m程度の中形のもの、0.4m程度の小形のものの３者に分けられる。

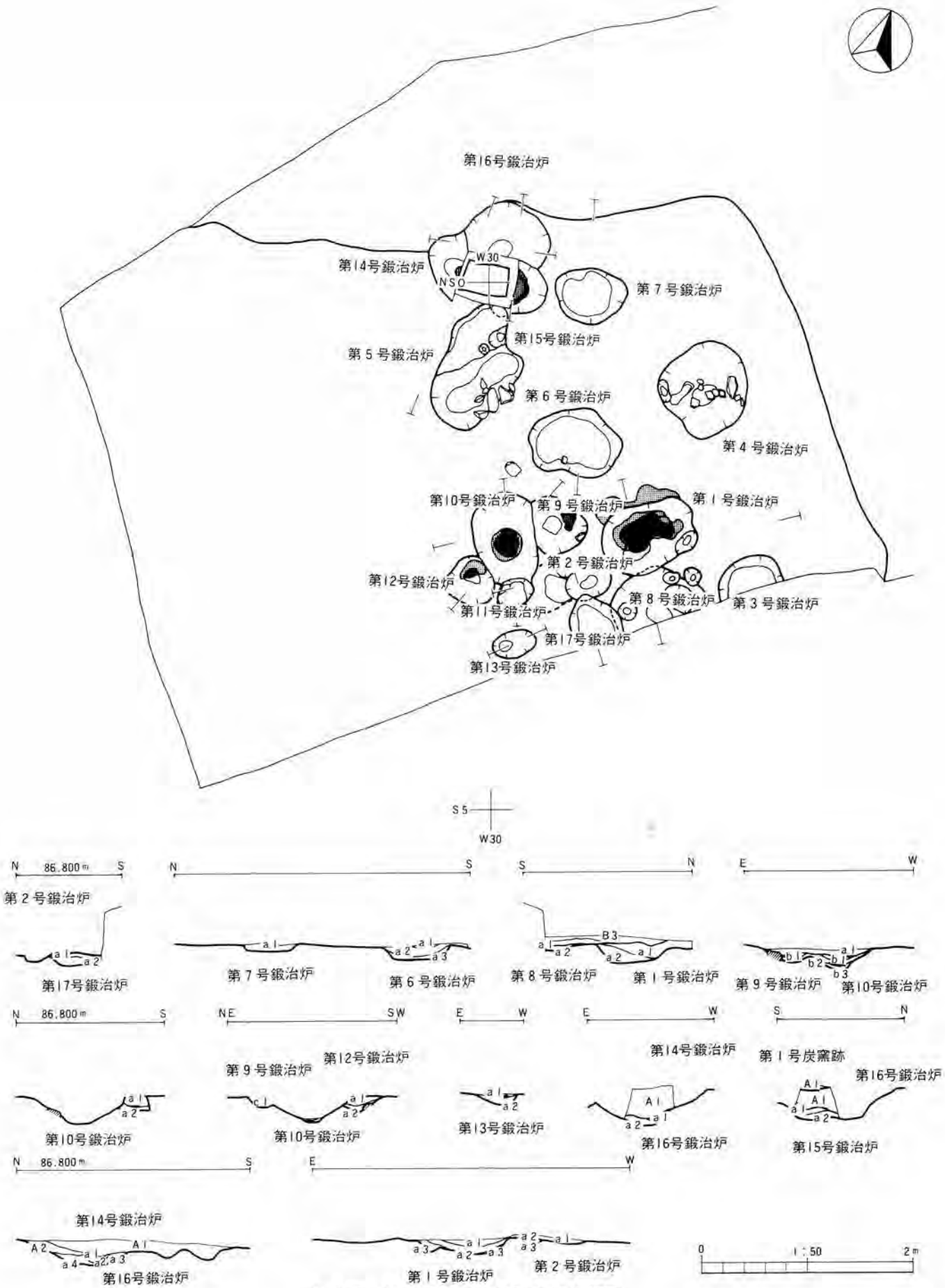
断面形は擂鉢形を呈するものと、箱形を呈するものの２者が認められ、いずれも壁の立上りはゆるやかである。

底面はいずれも焼成を受けており、酸化状態で焼成を受けて赤変した部分と、環元状態で焼成を受けて褐灰色に変色した部分がみられる。この範囲の明瞭なもののみをトーンで図示した。

この焼成を受けた範囲を層として確認しているのは第９号鍛冶炉・第10号鍛冶炉・第14号鍛冶炉・第15号鍛冶炉であり、上層または上面が褐灰色を呈し、下層または下面が赤変した部分となっている。他のものはいずれも掘込みの底面が焼成を受けただけのものである。

焼成を受けた範囲は第１号鍛冶炉を除いて径0.2m程の不整円形を呈している。これらの上面は直接火を受けたというより、更に上面に炉床がありここから熱浸透を受けて変色したという感じであった。

出土遺物は、14が第６号鍛冶炉の埋土中から出土した鉄塊で、メタルチェッカーで強く反応する。他には大量のスラグ・ハンマースケールがあるものの定量的な分析は終了していない。また、先端部が溶融したフイゴ羽口片が若干出土している。しかし、炉壁のような炉の上部構造を想定させる置物は出土していない。



第6図　第1号竪穴住居跡内鍛冶炉群

	分類	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面の状態	埋土の状態			
第1号鍛冶炉	C	B	A	91	60	17	A	a層	A、B		
第2号鍛冶炉	C	B	A	45	31	7	C		B、C		
第3号鍛冶炉	C	?	A	?	?	20	C	a層	A、D		
第4号鍛冶炉	B	A	B	94	85	43	C	a層	A	b層	D
第5号鍛冶炉	A	B	A	124	68	18	C	a層	B		
第6号鍛冶炉	A	B	A	90	62	13	C	a層	B		
第7号鍛冶炉	A	B	A	68	52	6	C	a層	B		
第8号鍛冶炉	C	?	A	?	?	6	C	a層	A、C		
第9号鍛冶炉	C	A	?	60	50	9	A	a層	B、C		
第10号鍛冶炉	C	B	B	86	58	25	A	a層	C	b層	B
第11号鍛冶炉	C	B	A	36	28	12	C	a層	C		
第12号鍛冶炉	C	A	B	46	47	14	A	a層	B、C		
第13号鍛冶炉	C	B	B	42	26	11	C	a層	C、D		
第14号鍛冶炉	A	?	A	?	?	16	C	a層	A、C		
第15号鍛冶炉	A	?	A	?	?	19	A	a層	B、D		
第16号鍛冶炉	A	?	B	?	?	27	C	a層	A、C		
第17号鍛冶炉	C	?	A	?	?	13	C	a層	C		
(No2H) 第18号鍛冶炉	—	B	B	48	38	10	A	a層	B	b層	D
(No3H) 第19号鍛冶炉	—	B	B	28	12	6	B	a層	B	b層	D
(No3H) 第20号鍛冶炉	—	B	B	50	38	5	B	a層	B	b層	C
(No4H) 第21号鍛冶炉	—	A	B	50	45	10	A	a層	E	b層	D

〈分　　類〉
- A－A群（スケールブロックAに覆われるもの）
- B－B群（スケールブロックBに覆われるもの）
- C－C群（スケールブロックCに覆われるもの）

〈平　面　形〉
- A－円形を基調とするもの
- B－楕円形を基調とするもの

〈断　面　形〉
- A－箱形を呈するもの
- B－擂鉢状を呈するもの

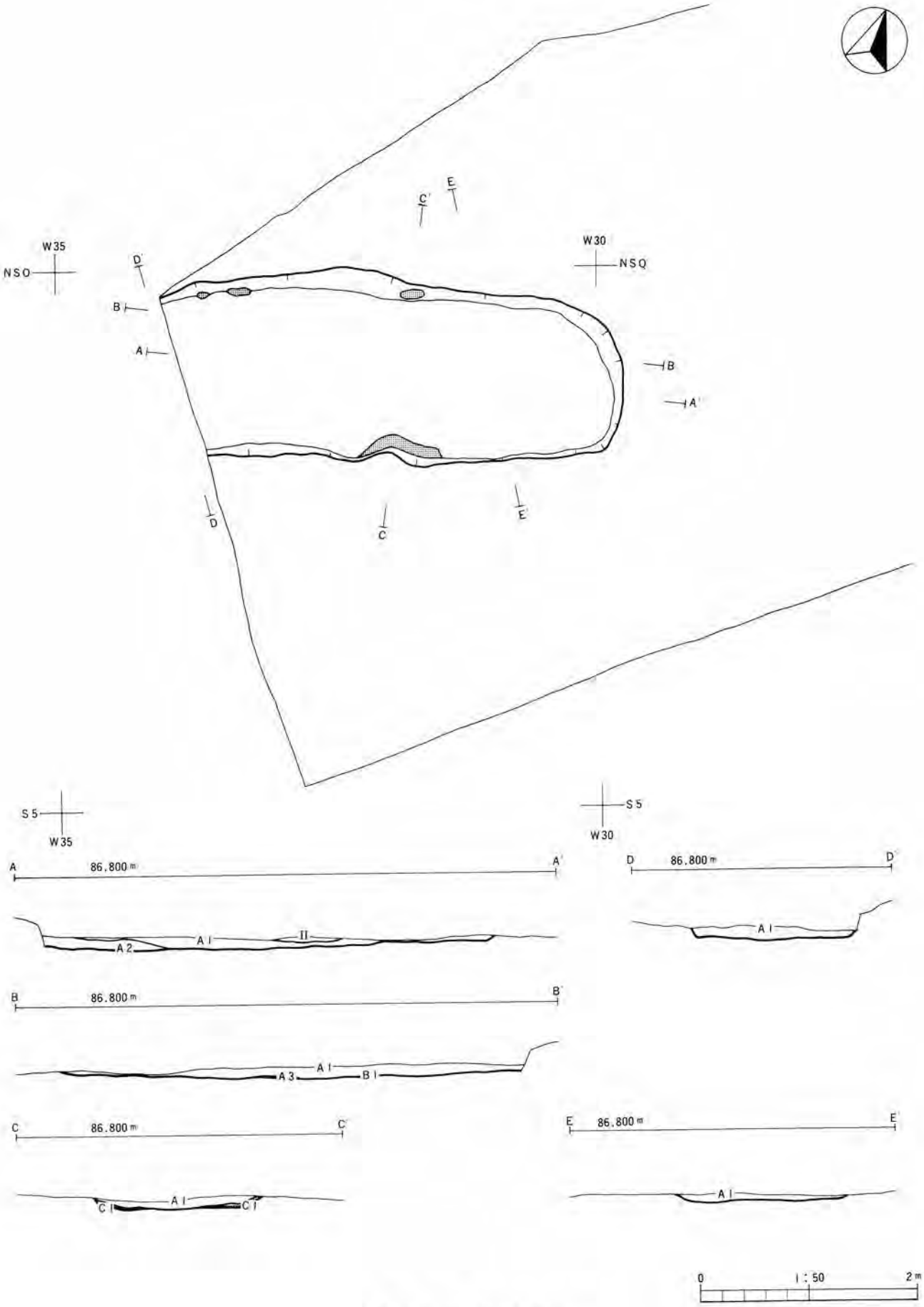
※分類基準

〈底面の状態〉
- A－中央部が環元状態で、周辺部が酸化状態で焼成を受けたもの
- B－酸化状態で焼成を受けたもの
- C－環元状態で焼成を受けたもの

〈埋土の状態〉
- A－黒色土を基本土とする堆積層
- B－黒褐色土を基本土とする堆積層
- C－暗褐色土を基本土とする堆積層
- D－褐色土を基本土とする堆積層
- E－焼土層

（複数の層が併記してあるものは、左側が上層であることを示す）

第1表　鍛冶炉集計表


W35
NSO
W30
NSQ
S5
W35
S5
W30
A
86.800m
A'
A1
A2
II
B
86.800m
B'
A1
A3
B1
C
86.800m
C'
A1
C1
C1
D
86.800m
D'
A1
E
86.800m
E'
A1
0
1:50
2m

第7図　第1号炭窯跡

第１号炭窯跡（第４図・第７図）

調査区西端部に位置し、第１号竪穴住居跡を切る。検出面は第１号竪穴住居跡Ａ１層上面である。

平面形　平面形は、長楕円形を呈し、規模は長軸4.3m以上、短軸1.8m、深さ0.1mである。

埋土　埋土はＡ層・Ｂ層・Ｃ層に大別される。Ａ層は３層に細分される。いずれも黒褐色土を基本土とし、黒色土塊や暗褐色土塊などをやや多く含むが、Ａ３層のみは少量の焼土粒を含む。いずれの層も多量の炭化物粒を含み、やや固く、しまりは中程度である。

Ｂ層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒色土塊をやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。やや固く、しまりは中程度である。

Ｃ層は焼土層であり、良く焼けしまり赤変している。

底面は平坦で、やや固いが貼床は認められない。また、強く焼成を受けたのは壁際のみで、中央部ではほとんど焼土を確認できなかった。

煙出しや焚口等の付属施設は認められず、出土遺物も無かった。

第２号竪穴住居跡（第８図・第９図）

調査区西半部に位置し、第１号竪穴住居跡東端より３ｍ（芯々では10ｍ）離れている。全体の1/2程度を精査した。

平面形　平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は東西4.8m、南北3.2m以上、深さ0.45mを計る。

埋土中に生活面（床面）が１面確認されており、新旧２時期の変遷が判明した。このため新期をＩ期、旧期をII期とする。

Ｉ期　Ｉ期は、耕作時の削平と撹乱により著しく破壊されており、全体の平面形を握把できなかったが、II期よりはやや内側に入り込む様である。

埋土　埋土はＡ層・Ｂ層・Ｃ層に大別され、比較的撹乱の少ない東半部のみで確認された。

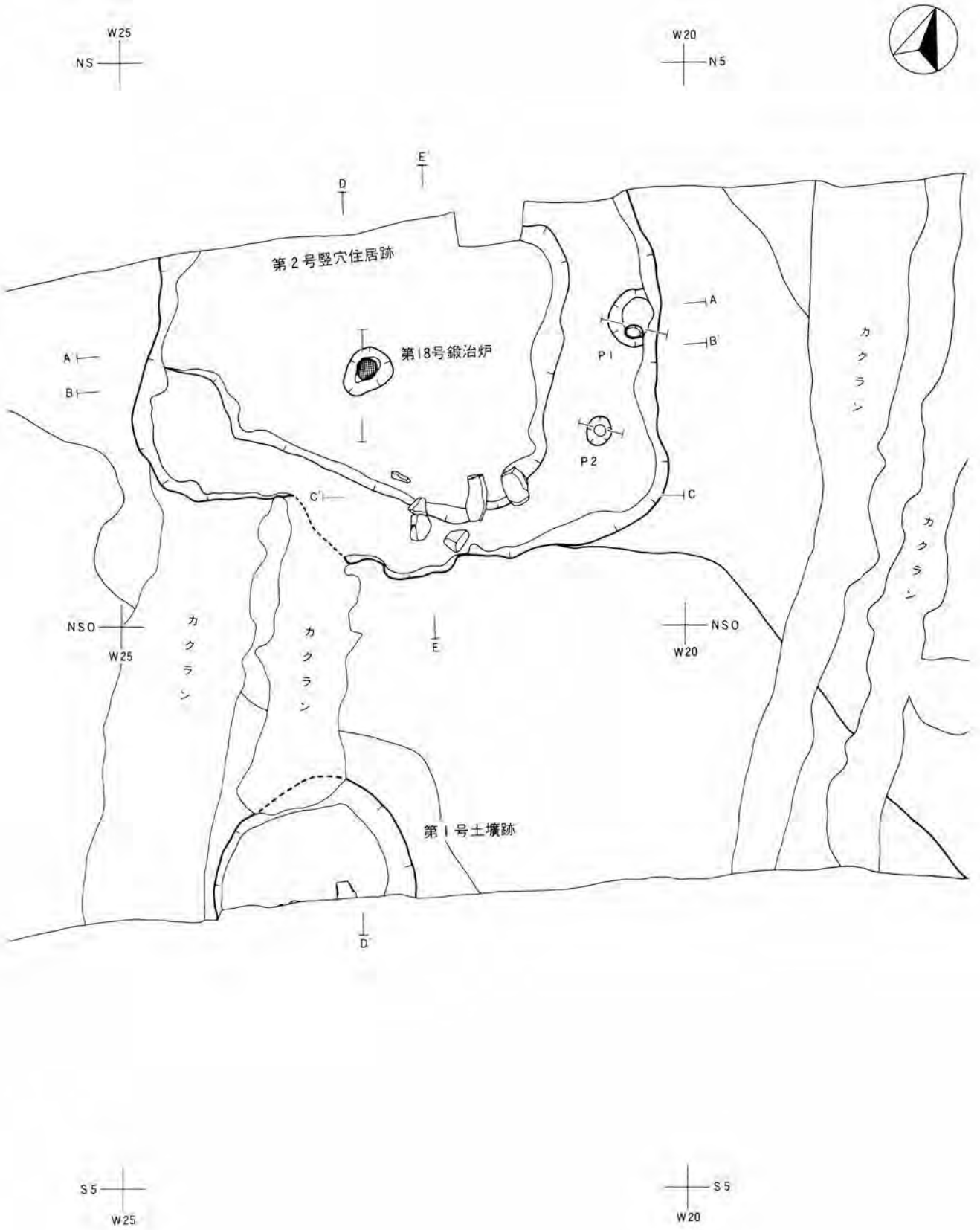
Ａ層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを少量含むほか炭化物粒を少量含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

Ｂ層はカマド付近にのみ堆積し、カマドの崩壊土と思われる。４層に細分される。Ｂ１層はやや明るい暗褐色土を基本土とし褐色土塊などをやや多く含む。柔らかくしまりがない。Ｂ２層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりがない。Ｂ３層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。柔らかくしまりがない。Ｂ４層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。固さ、しまりともに中程度である。いずれの層も炭化物粒を少量含む。

Ｃ層は焼土層であり、赤褐色土を基本土とし、上面が明赤褐色を、下面が褐色を呈している。良く焼けしまっている。

床面はＤ層上面であるが、やや柔らかく貼床も認められない。柱穴は確認されなかった。

カマド　床面のやや南東寄りにカマド石組部に相当するかと思われる亜角礫が５個認められる。わずかに焼成を受けてはいるが、床面上に置いてある状態で、特に掘り込み等は伴っていない。あるいは原位置を留めていない可能性も考えられる。Ｂ層はこの周辺にのみ堆積している。これらの礫から北側にやや離れた部分に焼土層（Ｃ層）が堆積し、火床面あるいは焚口部に相当す



第8図　第2号竪穴住居跡・第1号土壙跡

ると思われる。この他に煙道部などの付属施設は検出されなかった。

Ⅱ期　Ⅱ期は、冒頭で設明した平面形を呈する。埋土はＤ層・Ｅ層・下層に大別される。

埋土　Ｄ層は黒褐色土を基本土とし、２層に細分される。Ｄ１層は褐色土塊や暗褐色土塊を含むほか、炭化物粒を少量含む。やや柔らかく、ややしまりがない。Ｄ２層は暗褐色土塊を含むほか、炭化物粒をやや多く含む。固さは中程度で、ややしまりがない。

Ｅ層は暗褐色土を基本土とし、８層に細分される。いずれも褐色土塊や黒褐色土塊などを多く含む。固さ、しまりともに中程度である。Ｅ３層のみは黒褐色土を基本土とする。いずれの層も炭化物粒を含むが、Ｅ３層・Ｅ６層・Ｅ７層で特に多い。

また、Ｅ４層には多量のハンマースケールが含まれていた。

床面は、西側を除き２段に掘り込まれ、上面の深さ0.2m程度、下面の深さ0.45m程度である。両面ともほぼ平坦で、やや固いが貼床は認められない。

上面の東壁寄りで柱穴状のピットを２基検出している。Ｐ１は開口部径0.4m、深さ0.35mで、径0.12mの柱痕跡を確認している。ａ１層は柱痕跡で、やや暗い暗褐色土を基本土とする柔らかくしまりのない層である。ｂ層は掘り方埋土で２層に細分される。ｂ１層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。柔らかくしまりがない。ｂ２層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。柔らかくしまりがない。Ｐ２は開口部径0.2m、深さ0.25mを計る。柱痕跡を確認したものの断面からはずれてしまっている。ｂ１層は掘り方埋土で、暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。柔らかくしまりがない。

鍛冶炉　下面の中央からやや南寄りに第18号鍛冶炉を検出している。

第18号鍛冶炉は長軸0.48m、短軸0.38mの不整楕円形を呈し、深さは0.1mを計る。埋土はａ１層とｂ１層に大別される。ａ１層は黒褐色土を基本土とし、黒色土塊や暗褐色土塊をわずかに含むほか、多量のハンマースケールを含む。柔らかくしまりがない。ｂ１層は焼土層で、上面は環元状態で焼成を受けたものと思われ、赤灰色を呈し、この下位がにぶい赤褐色で更に下位は赤褐色～褐色を呈している。非常に良く焼成を受けて固くしまっている。

出土遺物（第25図・第26図）

１・２は土師器甕である。１は頸部に強い屈曲を有し、口縁部が外反する。口縁部幅は狭い。体部はほぼ直上に立上がり、下端部でややすぼまる様である。器面調整は、外面の口縁部付近が横方向の弱いヘラナデで、体部が縦～斜方向の弱いヘラナデである。内面は横方向の弱いヘラナデである。２も土師器甕であるが、上半部を欠き器形は不明である。底部はほとんど張り出しが認められない。器面調整は、外面が斜方向と下端部で横方向の弱いヘラナデで、内面は横方向の弱いヘラナデである。

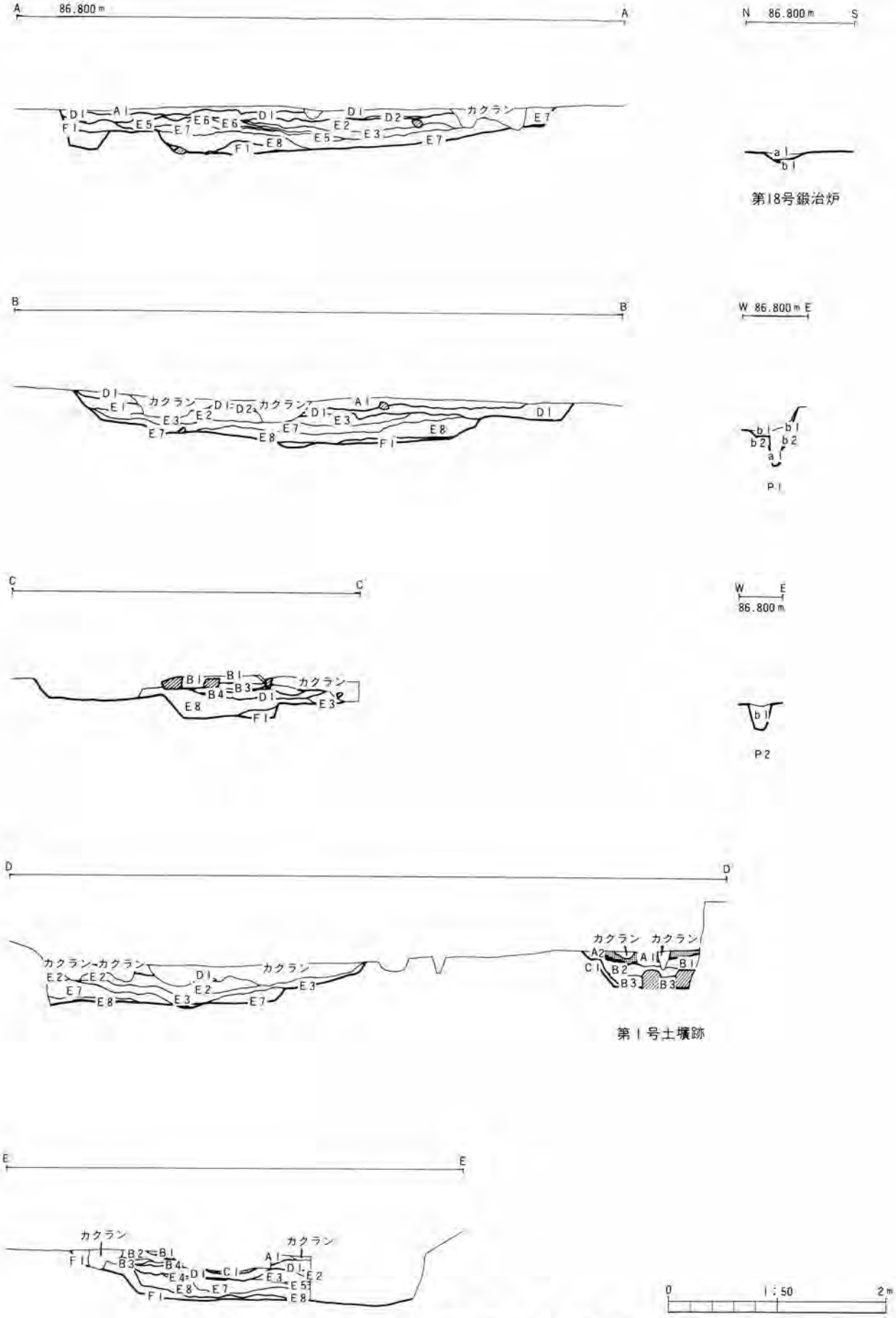
16は鉄鏃で、現存値は幅3.3m、長さ4.5mである。箭頭部は鋒が広く、逆刺を有するもので、両側縁はやや膨らみを有する。逆刺と篦は欠損している。

17・18は鉄塊でありメタルチェッカーで強く反応する。

39は未使用のフイゴ羽口であり、外径7.5cm、内径3.0cmである。

第１号土壙跡（第８図・第９図）

第２号竪穴住居跡の南約２mに位置する。全体の1/2程度を精査した。



第9図　第2号竪穴住居跡・第1号土壙跡土層断面図

平面形は不整円形を呈し、規模は東西で1.7m、南北で1.1m以上、深さ0.35mである。

埋土は、A層・B層・C層に大別される。A層は焼土層で2層に細分される。A1層は、にぶい赤褐色土を基本土とし、明赤褐色土塊、褐色土塊、暗褐色土塊などをやや多く含む。やや固くしまりは中程度である。A2層は赤褐色土を基本土とし、明赤褐色土塊や褐色土塊を含む。やや固くしまっている。両層ともに二次的（人為的）な堆積層だと思われる。

B層は暗褐色土を基本土とし、3層に細分される。B1層は黒褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。B2層とB3層は褐色土塊などを多く含むが、特にB2層に多い。3層ともに固さ、しまりともに中程度である。

C層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊をやや多く含む。やや固くしまりは中程度である。

出土遺物は無い。

第3号竪穴住居跡（第10図～第12図）

調査区西半部に位置し、第2号竪穴住居跡東端より11.5m、第10号竪穴住居跡東端より0.8m離れている。

平面形　平面形は大略方形を呈し、規模は東西6.8m、南北3.7m以上、深さ0.3mを計る。

埋土　埋土はA層・B層・C層・D層・E層・F層に大別される。D層とE層は第2号土壙跡の埋土であり後述する。また、F層はカマドに伴う焼土層である。

A層は黒色土を基本土とし、暗褐色土塊や黒褐色土塊を多く含む。固さは中程度で、ややしまりがある。

B層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊を多く含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。

C層は焼土層であるが、二次的に堆積したものである。

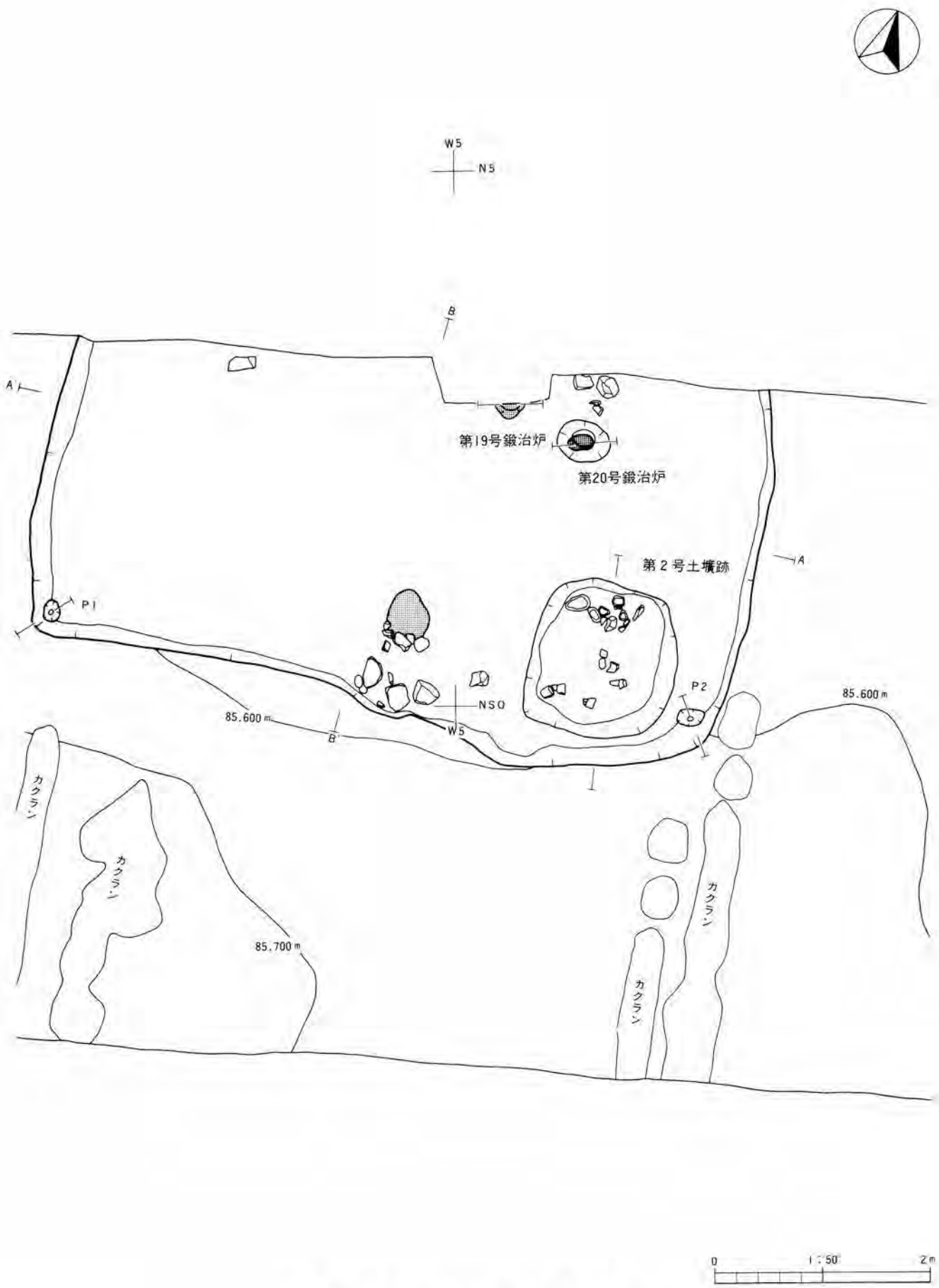
床面は、ほぼ平坦であり、やや固い。南壁寄りに一段高くなった部分が認められたが、平面で捉えられるほど明瞭なものではなかった。

南西隅と南東隅に柱穴状のピットを確認している。P1は開口部径0.2m、深さ0.25mである。埋土はa1層のみで、暗褐色土を基本土とし、褐色土塊をわずかに含む。柔らかくしまりがない。P2は開口部径0.25m、深さ0.1mであり、やはり柔らかくしまりのない暗褐色土などが堆積していたようである。

カマド　カマドは南壁ほぼ中央に位置する。南壁に接して径0.8mの範囲に焼成を受けた亜角礫が集中していた。しかし、これらの礫は一部床面に密着するものが認められるものの大半は床面からやや浮いた状態で検出された。また、礫のすえ方に相当するピット類も確認されていない。

これらの礫の北側に東西0.4m、南北0.6mの範囲に焼土層（F層）が堆積していた。比較的良く焼成を受けて赤変しているが、やや柔らかく、ややしまりがない。

土壙跡　カマドの東わきに第2号土壙跡を検出している。この土壙跡は第3号竪穴住居跡床面から掘り込まれたもので、大略隅丸方形を呈している。規模は東西、南北ともに1.4mで深さは0.5mである。埋土はD層とE層に大別される。D層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。柔らかくしまりがない。E層は4層に細分されるが、いずれも人為的な堆積と思われる。E1層とE4層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊を多く含む。E2層は、



第10図　第３号竪穴住居跡・第２号土壙跡

やや明るい暗褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊・褐色土塊・黒褐色土塊を多く含む。Ｅ３層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を多く含む。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりがない。また、土器片や鉄器、スラグなどの遺物を含んでいる。

鍛冶炉　床面の北東部に鍛冶炉を２基検出している。

第19号鍛冶炉は、東西0.28ｍ、南北0.12ｍ以上である。埋土はａ層とｂ層に大別される。ａ１層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や焼土粒をわずかに含む。柔らかくしまりがない。ｂ１層は焼土層で比較的良く焼成を受け赤変しているが、環元状態で焼成を受けた部分は認められない。固さともに中程度である。

第20号鍛冶炉は、楕円形を呈し、東西0.5ｍ、南北0.38ｍを計る。埋土はａ層・ｂ層に大別される。ａ１層は黒褐色土を基本土とし、下面には環元状態を受けた部分（褐灰色）が確認された。やや固く、しまりは中程度である。ｂ層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。また、ｂ１層中には、やや多くの焼土粒が含まれていた。両者ともに固さしまりとも中程度である。

これらの鍛冶炉内および周辺からは、ハンマースケールやスラグなどがほとんど検出されなかった。

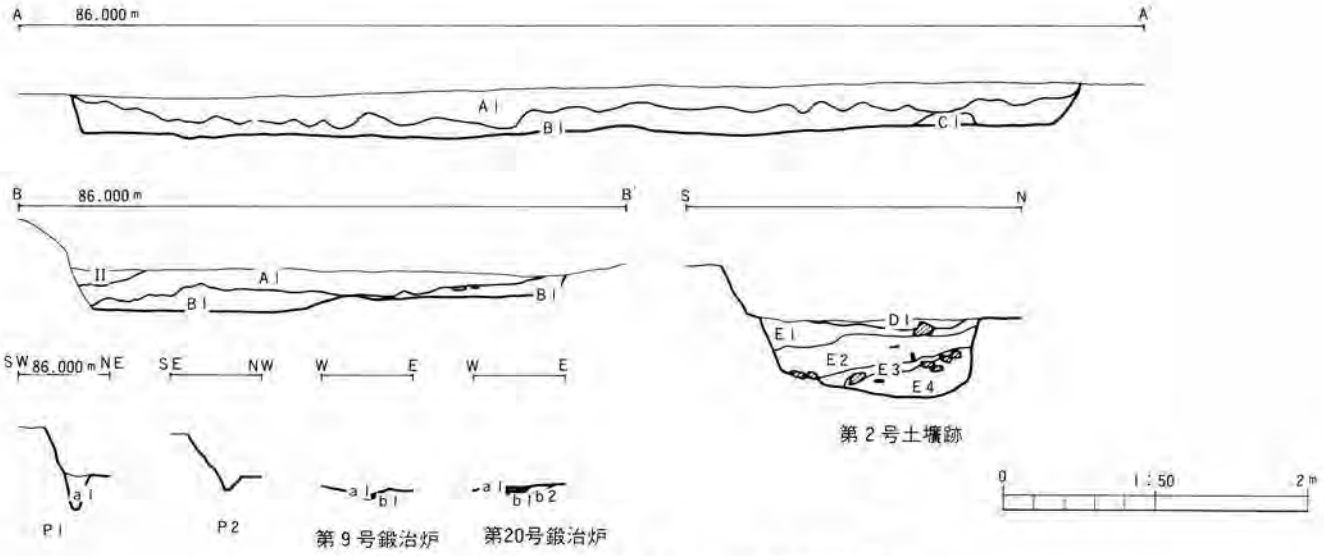
出土遺物（第26図・第27図）

出土遺物はあまり点数は多くはないもののほぼ全域から土器片・鉄器・スラグなどが出土している。カマド付近のＢ１層中に鉄器が、第２土壙跡のＥ層中に鉄器・スラグ・土器片などがやや集中する傾向がみられた。

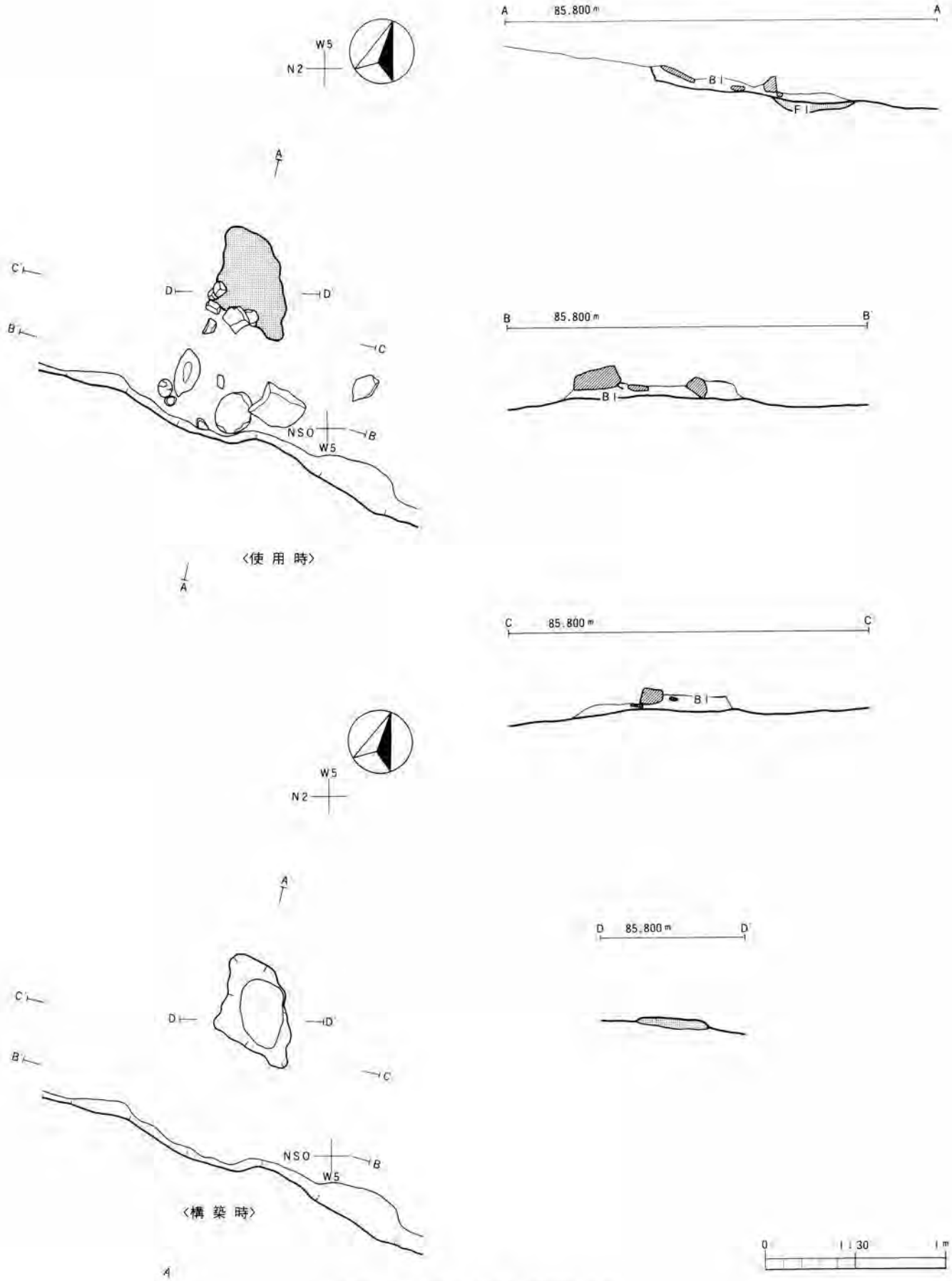
19～22はカマド周辺から出土した鉄器で、19～21は断面形が円形の棒状を呈する。22は断面形が方形を呈する板状の鉄器である。

23は鎌であるが、先端部を欠く。基部は着柄のために折返しているが、柄と刃部の角度はかなり開くようである。

24は紡垂車である。中央部が陣笠状に盛上っており、下面に小孔が認められるものの完通していない。錆により埋ったものだろう。



第11図　第３号竪穴住居跡土層断面図



第12図　第３号竪穴住居跡カマド

25は22に類似する板状の鉄器であり、ほぼ完成品であるが、強く屈曲している。

26は第２号土壙跡の埋土下層（Ｅ３、４層）から出土した椀形滓である。一部欠損しているが推定される直径は10cm程度である。下面（実測図右側）は比較的充実しており、底面に多量の砂が付着していたが、上面は発泡しており凹凸が著しい。一部木炭が付着した痕跡がみられる。メタルチェッカーでは反応しない。

11は磨製石斧であり全面にわたり良く研磨されている。基部付近は敲打によるダメージと剥離が伴っている。

第４号竪穴住居跡（第13図～第16図）

調査区のほぼ中央部に位置し、第３号竪穴住居跡東端より4.2m離れている。第３号土壙跡と重複し、これを切っている。

平面形　平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は、東西5.6m、南北5.3m、深さ0.5mである。

埋土　埋土はＡ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層に大別される。Ｄ層は第４号土壙跡の埋土であり後述する。

Ａ層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや柔らかく、ややしまりがない。炭化物粒を少量含む。

Ｂ層は暗褐色土等を基本土とし、８層に細分される。いずれも柔らかくしまりがない。Ｂ１層～Ｂ３層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。３層中Ｂ２層がやや暗い色調を呈する。Ｂ１層・Ｂ２層は炭化物粒を微量含むが、Ｂ３層は炭化物粒をやや多く含むほか焼土粒を少量含む。

Ｂ４層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や黒色土塊を含む。

Ｂ５層～Ｂ７層は、やや明るい暗褐色土～褐色土を基本土とし、褐色土塊～やや明るい褐色土塊を多量に含む。３層中Ｂ６層が最も明るい色調を呈する。

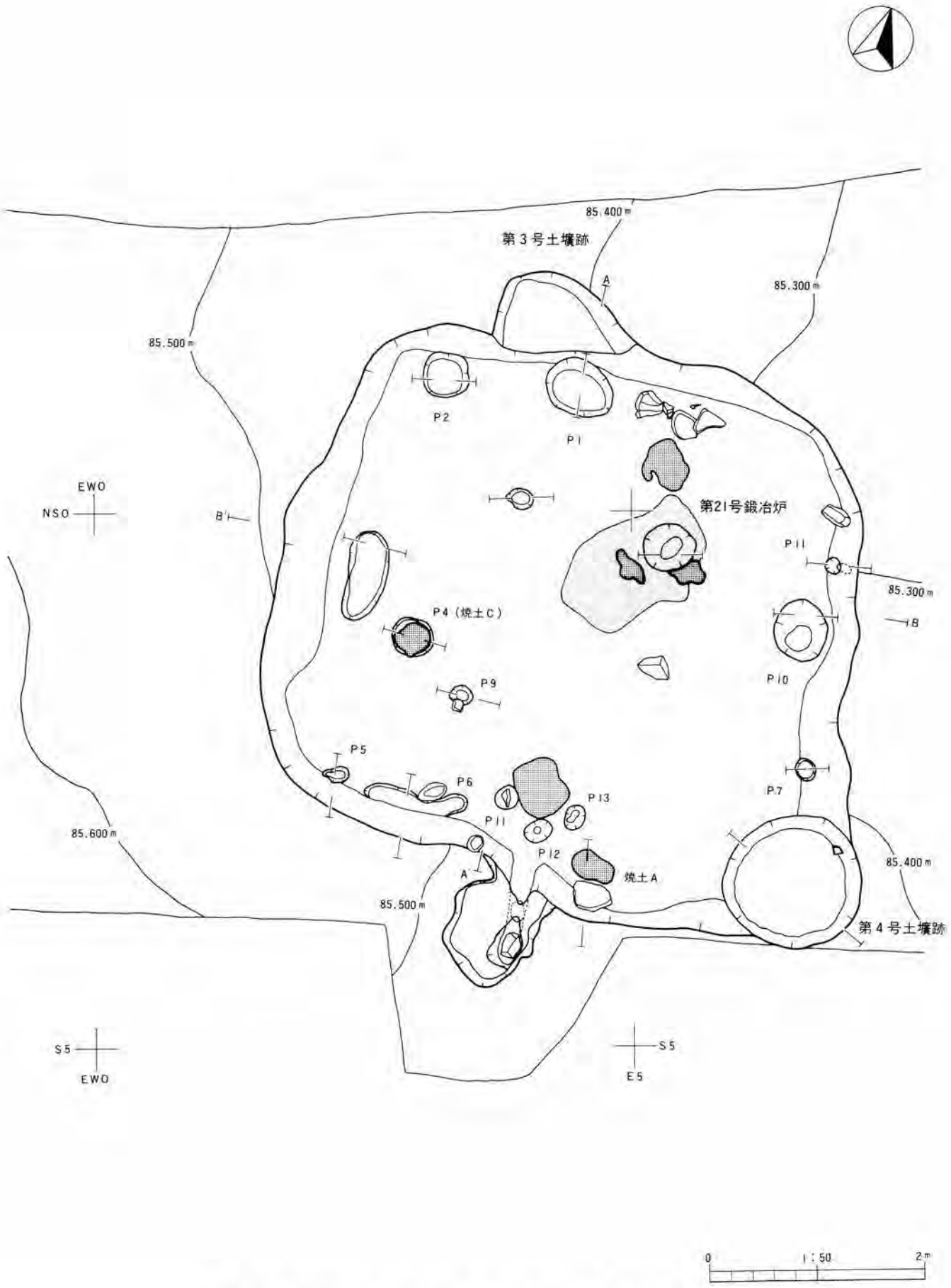
Ｂ８層は暗褐色を基本土とし、褐色土塊を少量含む。

Ｃ層は東壁付近にのみ分布し、暗褐色土層と黒褐色土層が交互に堆積している。すなわち、Ｃ１層・Ｃ３層・Ｃ５層は暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊を含む。Ｃ２層・Ｃ４層は黒褐色土を基本土とし、黒色土塊や暗褐色土塊を含む。いずれの層も柔らかくしまりがない。また、炭化物粒を少量含む。Ｃ層の混入土の混入割合はＢ層に比して著しく少ない。

Ｃ１層はＢ８層に堆積状況が類似しており同一の層である可能性が指適できる。

ところで、Ａ層～Ｃ層には３つの堆積サイクルが想定できた。つまり、第１のサイクルがＣ５層からＣ１層とＢ８層まで、第２のサイクルがＢ７層からＢ４層まで、第３のサイクルがＢ３層からＡ１層までである。第１のサイクルは暗褐色土層と黒褐色土層が互層になり、斜面の下方（東側）から流れ込む状態で堆積しており、ある程度時間幅を持った人為的堆積か、二次的な堆積が想定される。一方、第２、第３のサイクルは下層に３層の褐色土塊を多量に含む暗褐色土層が堆積した後に上層に黒褐色土層が堆積するもので、比較的短時間におそらくは地山を掘り込んだと思われる土砂を投げ込んだ後にある一定時間放置し、再度同じことを繰り返したことが想定される。

カマド　カマドは南壁ほぼ中央部に位置する。カマド本体は既に失われており、火床部と礫を埋設したと思われる小ピットＰ11～Ｐ13を検出した。Ｐ11には小さ目の角礫が埋設してあった。火床



第13図　第4号竪穴住居跡・第3号土壙跡・第4号土壙跡

面は良く焼成を受けた焼土層（Ｆ層）が堆積するが、やや柔らかく、ややしまりがない。

煙道部は長さ1.05ｍ、径0.25～0.15ｍで、くり抜かれており火床部から煙出しにかけてわずかに上っている。煙出しは長さ0.5ｍ、幅0.3ｍの水滴形を呈し、内部に角礫が投げ込まれていた。また、煙道の上部には長さ1.0ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.5ｍの不整形の掘込みが伴う。

カマド及び煙道に堆積するのはＥ層であり、カマドの崩壊土に相当する。Ｅ１層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。Ａ１層に似るが、Ａ１層は住居跡中央部を中心に堆積しているためこれとは区別しておく。Ｅ２層は焼土層である。比較的良く焼成を受けて赤変してはいるが、２次的な堆積と思われる。Ｅ３層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を少量含む。

Ｅ４層～Ｅ７層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。Ｅ４層とＥ６層にてより多く混入土を含んでいる。

Ｅ１層～Ｅ４層は、やや柔らかくしまりは中程度であり、Ｅ５層～Ｅ７層は柔らかくしまりがない。

床面はほぼ平坦で、やや固いが貼床は認められない。

土壙跡　床面の南東隅に第４号土壙跡がある。本土壙跡は第４号竪穴住居跡の床面から掘り込まれたもので、平面形は円形を呈し、規模は径1.26ｍで深さ0.45ｍである。

埋土はＤ層であり３層に細分される。Ｄ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。Ｄ２層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を多く含む。Ｄ３層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層もやや柔らかくしまりがない。

柱穴　柱穴は主柱穴に相当するものがＰ７～Ｐ９・Ｐ11である。Ｐ７～Ｐ９は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをわずかに含む。Ｐ11は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。いずれも柔らかくしまりがない。柱痕跡と掘方の区別はつかなかった。

柱間寸法は各々芯々で、Ｐ７とＰ９が3.3ｍ、Ｐ９とＰ８が1.95ｍ、Ｐ８とＰ11が3.0ｍ、Ｐ11とＰ７が1.95ｍである。

柱穴以外のピットはＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ10が楕円形を呈し、平面形や規模にばらつきがあるものの壁際に存在する点で共通する。埋土はいずれも暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをわずかに含む。柔らかくしまりがない。

Ｐ５・Ｐ６も壁際に掘られたピットであるが、溝状を呈しており周溝に相当するものである可能性が大きい。埋土は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さしまりともに中程度である。

焼土　床面の壁寄りに３ケ所の焼土が確認されており、カマド脇のものを焼土Ａ、北壁寄りのものを焼土Ｂ、西壁寄りのものを焼土Ｃ（Ｐ４）と呼称する。いずれも比較的良く焼成を受けて赤変している。

焼土Ｃは浅いピット（Ｐ４）の底面が焼成を受けたもので、褐色土塊を含む暗褐色土層（ａ１層）により覆われていた。

焼土Ｂは北壁の中央よりやや東寄りに位置する。焼土の北側に亜角礫などが伴っているが、礫を埋設した痕跡は確認できなかった。また、煙道等も確認できなかったが、旧期のカマドの痕跡である可能性も想定される。

鍛冶炉　第21号鍛冶炉は本住居跡に伴うもので、床面の中央よりやや北東寄りに位置する。平面形は

不整円形を呈し、径0.5m、深さ0.1mである。鍛冶炉内及び周辺の床面に多量のハンマースケールや炭化物粒を含む黒色土が堆積していた。a 1層は焼土層であり焼成を受けて赤変している。上面に環元状態で焼成を受けた褐灰色の部分がみられる。非常に良く焼けしまっている。

出土遺物（第25図・27図・28図）

3～6は土師器甕である。4・6はカマドの火床面付近から、3は焼土B上から、5は埋土中より出土したものである。3～5は口縁部付近のみ残存するもので、頸部に屈曲を有し、口縁部が外反するものである。3・4は体部がほぼ直上に立ち上がるのに対し、5は体部に強い膨らみを有する。いずれも内外面ともに弱いヘラナデにより調整される。

6は体部下半であり、底部に張り出しを持たないものである。やはり内外面ともに弱いヘラナデにより調整される。

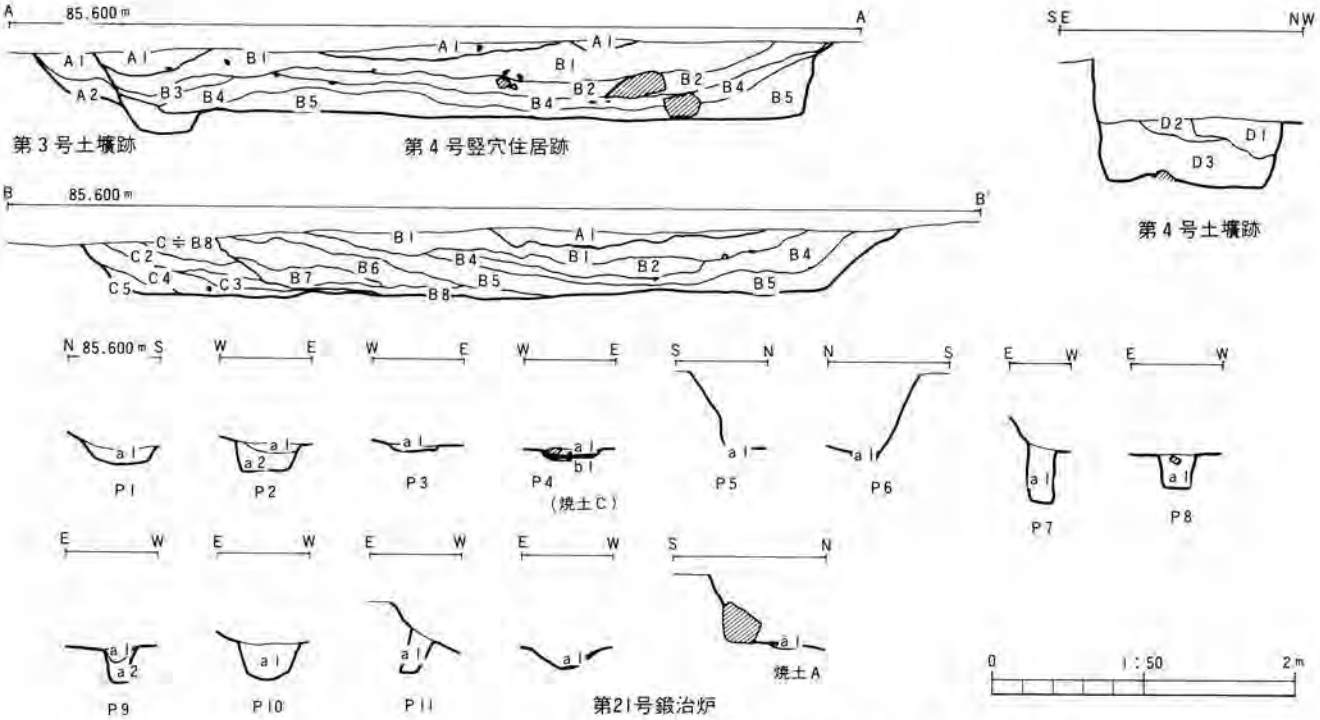
27は刀子であり先端部と基部を欠く。

28は釣針に類似するものの、先端部を欠くため不明瞭である。基部付近は錆によりチモトの有無を確認できなかった。

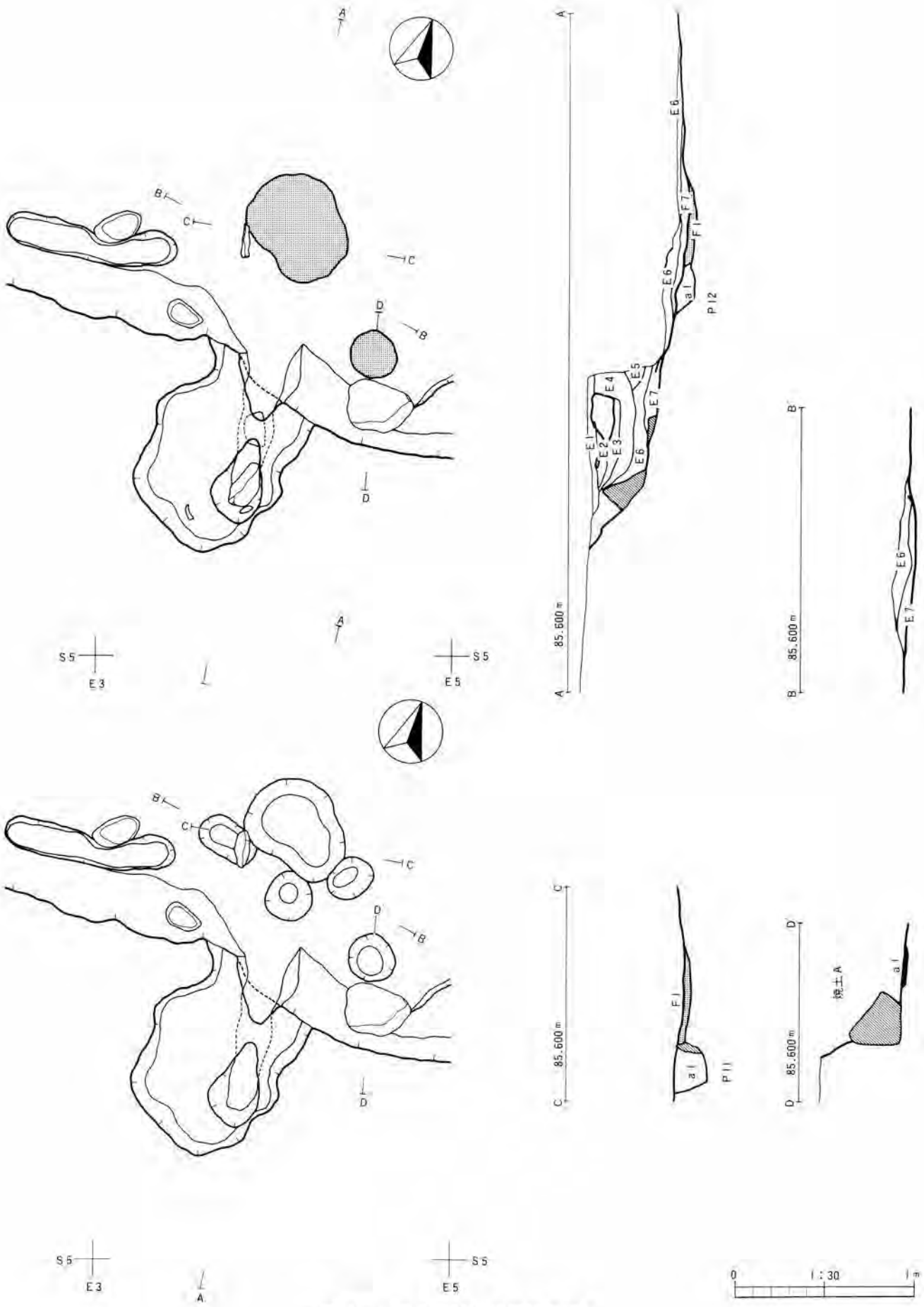
29・30は鉄塊であり、カマドと第21号鍛冶炉のほぼ中間のE 6～7層から出土した。いずれもメタルチェッカーに強く反応した。

31はフイゴ羽口であり、床面からわずかに浮いた状態で出土した。外径7～8m、内径3.3cmである。外面は先端部がガラス質に溶融し、この下位がスラグ質に溶融し、発泡した部分も見られる。さらに下位は環元状態で焼成を受けており褐灰色を呈している（斜線で示した範囲）。内面は先端部付近が黒変し、スラグ質の微細な粒子が付着している。

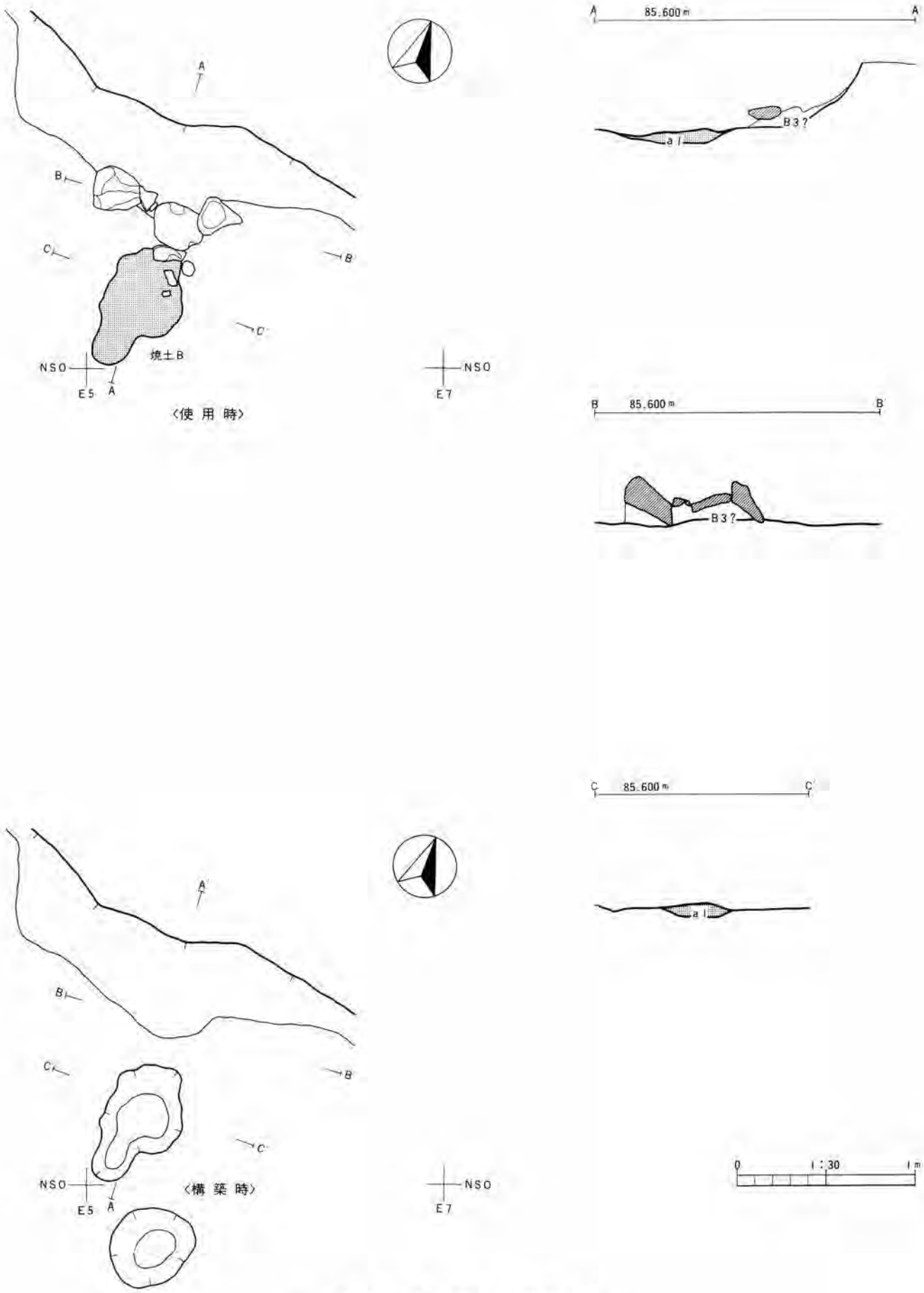
図示した以外に多量のスラグ片や鉄片などが出土している。埋土中からも比較的多く出土しているが第21号鍛冶炉周辺の床面または床面からわずかに浮いた状態で多く出土しており特筆される。



第14図　第4号竪穴住居跡・第3号土壙跡・第4号土壙跡土層断面図



第15図　第4号竪穴住居跡カマド



第16図　第4号竪穴住居跡焼土B

また、B層上部から保存状態の悪い貝ブロックを検出した。

第３号土壙跡（第13図・第14図）

第４号竪穴住居跡の北に位置し、第４号住居跡に切られる。平面形は不明である。規模は東西1.35m以上、南北0.75m以上、深さ0.3mである。

埋土はA層で２層に細分される。いずれも暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含むが、A１層は黒褐色土塊も少量含む。固さ、しまりともに中程度である。出土遺物はない。

第５号竪穴住居跡（第17図～第19図）

調査区東半部に位置し、第４号竪穴住居跡東端より0.7m離れる。重複関係は第６号竪穴住居跡を切り、第２号炭窯跡に切られる。

平面形　平面形は北壁に張り出しのある隅丸五角形を呈し、規模は東西が5.65m、南北5.1m（第５号土壙跡を含むと6.1m）、深さ0.55mである。

埋土　埋土はA層・B層・C層に大別される。

A層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊をやや多く含む。柔らかくしまりがない。炭化物粒を少量含む。

B層は暗褐色土を基本土とし６層に細分される。B１層は混入土をほとんど含まない。B２層は褐色土塊などを多量含む。B３層とB６層は褐色土塊などを多く含む。B４層とB５層は黒褐色土塊や褐色土塊を多く含む。B５層とB６層の層位面より３ケ所の貝ブロックを検出している。B４層とB６層が柔らかくしまりがないが、他は固さしまりともに中程度である。

C層はB層より明るい暗褐色土を基本土とし５層に細分される。C１層は褐色土塊などをやや多く含む。C２層は第５号土壙跡の壁際のみに堆積する地山ブロック層である。C３層は、やや暗い暗褐色土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊などをやや多く含む。C４層とC５層は褐色土塊や黒褐色土塊などを多く含む。C５層中に２ケ所の貝ブロックを検出している。いずれも柔らかくしまりがない。

床面は北側にわずかな段差を有するもののほぼ平坦でやや固い。

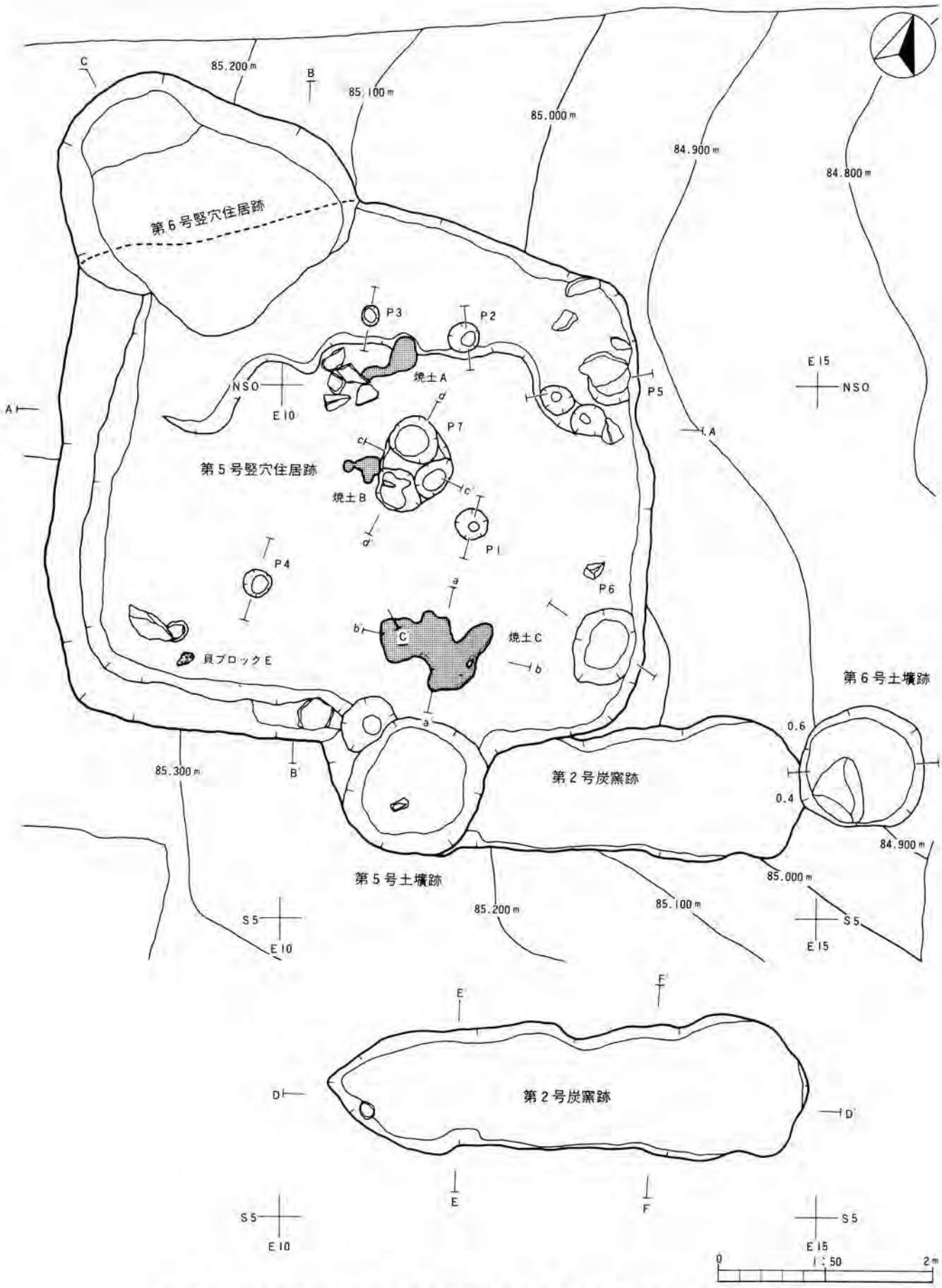
焼土　カマドはみられない。床面に３ケ所の焼土が認められ、北側から焼土A・焼土B・焼土Cとした。いずれも床面が焼成を受けて赤変したもので、良く焼けしまっている。焼土に伴う掘り込み等は認められない。

南壁のほぼ中央部に第５号土壙跡を検出している。この土壙跡は住居跡の床面から掘り込まれたもので、南壁の外へやや張り出している。平面形は円形で、規模は径1.3m、深さ0.7mである。

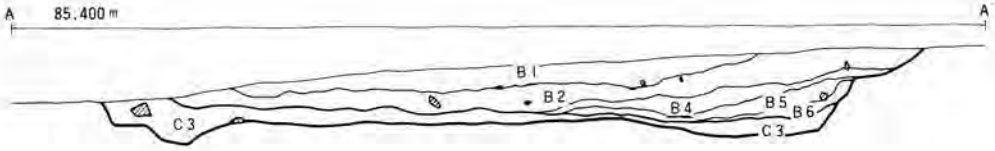
柱穴　柱穴はP１～P４が主柱穴に相当する。P１とP４は掘り込みが深く柱痕跡を確認したが、P２とP３は掘り込みが浅く柱痕跡を確認できなかった。いずれもしまりのない暗褐色土などが堆積し、柱痕跡は掘り方よりやや色調が暗い。

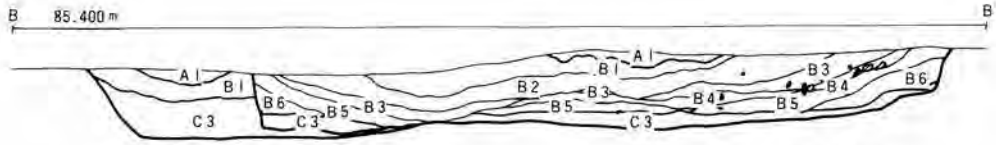
柱間寸法は各々芯々でP１とP２が1.8m、P２とP３が0.95m、P３とP４が2.7m、P４とP１が2.1mとなる。

柱穴以外のピットはP５とP６が東壁直下に掘り込まれた楕円形のピットでありいずれもや

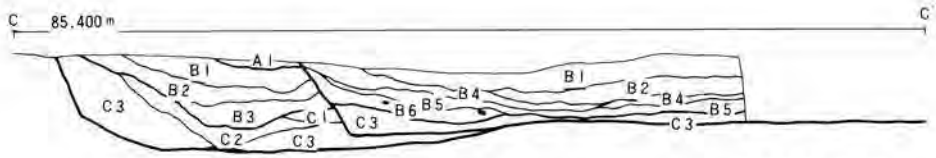


第17図　第5号竪穴住居跡・第6号竪穴住居跡・第2号炭窯跡・第6号土壙跡

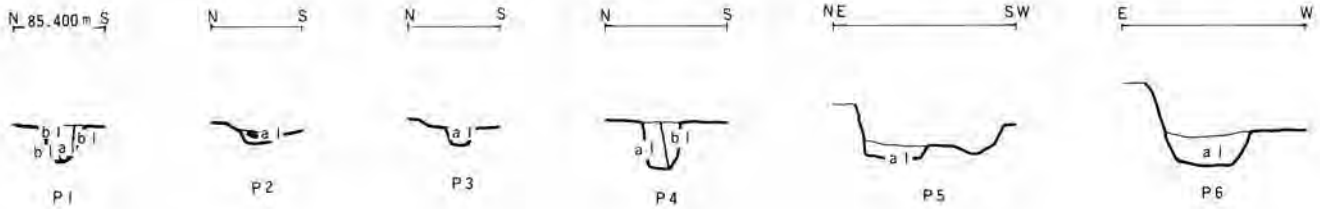


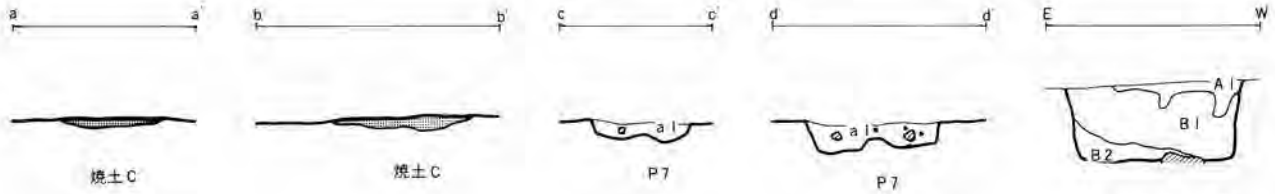


第6号竪穴住居跡　　第5号竪穴住居跡



第6号竪穴住居跡　　第5号竪穴住居跡



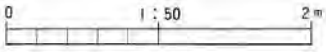


第6号土壙跡

第2号炭窯跡

第2号炭窯跡

第2号炭窯跡



第18図　第5号竪穴住居跡・第6号竪穴住居跡・第2号炭窯跡・第6号土壙跡土層断面図

やしまりのない暗褐音土などが堆積する。

Ｐ８は床面中央に位置する不整形ピットで、褐色土塊などを含む黒褐色土が堆積する。焼土Ｂが接することから鍛冶炉の可能性も想定されたが肉眼では底面が焼成を受けた痕跡を発見できなかった。

出土遺物（第25図・第28図）

７・８は土師器甕である。７は小形甕で口縁部がわずかに外反し、体部にもわずかな膨らみを有する。底部は強く張り出している。器面調整は外面が口縁部付近が横方向、体部が縦方向の弱いヘラナデで、内面上半が横方向、下半が縦方向の弱いヘラナデである。

８は口縁部付近のみ残存するもので、頸部に屈曲を有し口縁部が外反している。器面調整は内外面ともに弱いヘラナデである。

32は弓形を呈する鉄器で、第５号土壙跡貝ブロックＤに伴い出土したものである。

33はフイゴ羽口で、外径７㎝、内径３㎝である。外面先端部はスラグ質に溶融し、下位は環元状態で焼成を受けており褐灰色に変色している（斜線で示した範囲）。内面は先端部が黒変し、スラグ質の微細な粒子が付着している。

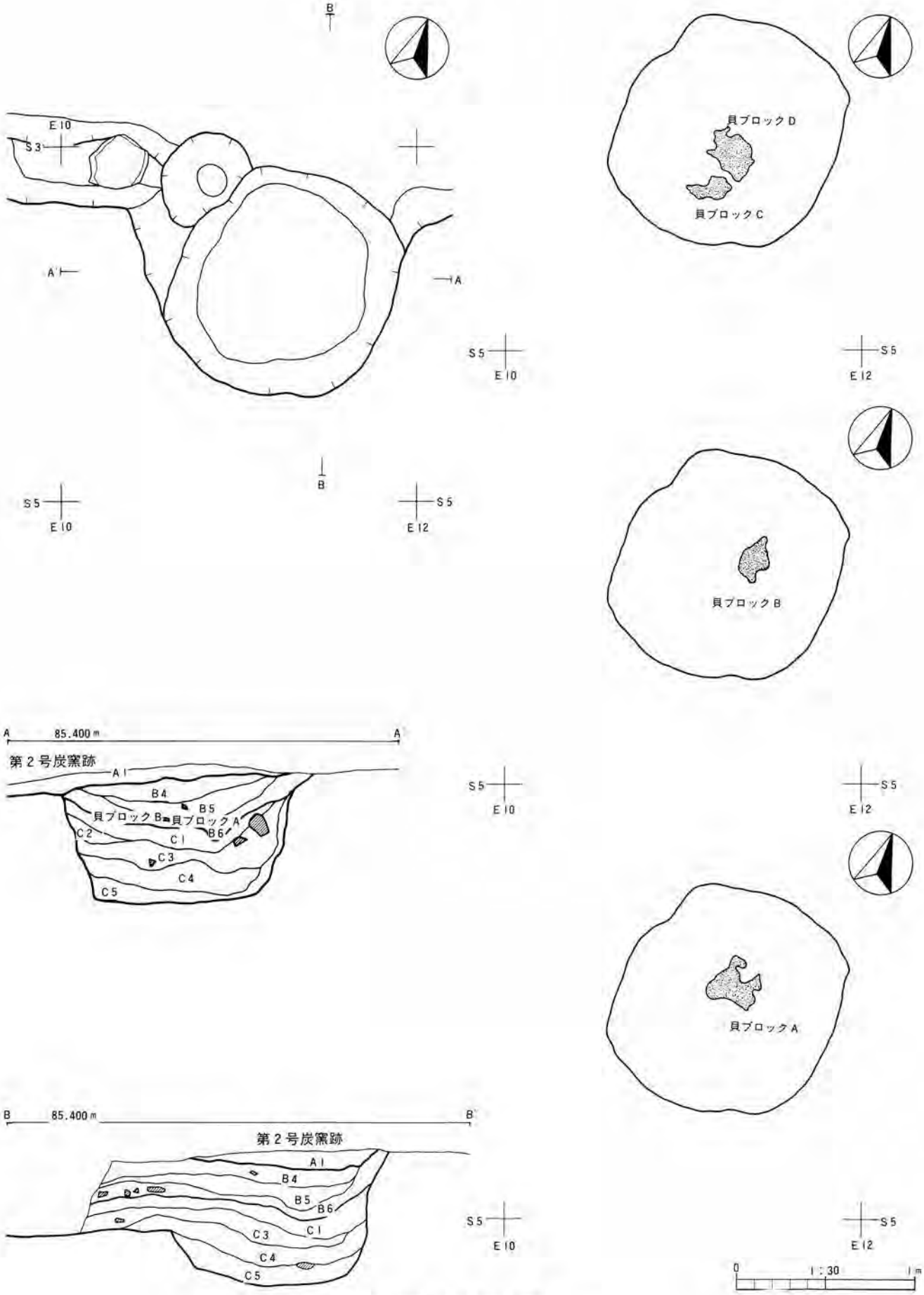
図示した以外にもスラグ等が出土している。

貝ブロック

第５号竪穴住居跡内に小規模な貝がらの集積を５層確認している。構成内容は純貝層に近いものであるが、それぞれが、比較的短期間での廃棄ブロックだと思われ規模が小さいことから貝ブロックと呼称した。

	No.5H貝ブロックA		No.5H貝ブロックB		No.5H貝ブロックC		No.5H貝ブロックD		No.5H貝ブロックE		No.4H埋土中貝ブロック		No.9Hカマド煙道内ドングリ廃棄ブロック	
	1mメッシュ	5mメッシュ	1mメッシュ	5mメッシュ	1mメッシュ	5mメッシュ	1mメッシュ	5mメッシュ	1mメッシュ	5mメッシュ	1mメッシュ	5mメッシュ	1mメッシュ	5mメッシュ
ユキノカサガイ科	1	1					1							
タマキビガイ		1												
オオコハクガイ	1													
イガイ	L2、R2	L10、R4		L1				R1	R1					
エゾイガイ		L8		R1				L9、R8		R1				
ムラサキインコガイ	L1、R3	L1、R1					L9、R6	L11、R8						
イガイ科の一種		R1												
チリハギガイ							R1							
アカフジツボ 峰板		1												
峰側板		L1、R1												
側板	L1													
楯板	L1													
チシマフジツボ 峰板	75	53					8		8					
峰側板	L68、R48	L32、R29					L4、R7	L3	L12、R10	R1				
側板	L53、R65	L16、R10					L5、R1		L18、R8	R1				
嘴側板	94	38					6	1	8					
楯板	L1													
カニ(ハサミ片)													2	
アワ状炭化種実					10				5		4		1675	
ドングリ状炭化種実											1			41

第２表　自然遺物集計表


B'
E10
S3
A'
A
S5
E10
S5
E12
B
S5
E10
S5
E12
貝ブロックD
貝ブロックC
貝ブロックB
A
85.400m
A'
第2号炭窯跡
A1
B4
B5
貝ブロックB
貝ブロックA
B6
C2
C1
C3
C4
C5
S5
E10
S5
E12
貝ブロックA
B
85.400m
B'
第2号炭窯跡
A1
B4
B5
B6
C3
C1
C4
C5
S5
E10
S5
E12
0
1:30
1m

第19図　第5号土壙跡

第５号土壙跡のＢ５層とＢ６層の層位面にて貝ブロックＡと貝ブロックＢを検出し、同じくＣ５層中に貝ブロックＣと貝ブロックＤを検出した。また、第５号竪穴住居跡南東部のＢ５層とＢ６層の層位面からも貝ブロックＥを検出した。貝ブロックＥは貝ブロックＡまたは貝ブロックＢに対応するものである。

これらは、いずれも小規模な廃棄ブロックであり、岩礁性二枚貝を主体とし、岩礁性巻貝類・炭化物粒・炭化種実・ハンマースケール・スラグ・土器片・鉄器などから構成されている。同定された種名や構成物の内容は第２表のとおりである。

第６号竪穴住居跡（第17図・第18図）

第５号竪穴住居跡の北西部に位置し、第５号竪穴住居跡に切られる。平面形は不明であり、規模は北西～南東方向で3.0ｍ以上、北東～南西方向で2.5ｍ以上、深さ0.55ｍである。 **平面形**

埋土は、Ａ層・Ｂ層・Ｃ層に大別される。 **埋土**

Ａ層は暗褐色土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。

Ｂ層は黒褐色土を基本土とし、３層に細分される。Ｂ１層とＢ２層は暗褐色土塊・褐色土塊などをやや多く含むが、Ｂ２層のほうが多く混入土を含む。Ｂ３層は黒色土塊・暗褐色土塊・褐色土塊などを多く含む。いずれもやや柔らかくややしまりがなく、炭化物粒を少量含む。

Ｃ層は暗褐色土を基本土とし、３層に細分される。Ｃ１層とＣ３層は褐色土塊などを多く含み、固さしまりともに中程度である。Ｃ２層は黒褐色土塊・褐色土塊などを多く含み、柔らかくしまりがない。

床面は北西部にわずかな傾斜があるほかは平坦である。柱穴等の付属施設は確認されなかった。出土遺物は無い。

第６号土壙跡（第17図・第18図）

第５号竪穴住居跡と第２号炭窯跡の東側に位置し、第２号炭窯跡に切られる。

平面形は不整円形で、規模は径1.3ｍ～1.15ｍ、深さ0.5ｍである。

埋土はＡ層とＢ層に大別される。

Ａ層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊・褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかくややしまりがない。炭化物粒を含む。

Ｂ層は暗褐色土を基本土とし２層に細分される。Ｂ１層は褐色土塊・黒褐色土塊などをやや多く含み、炭化物粒を少量含む。やや柔らかくしまりがない。Ｂ２層は褐色土塊などを含み、柔らかくしまりがない。

底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

第２号炭窯跡（第17図・第18図）

第５号竪穴住居跡・第６号土壙跡と重複し、両者を切る。平面形は長楕円形を呈する。 **平面形**

埋土はＡ１層のみであり、黒色土を基本土とし、黒褐色土塊・暗褐色土塊を微量含む。固さしまりともに中程度である。また、炭化物粒と焼土粒をわずかに含む。 **埋土**

底面は平坦でやや柔らかい。焼成を受けているようだが焼土層は確認されなかった。

出土遺物はない。

第７号竪穴住居跡（第20図）

調査区東半部に位置し、第５号竪穴住居跡東端より7.2m離れる。

平面形　平面形は方形を呈し、規模は東西3.7m、南北4.5m以上、深さ0.2mである。

埋土　埋土はＡ層で３層に細分される。Ａ１層とＡ２層は黒褐色土を基本土とし、褐色土塊・暗褐色土塊などを含む。Ａ２層は混入土を多く含むほか炭化物粒を少量含む。Ａ３層はやや暗い暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も柔らかくしまりがない。

床面はやや凹凸がありやや固い。床面には柱穴が検出されなかったが、第７号土壙跡・Ｐ１～Ｐ４・焼土等を検出している。

土壙跡　第７号土壙跡は北西隅に位置し、住居跡の床面から掘り込まれたものである。平面形は不整楕円形で、規模は東西1.7m、南北1.5m、深さ0.55mである。

埋土はＢ層で３層に細分される。Ｂ１層とＢ３層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。Ｂ３層がやや明るい色調を呈する。Ｂ２層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊・褐色土塊を含む。いずれも柔らかくしまりがない。

底面はほぼ平坦でやや固い。底面に２ヶ所の焼土を検出している。いずれも底面が直接焼成を受け赤変したものである。良く焼けしまっている。

Ｐ１は北東隅に掘り込まれた楕円形のピットで、東西0.6m、南北0.75m、深さ0.2mである。埋土はａ１層が暗褐色土を基本土とし褐色土塊などを含む。ｂ１層は褐色土を基本土とし暗褐色土などを含む。いずれも固さしまりともに中程度である。

Ｐ２とＰ３は西壁寄りに掘り込まれた楕円形ピットである。Ｐ２は東西0.7m、南北1.0m、深さ0.2mである。埋土は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。ａ１層は柔らかくしまりがないが、ａ２層は固さしまりともに中程度である。Ｐ３は東西0.65m、南北0.9m、深さ0.18mである。埋土はａ１層が焼土層で焼成を受けて赤変している。良く焼けしまっている。ｂ１層は暗褐色土を基本土とし褐色土塊を少量含む。底面の北端に小ピットが伴う。

焼土　Ｐ４は浅い小ピットが集中するが重複なのか否か判定できなかった。焼土はａ１層が焼土層で焼成を受けて赤変している。良く焼けしまっている。ｂ１層は暗褐色土を基本土とし褐色土塊などを少量含む。

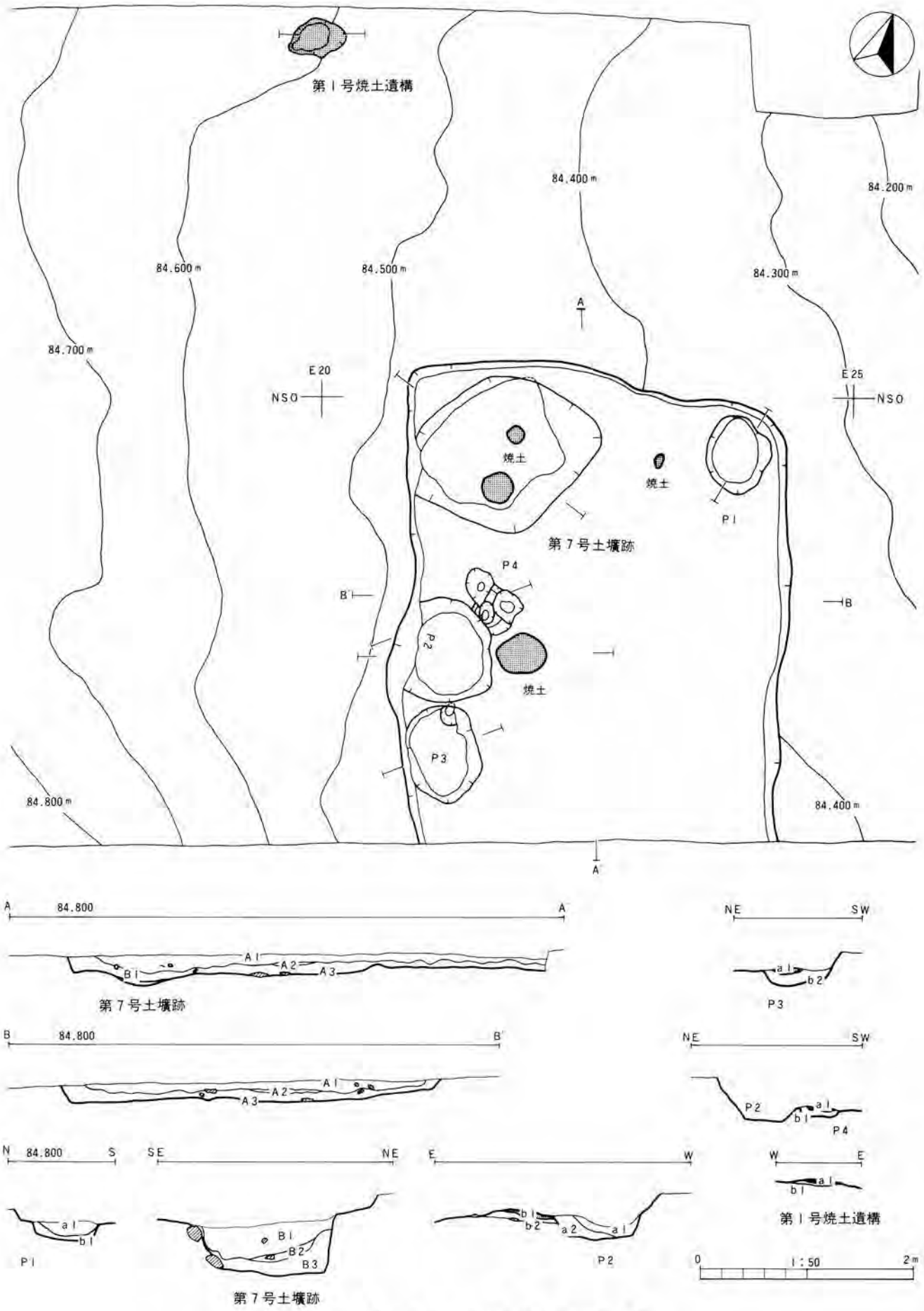
このほかに北壁寄りとＰ２の東側に焼土を検出している。前者は床面が焼成を受けて赤変したものであるが、後者が焼土粒を含む暗褐色土層（ｂ２層）の上に焼土層が形成されたものであり良く焼けしまっている。また、この焼土層はＰ２に切られている。

出土遺物（第29図）

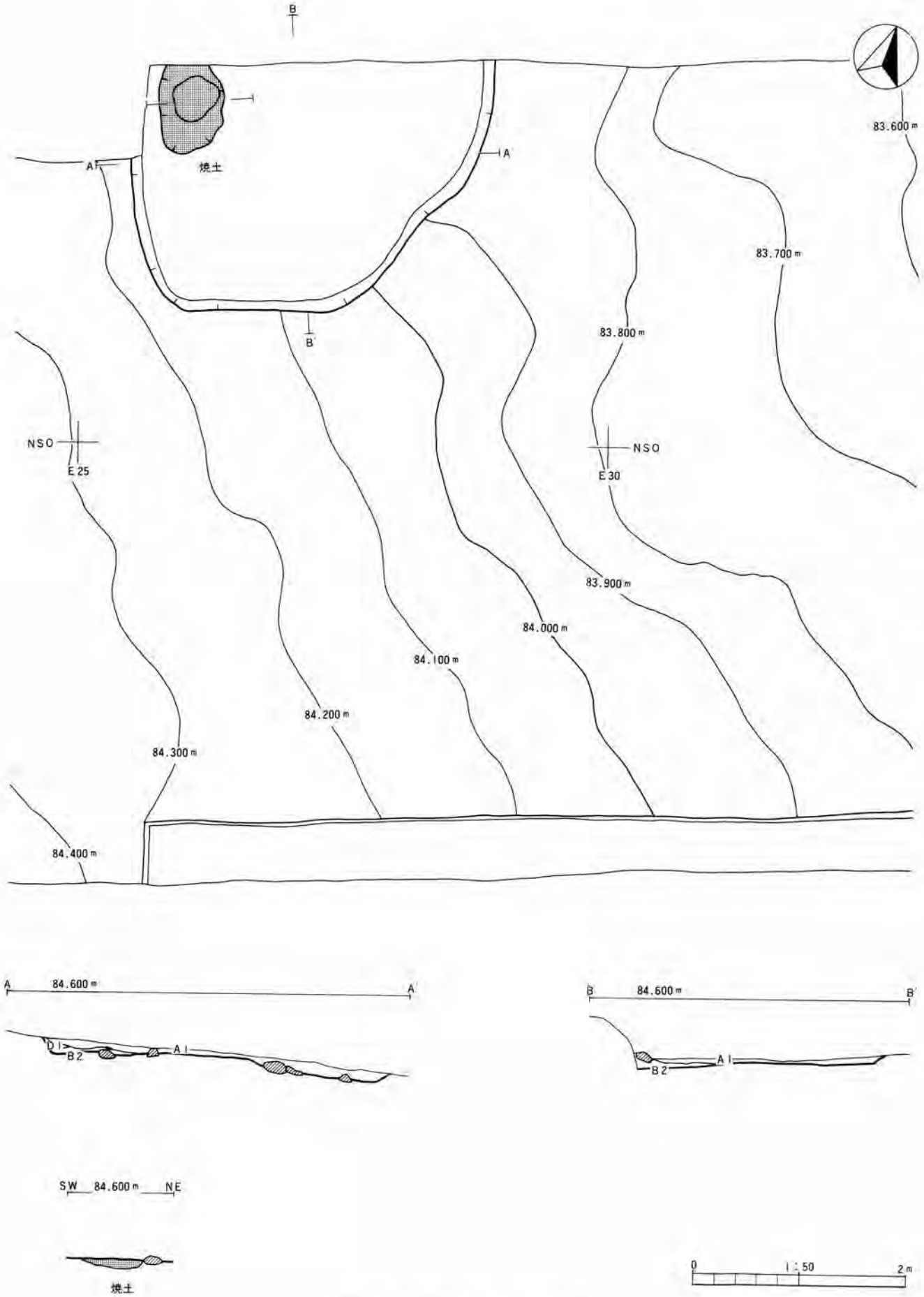
遺物の出土量はやや少ないが図示した以外にスラグや土器片などが出土している。

36はやや大形の鉄鏃で、現存値は幅3.6m、長さ7.4mである。箭頭部は鋒が（相対的に）やや狭く、逆棘を有するもので、両側縁はやや湾入している。逆棘の一部と篦は欠損している。

34・35はフイゴ羽口である。34は外径4.5cm程度、内径２cm程度で、外面はスラグ状に溶融しており、部分的に環元状態で焼成を受けた褐灰色の部分（斜線部）もみられる。また、内面



第20図　第７号竪穴住居跡・第１号焼土遺構



第21図　第８号竪穴住居跡

は先端部付近が黒変しており、微細な粒子が付着している。35は外径５cm程度、内径2.6cm程度で、外面はスラグ状に溶融しており、先端部に砂粒が付着している。内面は黒変しており微細な粒子が付着している。

第１号焼土遺構（第20図）

第７号竪穴住居跡の北側３ｍに焼土のみが単独で検出された。平面形は不整楕円形で、規模は、東西0.55ｍ、南北0.35ｍである。埋土はａ１層が焼土層で焼成を受けて赤変している。ｂ１層は暗褐色土を基本土とし、焼土粒を少量含む。

第８号竪穴住居跡（第21図）

調査区東端部に位置し、第７号竪穴住居跡北東隅より2.3ｍ離れる。

平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は東西3.33ｍ、南北2.4ｍ、深さ0.15ｍである。 **平面形**

埋土はＡ層とＢ層に大別される。 **埋土**

Ａ層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりがない。炭化物粒を少量含む。

Ｂ層は２層に細分される。Ｂ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。Ｂ２層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。Ｂ１層は固さしまりともに中程度で、Ｂ２層は柔らかくしまりがない。

床面はやや凹凸があり、東半部がわずかに下っている。あまり固くない。

東壁寄りに焼土を確認したのみで、柱穴等は確認されなかった。焼土は床面が直接焼成を受けて赤変したもので、良く焼けしまっている。 **焼土**

出土遺物は土器片やスラグが少量出土したのみで図示できるものでは無い。

第９号竪穴住居跡（第22図～第24図）

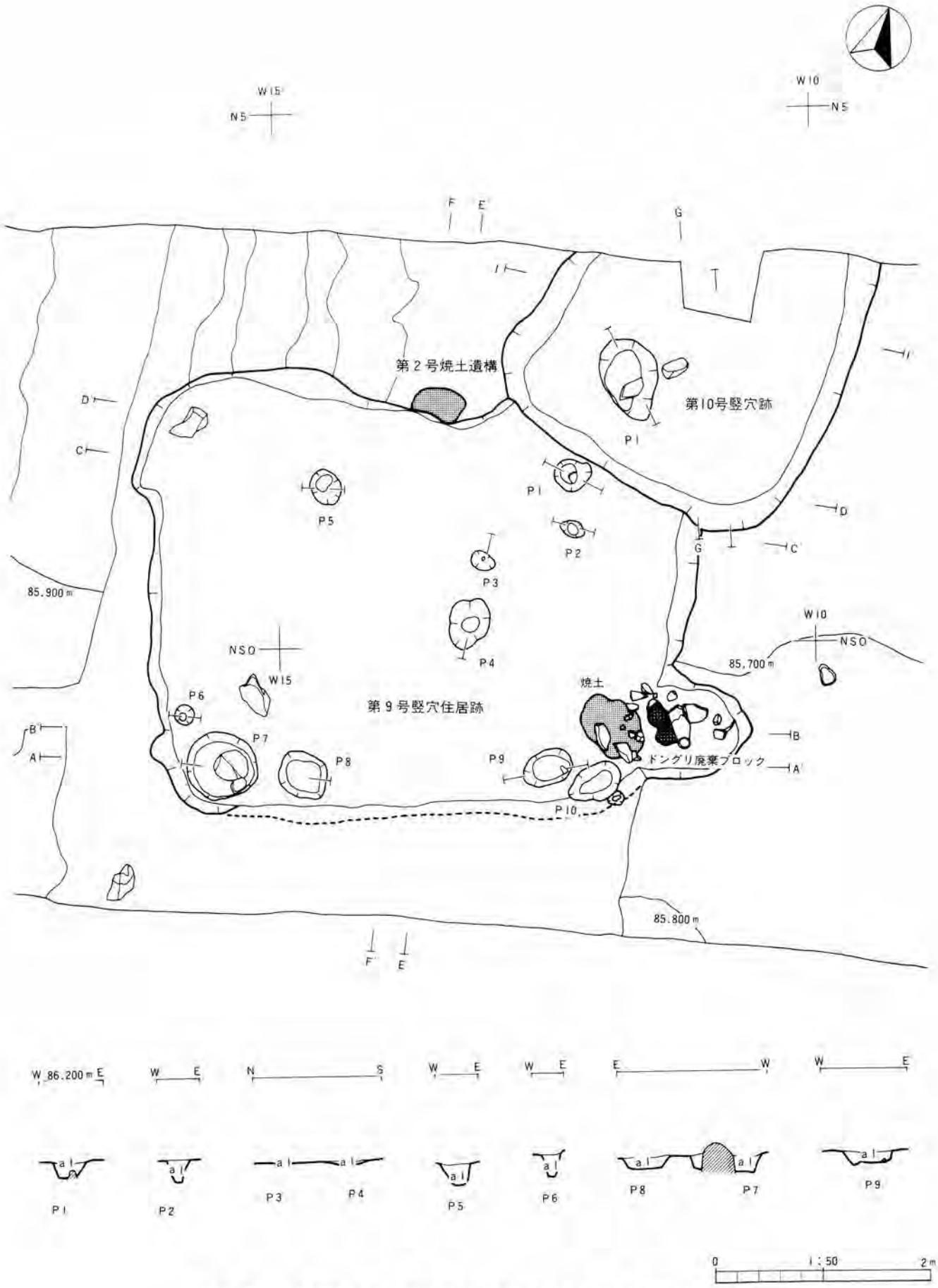
調査区西半部に位置し、第２号竪穴住居跡東端より４ｍ離れる。第10号竪穴住居跡と重複しこれに切られる。また、耕作時の攪乱により著しく破壊されており南壁の大半は失われていた。

平面形は、やや不整な隅丸方形を呈し、規模は東西5.3ｍ（カマド部分で5.6ｍ）、南北4.2ｍ、深さ0.45ｍである。 **平面形**

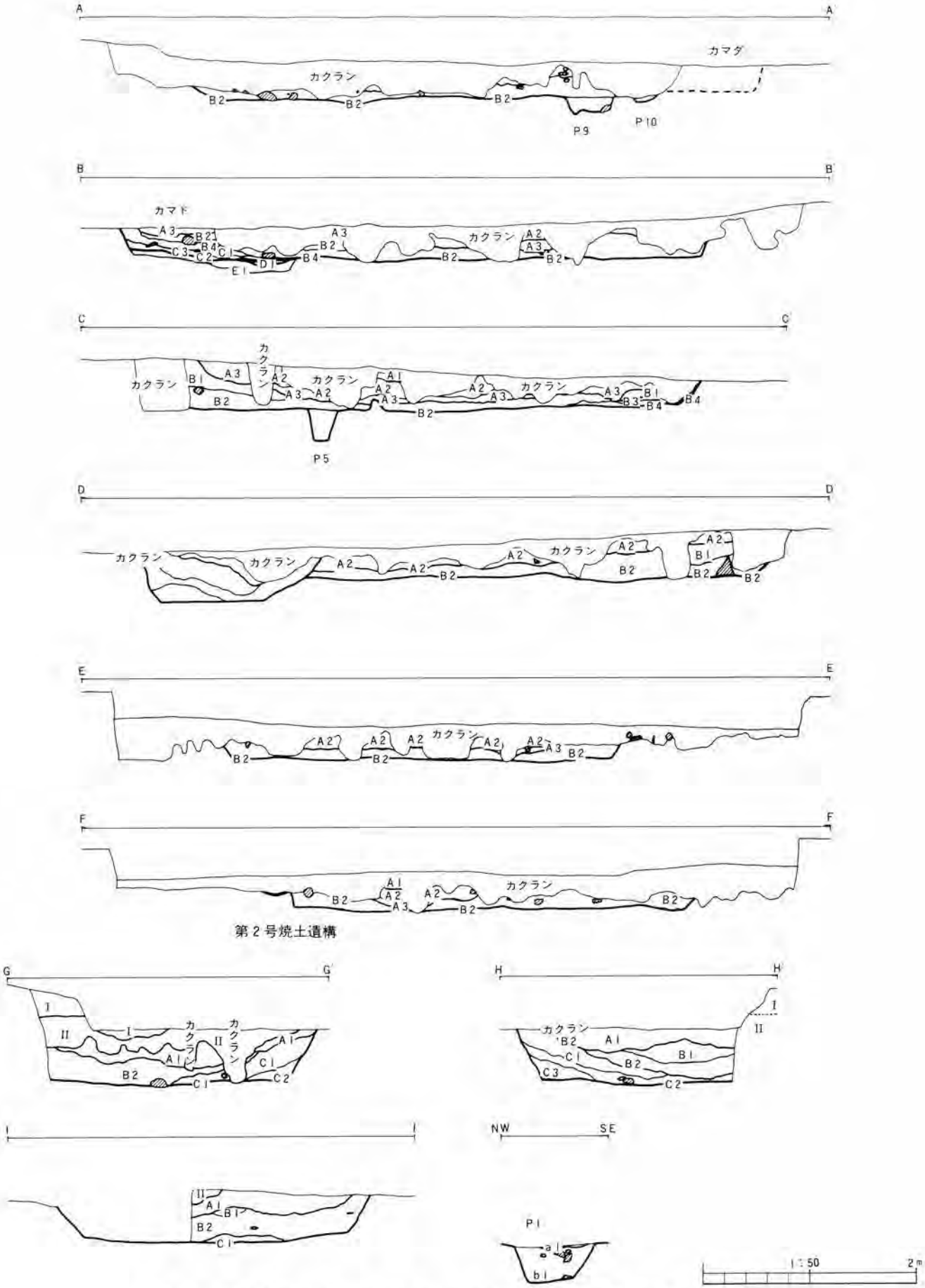
埋土は、Ａ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層・Ｅ層に大別される。Ｄ層とＥ層はカマド構築土等であるので後述する。 **埋土**

Ａ層は黒褐色土を基本土とし、３層に細分される。Ａ１層とＡ２層は褐色土塊などをやや多く含むが、Ａ２層がやや明るい。いずれも固さしまりともに中程度である。Ａ３層は黒色土塊、暗褐色土塊、褐色土塊などを多く含み、やや柔らかくややしまりがない。カマド付近で炭化物粒を含む。Ｂ層は暗褐色土を基本土とし、４層に細分される。褐色土塊などを含み、上層よりやや明るい層とやや暗い層が交互に堆積している。Ｂ３層は焼土塊を多く含む。Ｂ１層とＢ２層はやや柔らかくややしまりがないが、Ｂ３層とＢ４層は固さしまりともに中程度である。

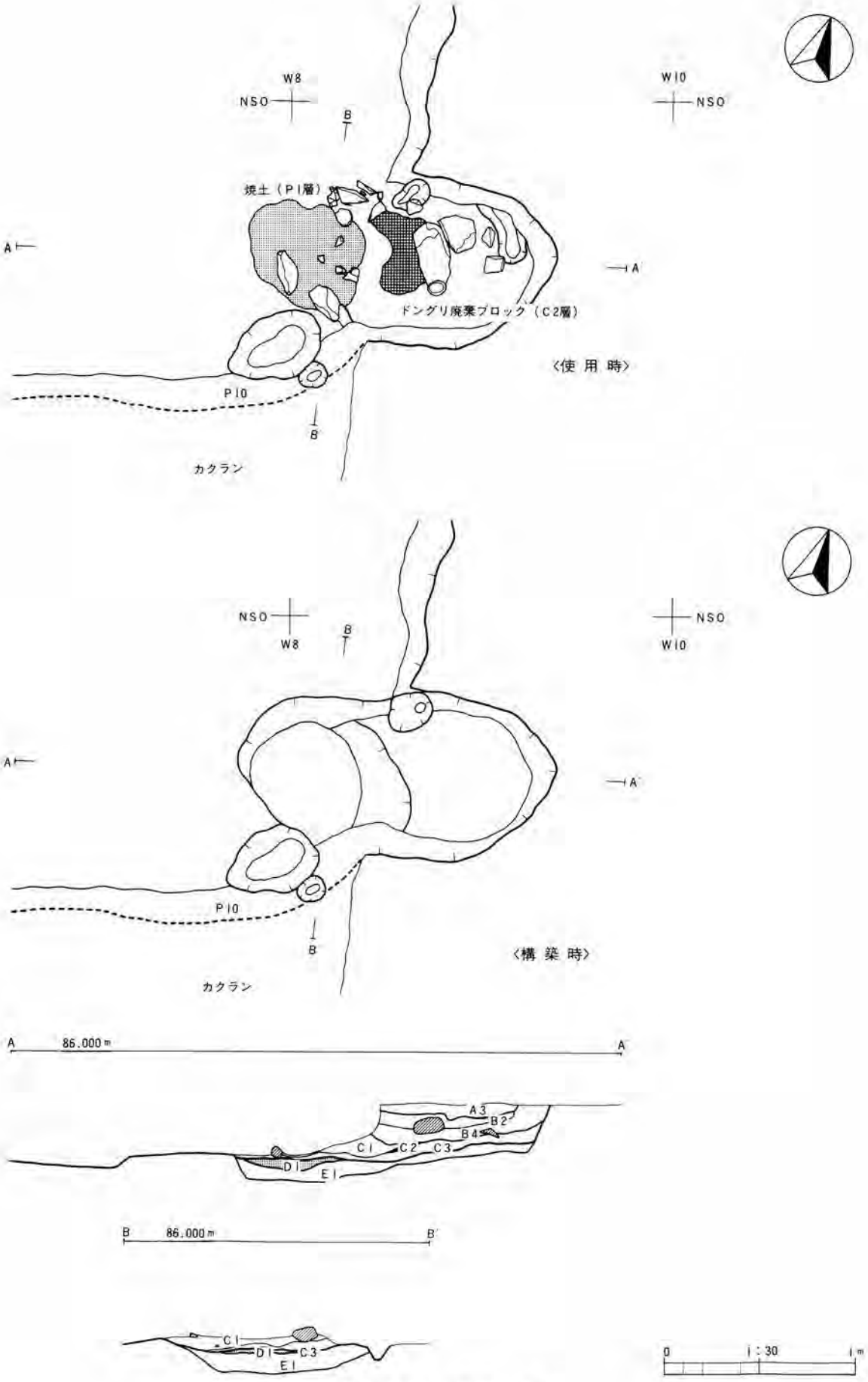
Ｃ層はカマド崩壊土と思われ、３層に細分される。Ｃ１層は焼土層で、焼成を受けて著しく赤変してはいるものの柔らかくしまりがない。二次的な堆積土と思われる。Ｃ２層は黒褐色土



第22図　第9号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡・第2号焼土遺構



第23図　第9号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡・第2号焼土遺構土層断面図



第24図　第9号竪穴住居跡カマド

を基本土とし、黒色土塊や暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりがない。ドングリに類似する炭化種実やアワに類似する雑穀の炭化種実を比較的多く含む。また、破砕された岩礁性二枚貝類の貝がら片やカニのハサミなども多量含む。Ｃ３層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や焼土塊をやや多く含む。固さしまりともに中程度である。 **ドングリ廃棄ブロック**

床面はほぼ平担で固い。不明瞭ではあったが部分的に貼床がみられた。

柱穴は主柱穴に相当するものがＰ２・Ｐ５・Ｐ６である。いずれも掘り方と柱痕跡の判別がつかなかったが、褐色土を基本土とし暗褐色土塊などを含む。柔らかくしまりがない。 **柱穴**

柱間寸法は各々芯々で、Ｐ２とＰ５が2.35ｍ、Ｐ５とＰ６が2.55ｍである。

柱穴以外のピットはＰ１・Ｐ７～Ｐ10が楕円形を呈し、平面形や規模にばらつきがあるものの壁際や壁寄りに存在する点で共通する。埋土はいずれも暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。柔らかくしまりがない。

Ｐ３・Ｐ４は床面の中央よりやや東寄りに存在する浅いピットである。埋土はいずれも暗褐色土を基本土とし、焼土粒を含む。柔らかくしまりがない。

カマドは東壁の南端に位置する。カマド本体は既に失われており、火床面上から煙道部にかけて焼成を受けた角礫が底面から浮いた状態で散乱していた。 **カマド**

煙道部は長さ0.8ｍ、幅0.85ｍに張り出している。煙出しの形状は不明である。

カマドの構築方法は、火床部から煙道部にかけて一括して掘り込み、褐色土を基本土とし焼土粒を含むＥ１層をつめて底面としている。底面は外側から内側にかけてわずかに傾斜している。火床面はＤ１層の上面である。Ｄ１層は焼土層であり焼成を受けて赤変しており非常に良く焼けしまっている。

出土遺物（第25図・第29図）

遺物の出土量はやや少ないが、図示した以外にもスラグや土器片などが出土している。

９・10は土師器甕である。９は体部下半が残存するもので、底部にわずかな張り出しがみられる。内外面ともに弱いヘラナデで器面調整される。10はやや大形で、口縁部がわずかに外反し、体部がやや膨らむようである。内外面ともに弱いヘラナデで器面調整される。

37は上下両端を欠く、板状を呈する鉄器である。実測図の下から上へわずかに薄くなっている。

第10号竪穴住居跡（第22図・第23図）

調整区西半部に位置する。第９号竪穴住居跡と重複し、これを切る。

平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は東西3.0ｍ、南北3.0ｍ以上、深さ0.5ｍである。 **平面形**

埋土は、Ａ層・Ｂ層・Ｃ層に大別される。Ａ１層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりがない。 **埋土**

Ｂ層は黒褐色土を基本土とし２層に細分される。Ｂ１層は褐色土塊や暗褐色土塊を多く含みＢ２層は褐色土塊や暗褐色土塊のほかに黒色土塊を多く含む。いずれもやや柔らかくややしまりがない。

Ｃ層は３層に細分される。Ｃ１層とＣ３層は褐色土を基本土とし暗褐色土塊などを含む。Ｃ２層は暗褐色土を基本土とし褐色土塊や黒褐色土塊をやや多く含む。いずれも柔らかくしまり

がない。

床面はほぼ平坦で固い。床面の南寄りにＰ１を検出した。平面形は不整楕円形で、規模は北西－南東方向で0.8ｍ、北東－南西方向で0.5ｍ、深さ0.32ｍである。埋土はａ層とｂ層に大別される。ａ１層は黒色土を基本土とし暗褐色土塊や黒褐色土塊を多く含む。ｂ１層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。いずれも柔らかくしまりがない。

出土遺物は土器片やスラグが少量出土したものの図示できるものはなかった。

第２号焼土遺構（第22図・第23図）

第９号竪穴住居跡の北壁に接し、第９号竪穴住居跡に切られるようである。東西0.5ｍ、南北0.3ｍの不整楕円形の範囲が焼成を受けて赤変したものである。良く焼けしまっている。

遺構外出土遺物（第29図）

遺構外からの出土遺物は極めて少なく、図示したもの以外に縄文土器片、土師器片、スラグなどがわずかに出土したのみである。

ｂ）Ⅱ区

Ⅱａ区は最も遺構の重複が著しく、竪穴住居跡８棟（第11号竪穴住居跡～第18号竪穴住居跡）と土壙跡６基（第７号土壙跡～第12号土壙跡）を検出した。

また、Ⅱｂ区からは第19号竪穴住居跡、ⅡＣ区からは第20号竪穴住居跡と第21号竪穴住居跡、Ⅱｄ区からは第13号土壙跡～第14号土壙跡、ⅡＣ区からは第22号竪穴住居跡と第15号土壙跡を検出している。

これらの遺構は検出のみに留めており時期や内容等は不明である。遺構検出時の出土遺物もほとんど無い。

ｃ）Ⅲ区

Ⅲ区はⅠ区・Ⅱ区に比べて遺構がやや希薄となるようである。Ⅲａ区からは第23号竪穴住居跡と第24号竪穴住居跡、Ⅲｂ区からは第25号竪穴住居跡、Ⅲｃ区からは第26号竪穴住居跡と第16号土壙跡、Ⅲｄ区からは第27号竪穴住居跡と第17号土壙跡、Ⅲｅ区からは第28号竪穴住居跡と第17号土壙跡、第18号土壙跡、Ⅲｆ区からは第29号竪穴住居跡を検出している。Ⅲｇ区からは遺構が検出されなかった。

Ⅱ区同様に遺構は検出のみに留めており時期や内容は不明である。

自然遺物（第２表・第３表・第４表）

今回の調査にて竪穴住居跡の埋土中等から動物遺存体と植物遺存体（炭化種実）を検出しているので、ここでまとめておく。

動物遺存体（第２表）

第４号竪穴住居跡・第５号竪穴住居跡・第９号竪穴住居跡埋土中からいずれも小規模な廃棄ブロックが検出され、特に第５号竪穴住居跡に伴う第５号土壙跡に集中する傾向が認められる。

これらの廃棄ブロックは、第９号竪穴住居跡埋土中のものが炭化種実を中心とするものであるが、他のものは動物遺存体を中心とするものであった。各廃棄ブロックを構成する種の内容は第２表に示したとおりである。第５号竪穴住居跡貝ブロックＣ・第４号竪穴住居跡埋土中貝ブロック・第９号竪穴住居跡埋土中ドングリ廃棄ブロックにも粉砕～破砕された貝殻片を含むものの殻頂部が伴わないために同定できなかった。

以下同定された種毎に概要を記す。

腹足綱

１ユキノカサガイ科（Acmaeidae gen. et sp. indet.）アオガイに類似し、幼貝と思われるものがわずかに検出している。岩礁の潮間帯に生息する。

２タマキビガイ（Littorina brevicula） №5Ｈ貝ブロックＡより１点検出した。岩礁の潮間帯高潮線付近に生息する。

３オオコハクガイ（Zonitoides yessoeusis） №5Ｈ貝ブロックＡより１点検出した。陸産微小巻貝で、朽木や樹間などに付着していることが多い。

二枚貝綱

４イガイ（Mytilus corsucus） 貝ブロック等の主体を成す種のひとつであるが、幼貝と思われるものも含んでいる。岩礁の潮間帯から水深20ｍ程度の所に生息する。

５エゾイガイ（Crenomytilus grayanus） イガイ同様貝ブロック等の主体を成す種のひとつであり、やはり幼貝と思われるものを含む。岩礁の潮間帯から水深20ｍ程度の所に生息する。

６ムラサキインコガイ（Septifer（Mytilisepta）virgatus） 本種も貝ブロック等の主体を成す種のひとつであり、幼貝と思われるものを含む。岩礁の潮間帯に生息する。

７イガイ科の一種（Mytilidae gen. et sp. indet.） 放射状の刻目が著しくシロインコガイに類似するが、本種は伊豆以南に生息するものであるために、イガイ科の一種に留めた。

８チリハギガイ（Lasaea undulata） ムラサキインコガイの足糸に付着する種であるが、ムラサキインコガイに比して検出量が著しく少なかった。

蔓脚亜綱

９アカフジツボ（Balanus tintinuabulum rosa） チシマフジツボよりは検出量が少ない。岩礁の潮間帯低潮線付近に生息する。

10チシマフジツボ（Balanus cariosus） 貝ブロックの主体を成す種のひとつである。№５Ｈ貝ブロックＡなどでは殻板の各部位がある程度まとまって検出されているのに対して蓋板を構成する楯板と背板はほとんど検出されていない。

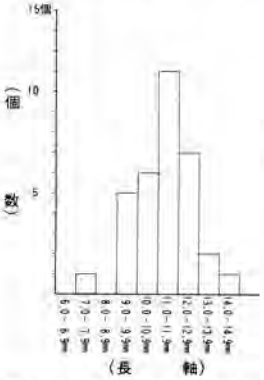
短尾亜目

11カニ（十脚目短尾亜目の一種） カニ（あるいはエビ）のハサミ片を２点検出した。同一個体の可能性もある。

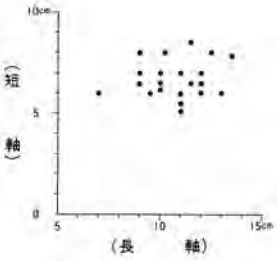
植物遺存体（第２表～第４表）

第９号竪穴住居跡埋土中からはドングリ状のもの41個、径２㎜程のもの1,659個、径１㎜程のもの16個を検出した。このうちドングリ状のものを第３表と第４表にまとめた。

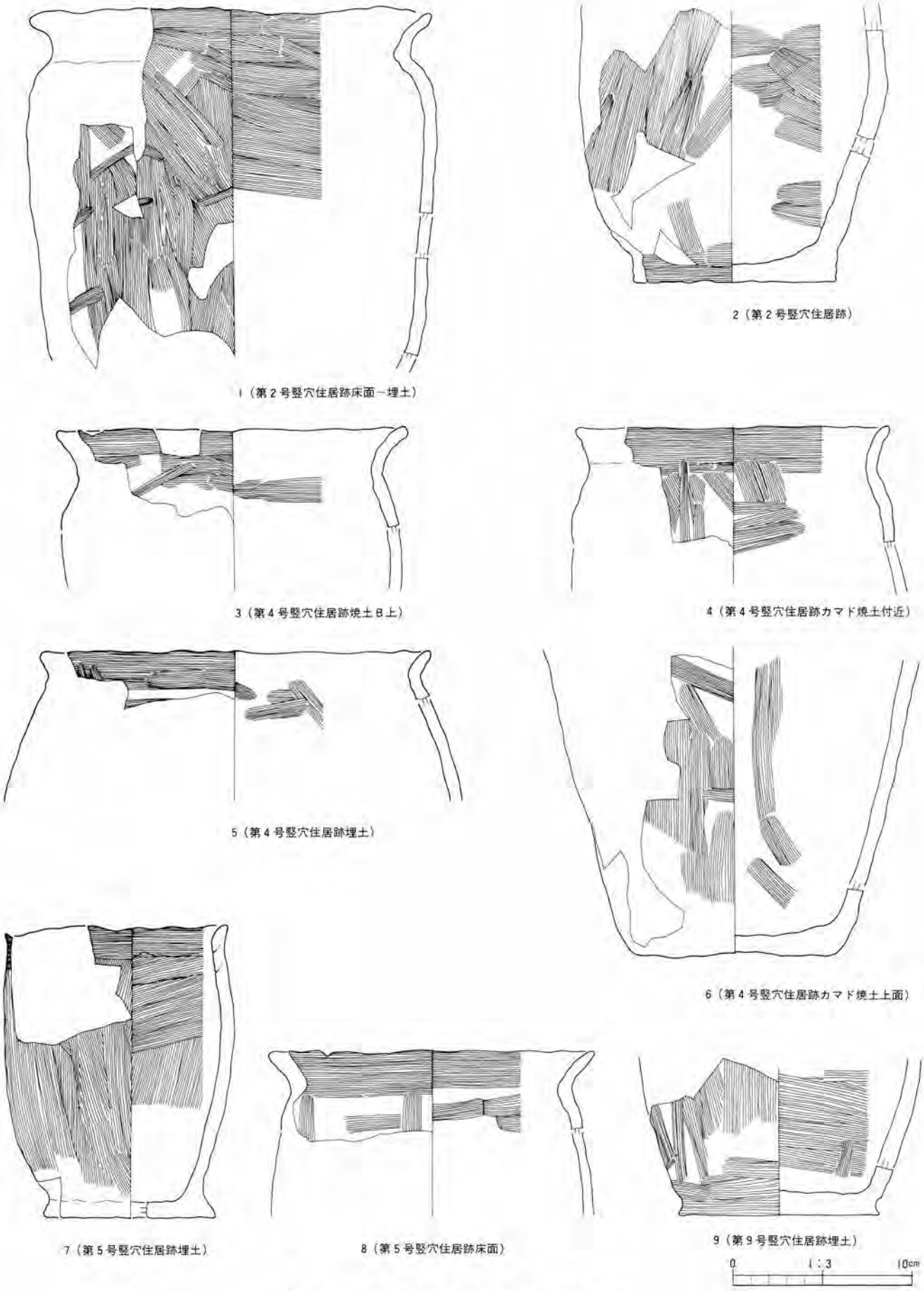
また、第５号竪穴住居跡貝ブロックＣ、Ｅからも炭化種実が検出されている。



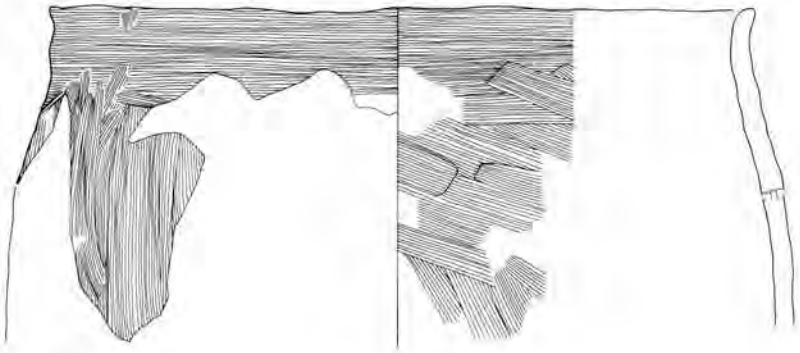
図表１　ドングリ状炭化種実長軸毎の出土点数（№9Ｈカマド出土）



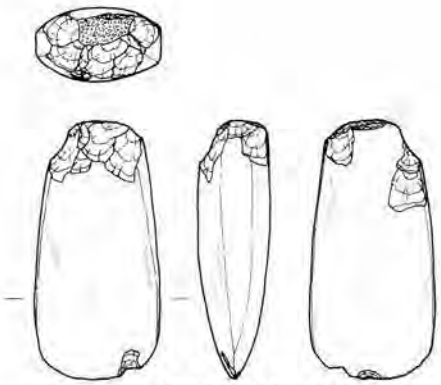
図表２　ドングリ状炭化種実長幅比（№9Ｈカマド出土）



第25図　細越Ⅰ遺跡出土遺物１（土器－１）

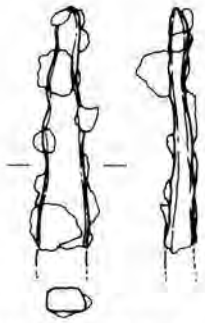


10（第9号竪穴住居跡埋土）

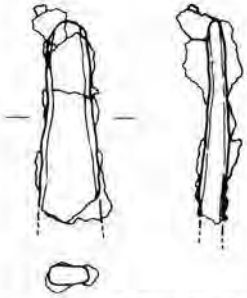


11（第3号竪穴住居跡埋土）

0　1：3　10cm



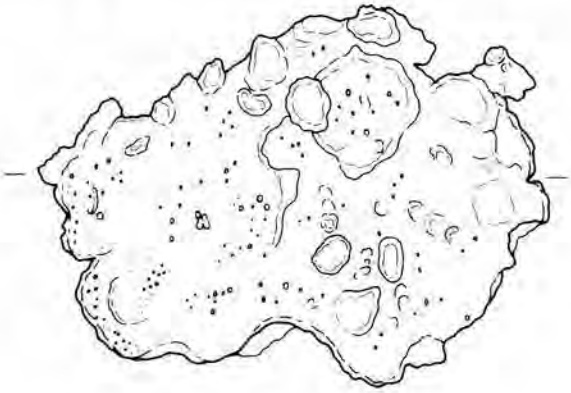
12（第1号竪穴住居跡）



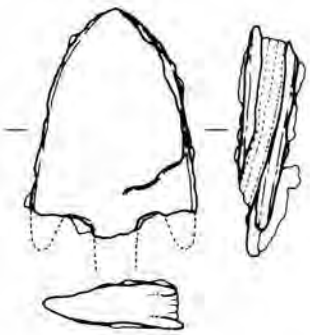
13（第1号竪穴住居跡埋土）

14（第1号竪穴住居跡内
第6号鍛冶炉）

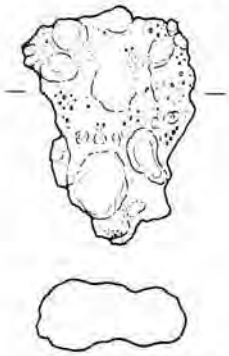
17（第2号竪穴住居跡埋土）



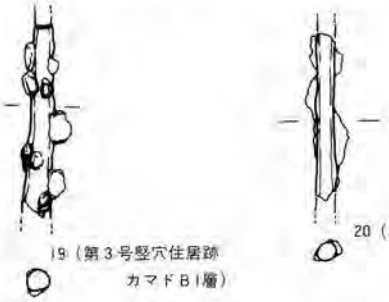
15（第1号竪穴住居跡埋土）



16（第2号竪穴住居跡埋土）



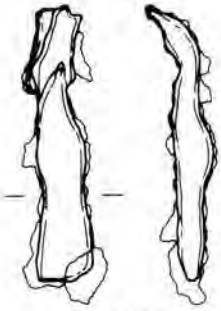
18（第2号竪穴住居跡埋土）



19（第3号竪穴住居跡
カマドB1層）

20（第3号竪穴住居跡
カマドB1層）

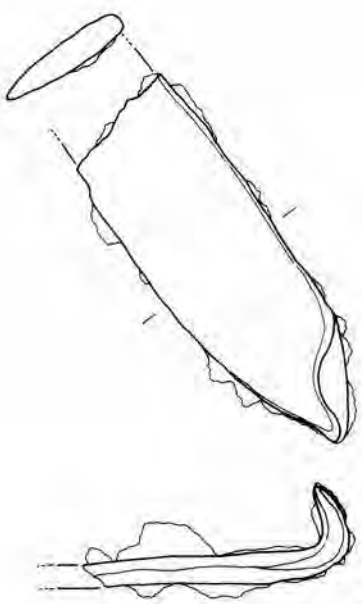
21（第3号竪穴住居跡
カマドB1層）



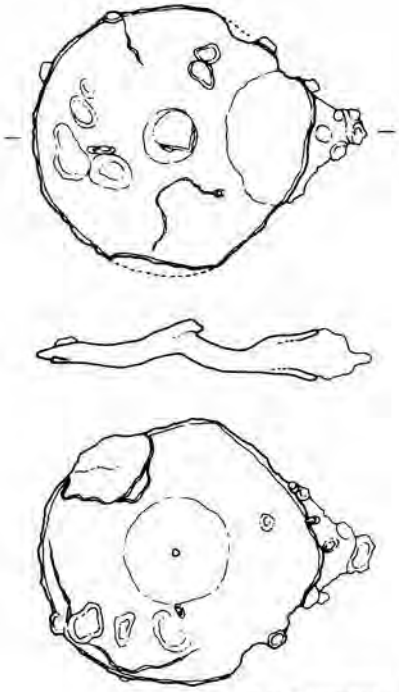
22（第3号竪穴住居跡
カマドB1層）

0　2：3　10cm

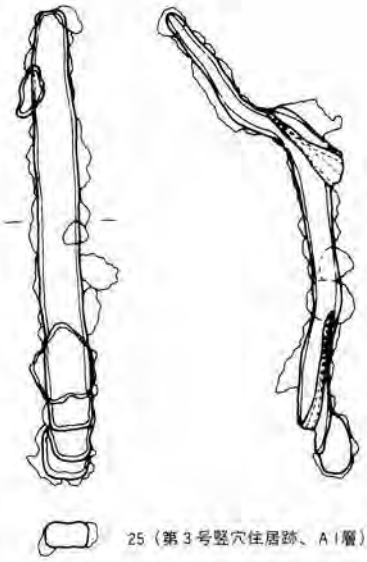
第26図　細越Ⅰ遺跡出土遺物2（土器－2、石器－1、鉄器、鉄塊1）



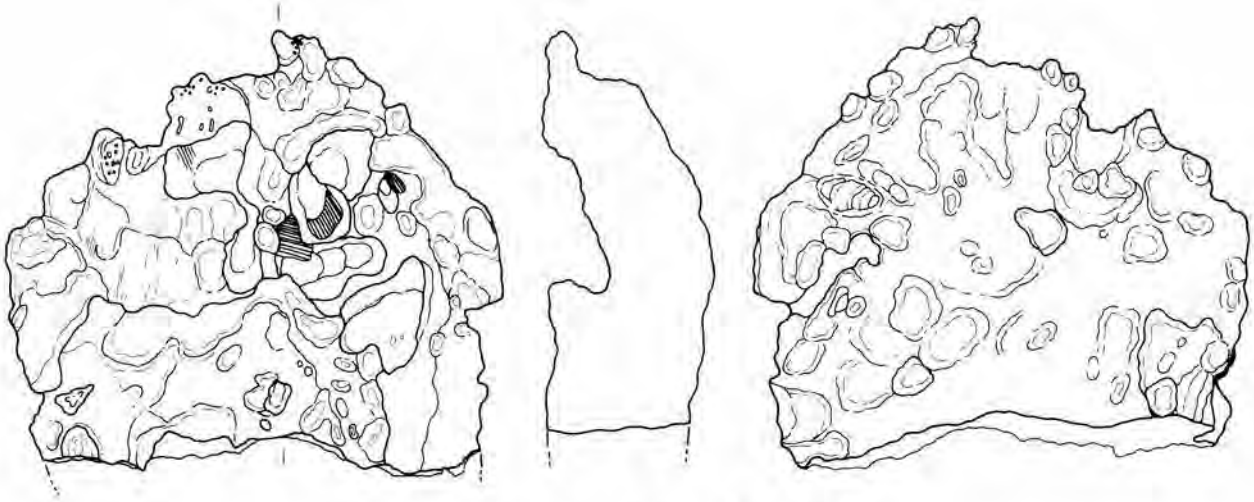
23（第３号竪穴住居跡、第２号土壙跡、Ｅ１層）



24（第３号竪穴住居跡、Ａ１層）

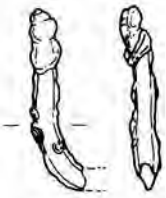


25（第３号竪穴住居跡、Ａ１層）

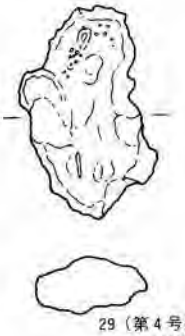


26（第３号竪穴住居跡、第２号土壙跡、Ｅ３、４層）

27（第４号竪穴住居跡、Ｂ１層）

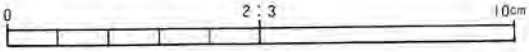


28（第４号竪穴住居跡床面
第21号鍛冶炉付近）

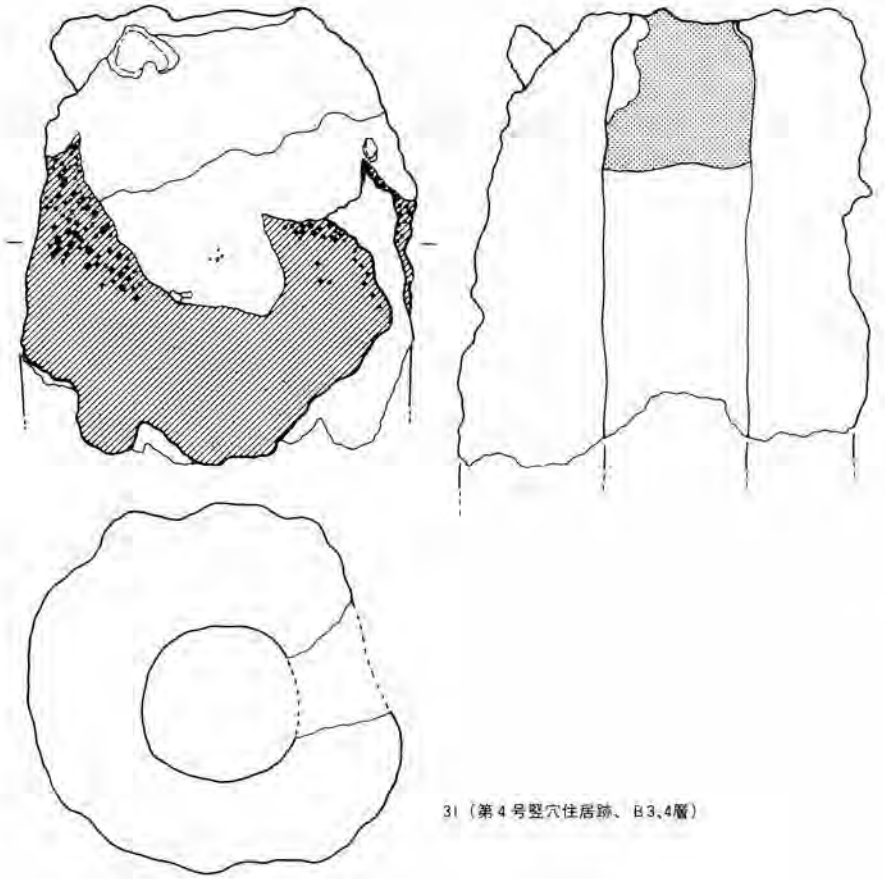


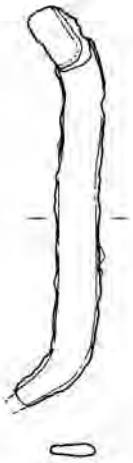
29（第４号竪穴住居跡
カマド付近、Ｅ６、７層）

30（第４号竪穴住居跡
カマド付近、Ｅ６、７層）



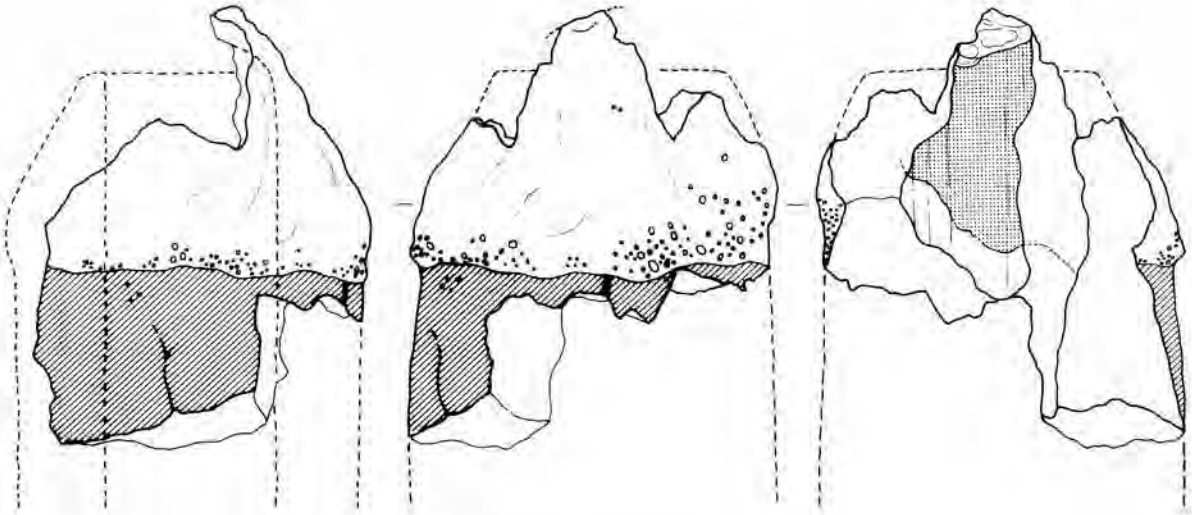
第27図　細越Ｉ遺跡出土遺物３（鉄器、鉄塊２）

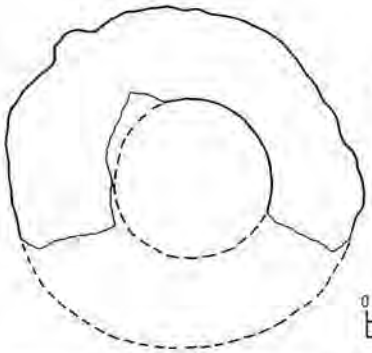




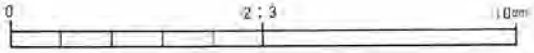
32（第5号竪穴住居跡、第1号土壙跡、貝ブロックD）

31（第4号竪穴住居跡、B3,4層）

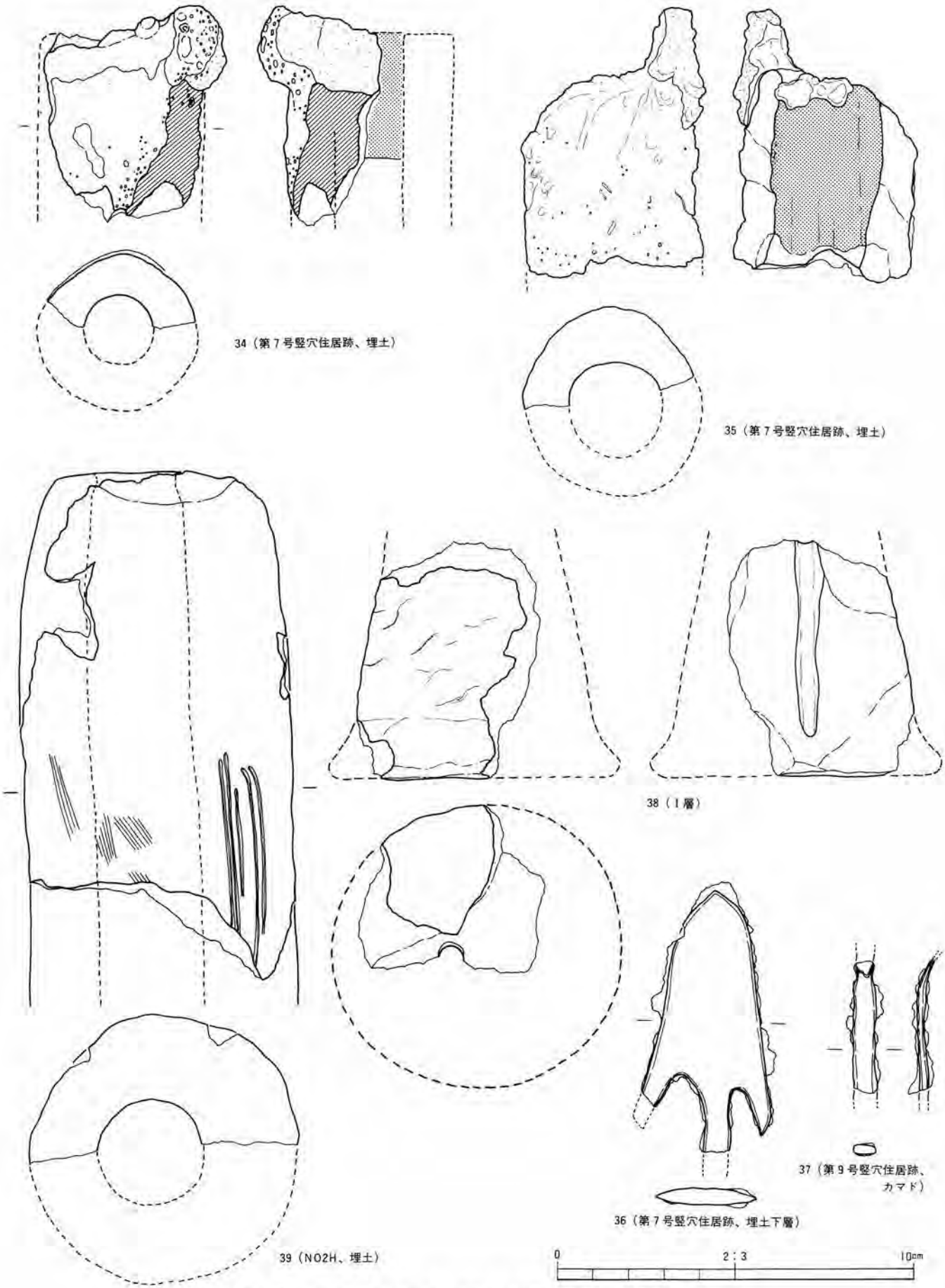




33（第5号竪穴住居跡、C3層）



第28図　細越Ⅰ遺跡出土遺物4（鉄器－3、土製品－1）



第29図　細越Ⅰ遺跡出土遺物５（鉄器－4、土製品２）

2．芋野II遺跡第１次調査

(1)調査の方法

芋野II遺跡は、田代川上流部（芋野川流域）の芋野地区に位置し、崖錐性扇状地及び谷底平野上に立地している。

遺跡周辺は西から東に向かい緩やかに傾斜しており、標高は上部で280ｍ程度、下部で260ｍ程度である。遺跡の範囲は不明瞭ではあるが、本調査区はほぼ東端部に位置するようである。

本調査区は、農道の拡副により破壊される部分について実施したが、周辺に土捨場を確保できなかったために、とりあえず西半部（Ｂ区）を調査した後にこれを埋め戻して東半部（Ａ区）を調査した。

(2)基本層序

調査区の土層は、Ⅰ層～Ⅸ層に大別される。

Ⅰ層は表土層であり、黒褐色土を基本土とし黒褐色土塊・暗褐色土塊をわずかに含む。固さは中程度でややしまりがない。径５cm程度の礫を少量含む。

II層は黒色土を基本土とし、黒褐色土塊をわずかに含む。固さは中程度でしまりがない。径５cm程度の礫を少量含む。

III層は黒褐色土を基本土とし、２層に細分される。IIIａ層は暗褐色土塊や黒色土塊をやや多く含む。IIIｂ層は暗褐色土塊などを含むが混入量はIIIａ層より少ない。いずれも柔らかくややしまりがない。また、礫はほとんど含まない。

Ⅳ層は礫層で、径数cmの亜角礫中に径30cm程の亜角礫を少量含む。礫間には黒褐色土や暗褐色土が堆積する。

Ⅴ層は黒褐色土を基本土とし、黒色土塊などをわずかに含む。やや柔らかくしまりがない。礫をほとんど含まない。

Ⅵ層は砂礫層で、砂の中に径30cm程の亜角礫を多く含む。また、黒褐色土塊もやや多く含まれる。

Ⅶ層は黒色土を基本土とし、黒褐色土塊をわずかに含む。やや柔らかくややしまりがない。径30cm程の亜角礫を多く含み、特に斜面下部（南側）ほど多い。小さ目の礫は少ない。

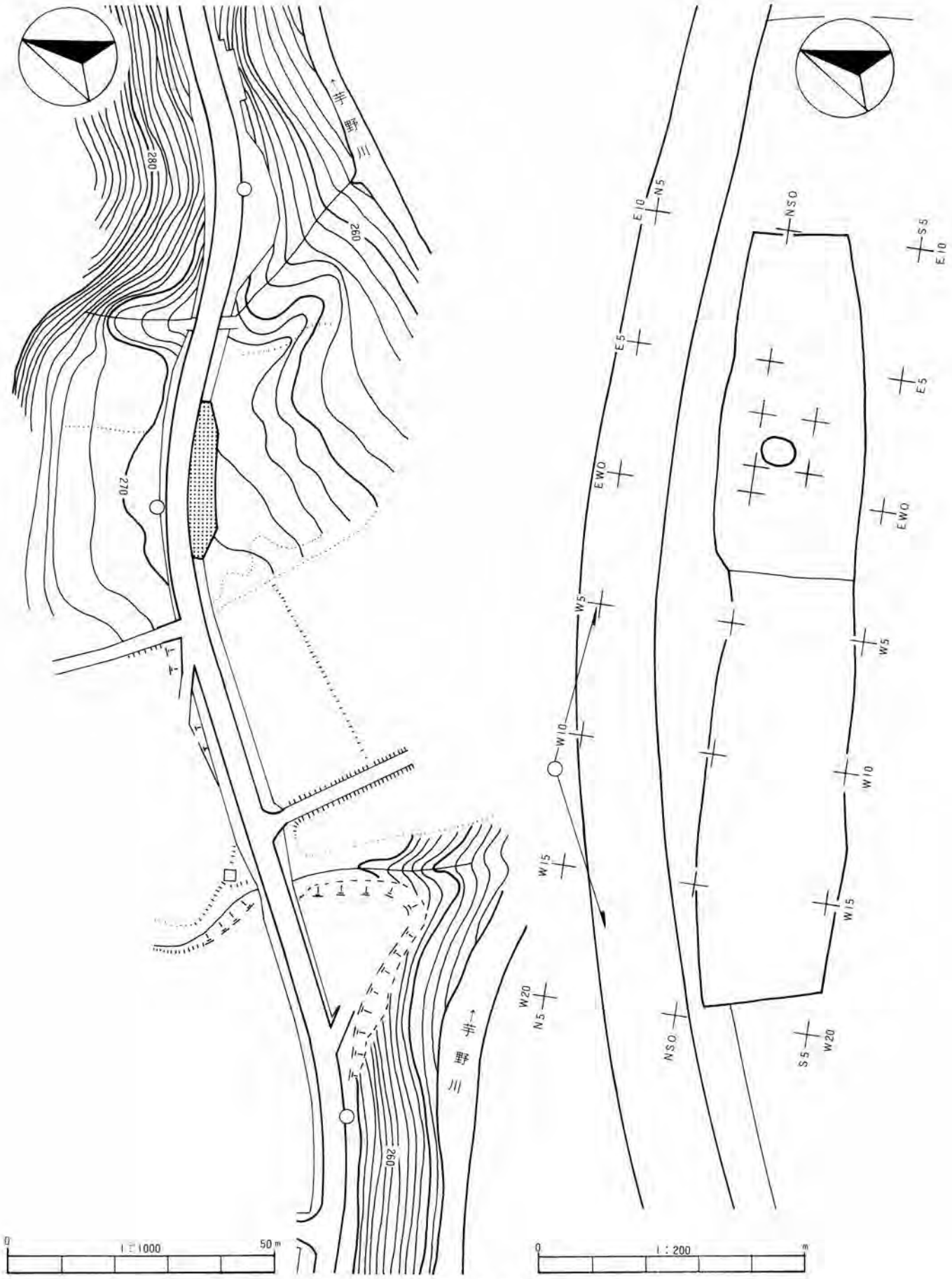
Ⅷ層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを少量含む。やや柔らかくしまりは中程度である。径５cm程の礫を含むが、径30cm程の礫は少ない。

Ⅸ層は、やや明るい暗褐色を呈する砂礫層で、砂の中に径５cm程の礫を多量に含む。土や遺物を含まないことから地山と判断した。

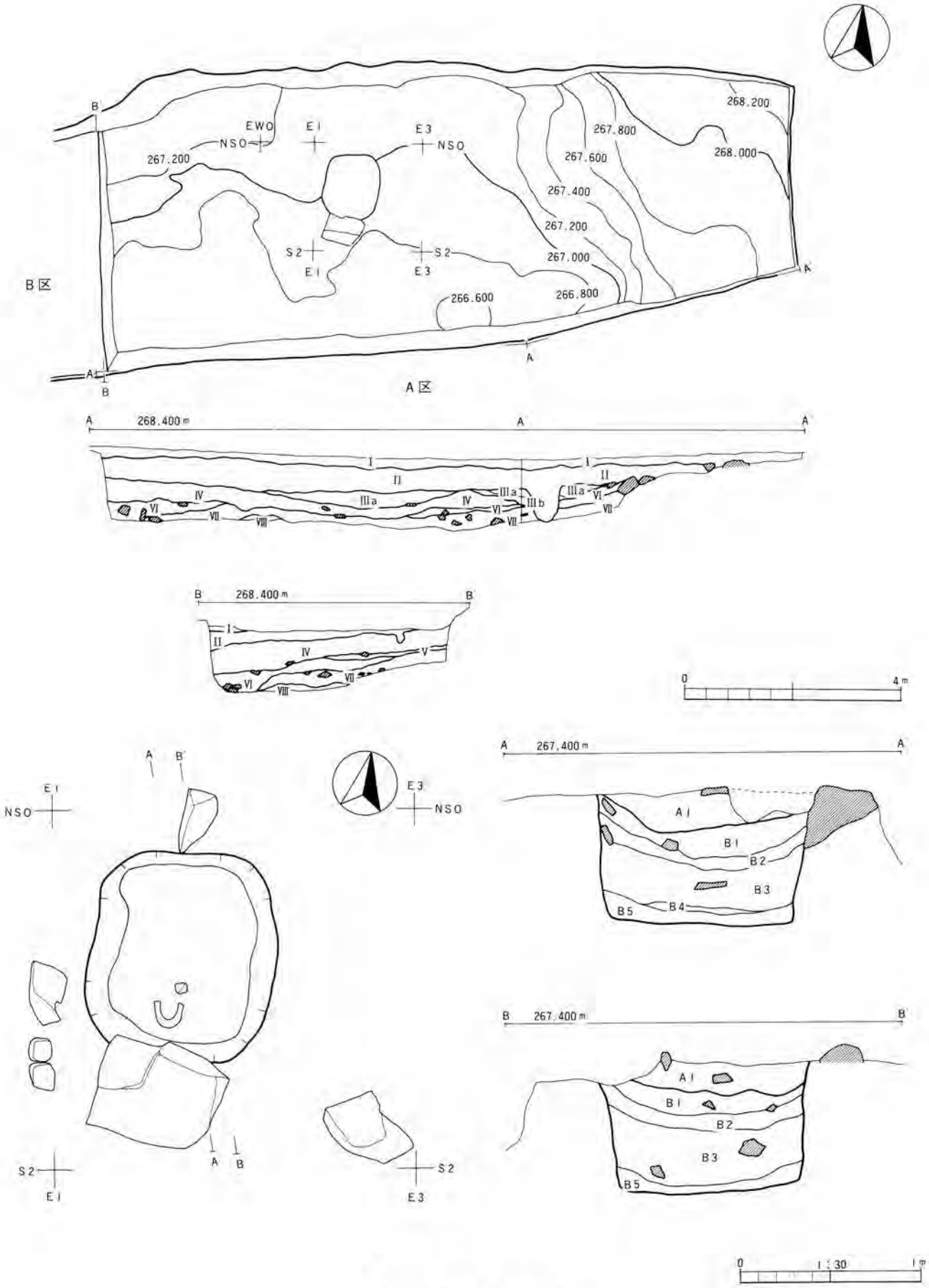
(3)遺構の検出状況

Ａ区のⅦ層上面で第１号土壙跡を検出したが、掘込み面はもっと上層であった可能性がある。また、調査区内の上層で土器等の遺物を含む層はIIIａ層・Ⅴ層・Ⅶ層・Ⅷ層であり、Ⅴ層とⅦ層で特に多い。

Ｂ区については完掘できなかったために不明瞭ではあるが、遺構は検出されず遺物もほとん



第30図　芋野II遺跡周辺地形図・調査区設定図


B区
A区
268.200
267.800
268.000
267.600
267.400
267.200
267.000
266.800
266.600
267.200
EWO
NSO
E1
E3
S2
268.400m
267.400m
A1
B1
B2
B3
B4
B5
0
4m
1:30
1m

第31図　第1号土壙跡

ど出土していない。

(4)検出された遺構と遺物

第１号土壙跡（第31図）

Ａ区中央よりやや西寄りに位置する。前述したようにⅦ層上面で検出したが、もっと上層から掘込まれた可能性もある。

平面形　平面形はほぼ隅丸方形を呈し、規模は東西1.0ｍ、南北1.15ｍ、深さ0.75ｍである。壁はほぼ直壁で、底面は平坦でやや固い。周辺部には周湟等の付属施設は検出できなかった。

主軸方向はN6°Wである。

埋土　埋土はＡ層とＢ層に大別される。

Ａ１層は黒褐色土を基本土とし暗褐色土塊、褐色土塊をわずかに含む。柔らかくしまりは中程度である。土器片と少量の礫を含む。また、Ａ１層とＢ１層の層相面から第32図１の鉄器が出土している。

Ｂ層は礫を含む黒褐色土層で、５層に細分される。Ｂ１層・Ｂ３層・Ｂ５層は、やや明るい黒褐色土を基本土とし、黒色土塊などをやや多く含む。いずれも固さしまりともに中程度である。Ｂ１層とＢ３層で特に多く礫を含むがＢ５層ではやや少ない。

また、Ｂ３層中より焼骨片を微量検出している。

Ｂ２層は黒褐色土を基本土とし褐色土塊などを少量含む。やや柔らかくしまりは中程度である。礫をやや多く含む。第32図２～４の鉄器を含む。

Ｂ４層は黒色土を基本土とし黒褐色土塊をやや多く含む。柔らかくややしまりがない。礫を少量含む。

また、焼骨片を少量検出している。

出土遺物（第32図・第33図）

５～６はＡ１層から、７はＢ１層から出土した土師器甕の破片である。５・７は口縁部破片であるが、口縁部がやや外反し、頸部の屈曲はゆるやかである。内外面ともに弱いヘラナデで器面調整される。

６は底部破片で、底面に広葉樹の木葉痕を有する。

鋤先　１はＡ１層から出土した鋤先である。形状はＵ字形を呈するものの、内側がわずかに角ばっている。木製の風呂を装着する部分にはＶ字状の溝がめぐっているが、木質部は現存しない。

計測値は、長さ17cm、幅16.8cm、刃幅5.6cmである。

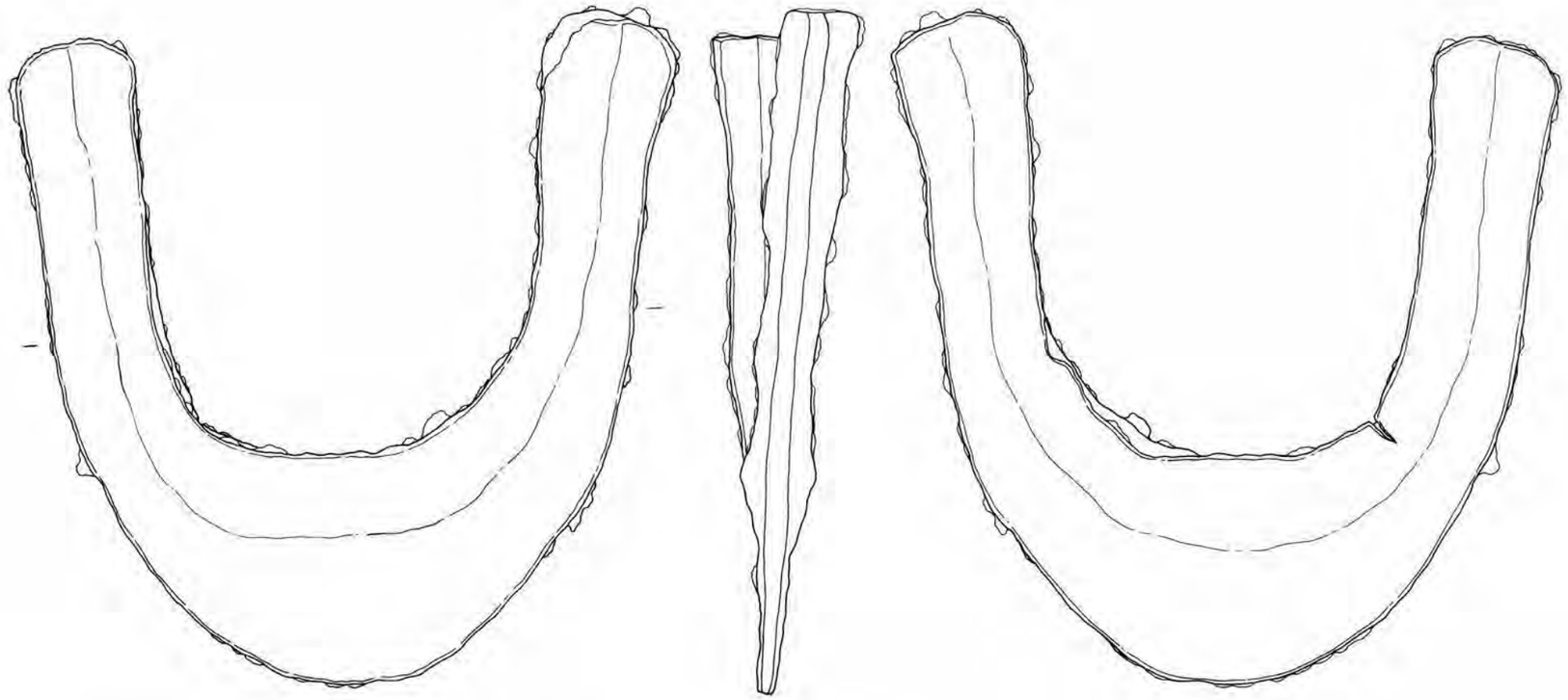
刺突具　２はＢ２層から出土した刺突具で、基部から先端部にかけて次第に細くなり、先端部付近ではかなり鋭く尖る。断面形は四角形である。基部は下端部を欠き、全容は不明であるが、下端から4.6ｍにわたり木質部が付着している。

この鉄器は着柄して使用されたものと思われ、おそらくヤスに相当するものと思われる。

計測値は、長さ10.9cm以上、幅0.5cmである。

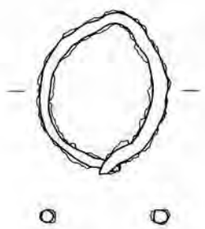
環状鉄製品　３・４もＢ２層から出土した環状鉄製品で、細い針金状のものを丸めて環にし、両端部を重ね合わせている。３は径が3.2～4.0ｍで、４は2.2～2.5cmである。

また、Ｂ３層とＢ４層から出土した焼骨片は細片で保存状態が悪く、しかも関節部を残すも



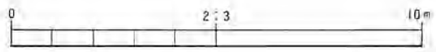
1（第Ⅰ号土壙跡・A1層）

2（第Ⅰ号土壙跡・B2層）

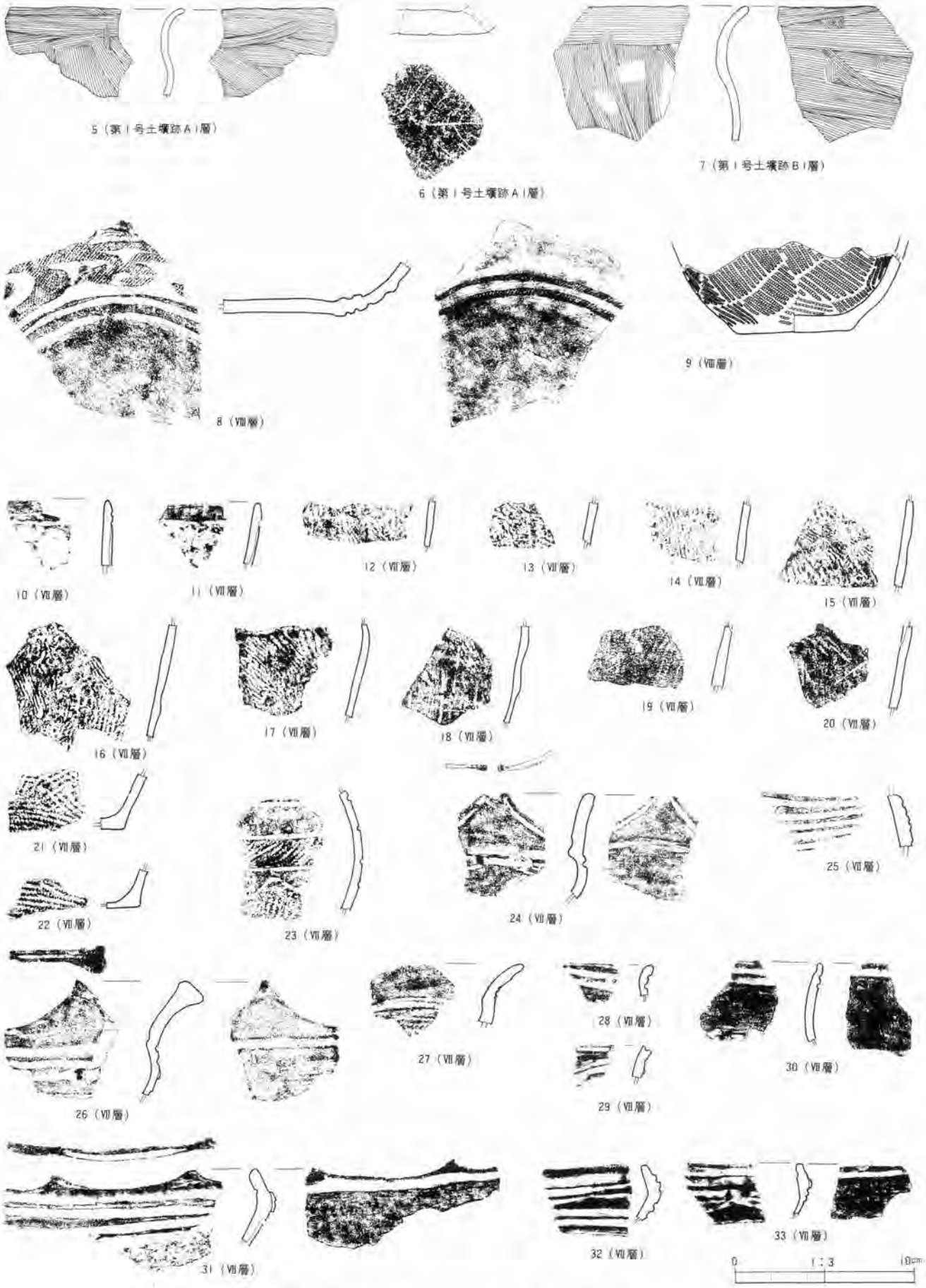


3（第Ⅰ号土壙跡・B2層）

4（第Ⅰ号土壙跡・B2層）



第32図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物Ⅰ（第Ⅰ号土壙跡出土鉄器）



第33図　芋野II遺跡出土遺物２（土器－1）

のが無かったので種を同定をできたものは無い。

遺構外出土遺物（第33図～第38図）

A区は東端部を残き遺物包含層が形成されていた。しかし、各層ともに堆積時以前の遺物を多量に含んでおり、二次的に形成されたものである可能性も大きい。

Ⅷ層出土土器（第33図）

出土点数は少なく図示できたのは2点のみである。8は皿の体部下半～底部である。外面は磨消技法による幅の狭い縄文帯にて曲線的なモティーフが施文されるものの、全容は不明である。内面には幅の狭い縄文帯が2条めぐっている。

9は深鉢の体部下半～底部で、L－R単節斜縄文のみを施す。

Ⅶ層出土土器（第33図～第37図）

10・11は直線的に立ち上がる口縁部の破片で、口縁部文様帯に交互刺突文が施される。

12・13・18・19～22はそれぞれ別々にまとまって出土したものである。口縁部を欠き器形は不明であるが、いずれも縄文を地文としている。原体は不明である。

34～43は出土状況にまとまりを持たないもので、撚糸に類似する縄文を地文としている。器形は不明である。

23は体部に膨らみを持つ深鉢で、磨消技法により幅の広い横位縄文帯と山形の縄文帯などを施す。

24は浅鉢か高坏と思われ、山形口縁を呈す。波頂に沿った沈線のほか、粘土粒を伴う変形工字文（？）が施される。

25は壺かと思われる体部破片で、平行沈線が施される。

97～99は小片であり器形等不明であるが、他のものに比して著しく細い沈線にて施文されている。

96も同様と思われる。

26・31・33・44・52～61・101～119・176は浅鉢または高坏の口縁部破片である。口縁部形態はA・山形の大波状口縁を呈すもの（26・116・117）、B・小波状口縁を呈すもの(41・107)が少数みられるが、大半はC、平縁のものである。

Aは、波頂部が外反し口縁部に膨らみを有する。Bは口縁部に膨らみを有する。Cは口縁部に膨らみを有するものと、直線的に外傾するものがみられる。

モティーフは変形工字文を主体とし、沈線によるもの、浮文を伴うもの、粘土粒を伴うものがある。

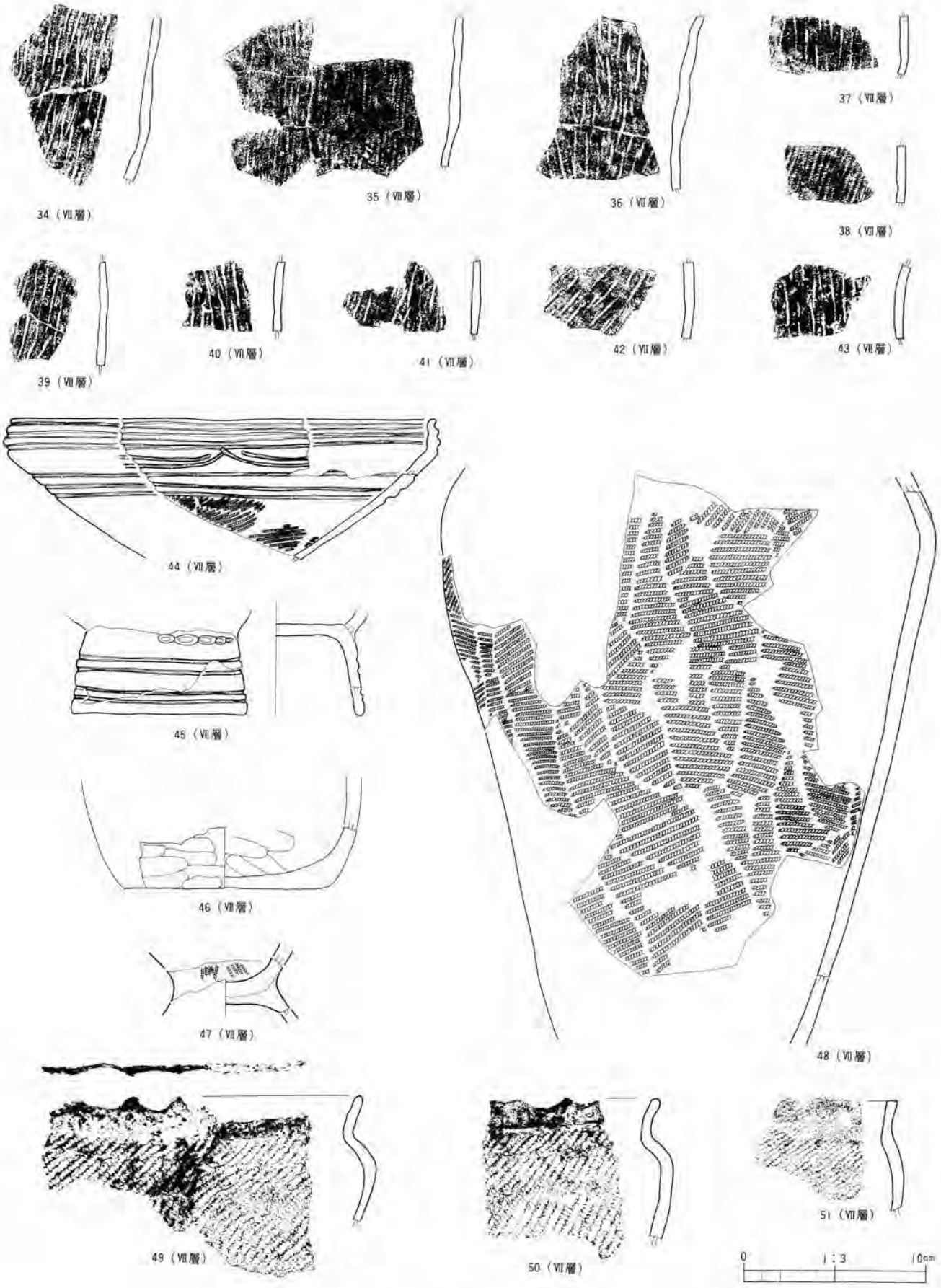
65～73・76・77・120～135・177～179は同様な器形のものの体部破片である。

45・81～83・140～144は高坏の脚部である。141はやや大形であり、別な器形かもしれない。

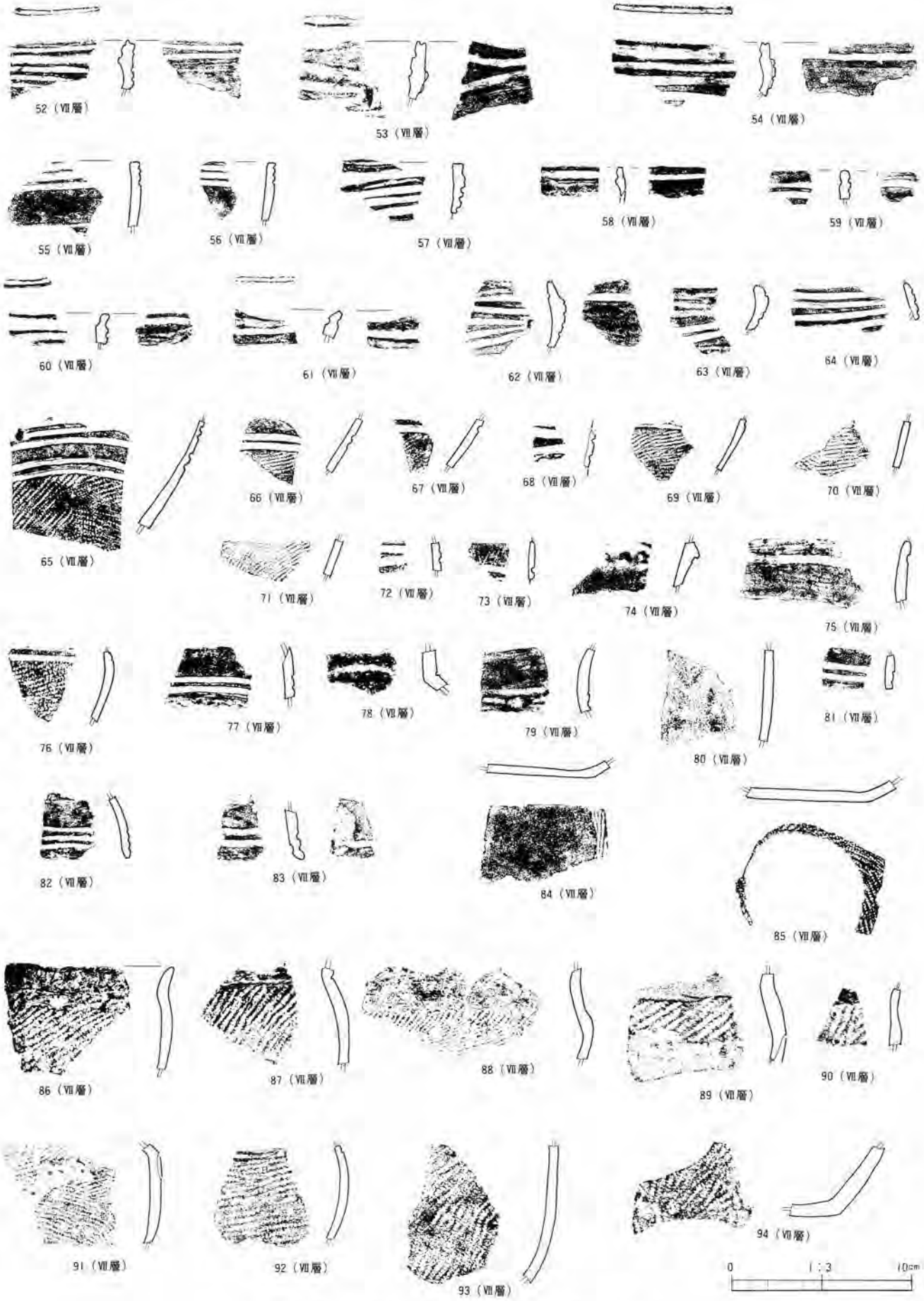
84・85は浅鉢の底部である。

136は鉢形土器で体部下半に強い膨らみを有する。

28～30・78・79・137～139は壺と思われるものである。

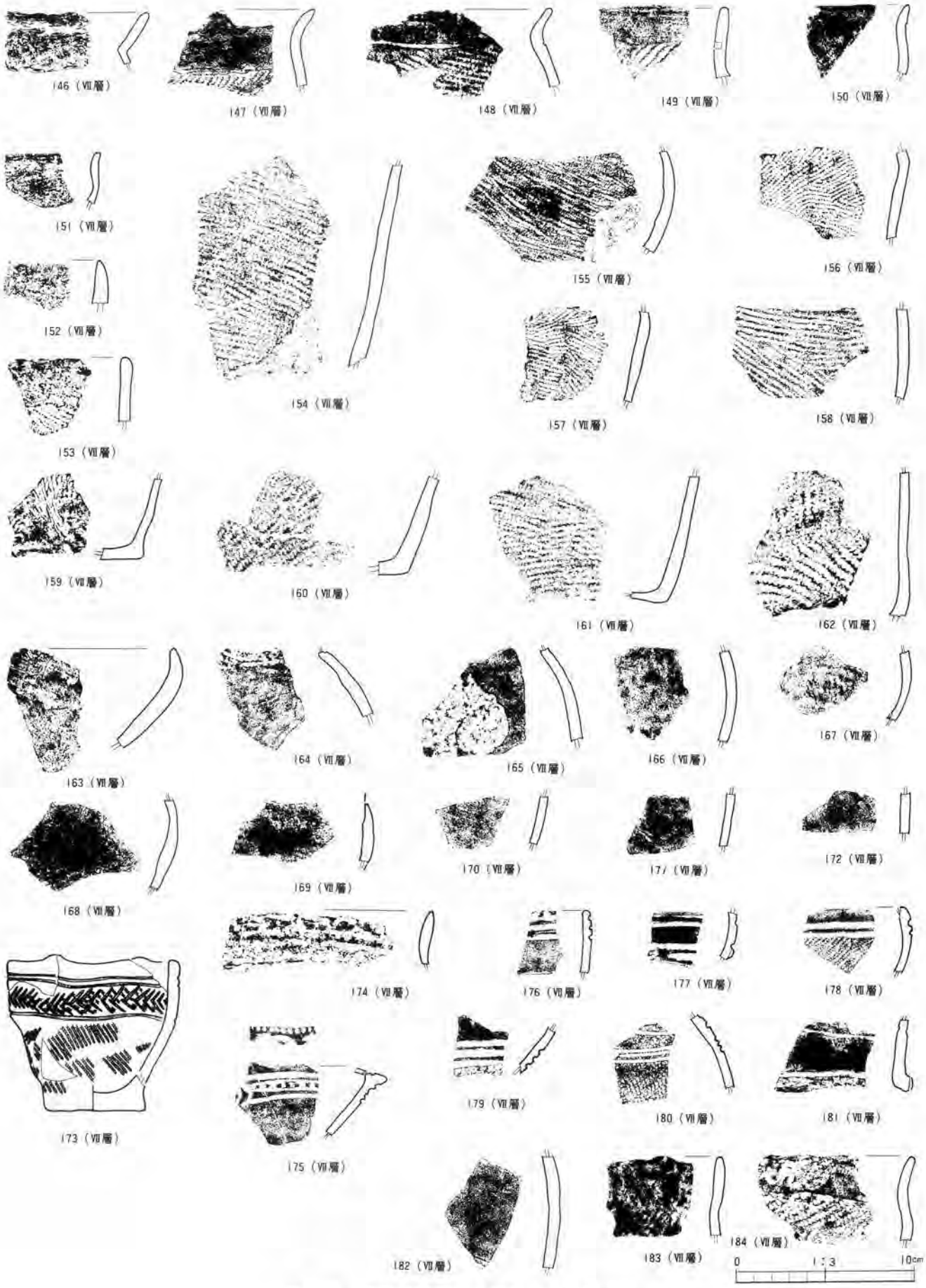


第34図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物３（土器－2）



第35図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物４（土器－３）

第36図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物５（土器－４）



第37図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物６（土器－5）

47は台付鉢形土器等の台部の破片である。

48～51・86～94・146～162は粗製の深鉢である。口唇部は小波状とし、口縁部は無文帯とするのが一般的なようである。口縁部無文帯の下端に沈線を伴うものもみられる。

95・163～172・182は無文の土器で、器面は丁寧に調整されている。95・164～168・182は壺と思われるが、163は浅鉢である。他のものの器形は不明である。

95は胎土が他のものとやや異なり、断続的な沈線状の施文もみられる。

173は口縁部がやや内湾気味の小形深鉢で、口縁部文様帯に沈線により矢羽根状の施文がみられる。

175は体部に強い屈曲を有し、注口土器等の器形が想定される。沈線や刻目による施文がみられる。

174は半粗製の深鉢で、口唇部を小波状とし、口縁部文様帯に横位の平行沈線を施す。

Ⅵ層出土土器（第38図）

185は土師器甕である。口縁部が強く外反し、頸部から体部の屈曲はゆるやかである。器面調整は口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向の刷毛目である。

186～193は高坏や浅鉢等の破片で、いずれも沈線にて施文される。186は口縁部がわずかに外反し、山形の小突起を有する。187は口縁部の外傾するものである。

Ⅴ層出土土器（第38図）

201～204はいずれも縄文のみを施す深鉢である。201は口縁部の内湾し、202は外反、204はほぼ直上に立ち上がるものである。

Ⅳ層出土土器（第38図）

195は土師器甕である。口縁部が外反し、体部に膨らみを有する。器面調整は口縁部が円外面ともにヨコナデ、体部外面が縦方向の弱いヘラナデ、内面が横方向の弱いヘラナデである。

196～200・205・206は高坏や浅鉢等の破片で、いずれも沈線により施文される。

196・205は口縁部が平縁で内湾するものである。

198は口縁部に台形の突起を有するものである。

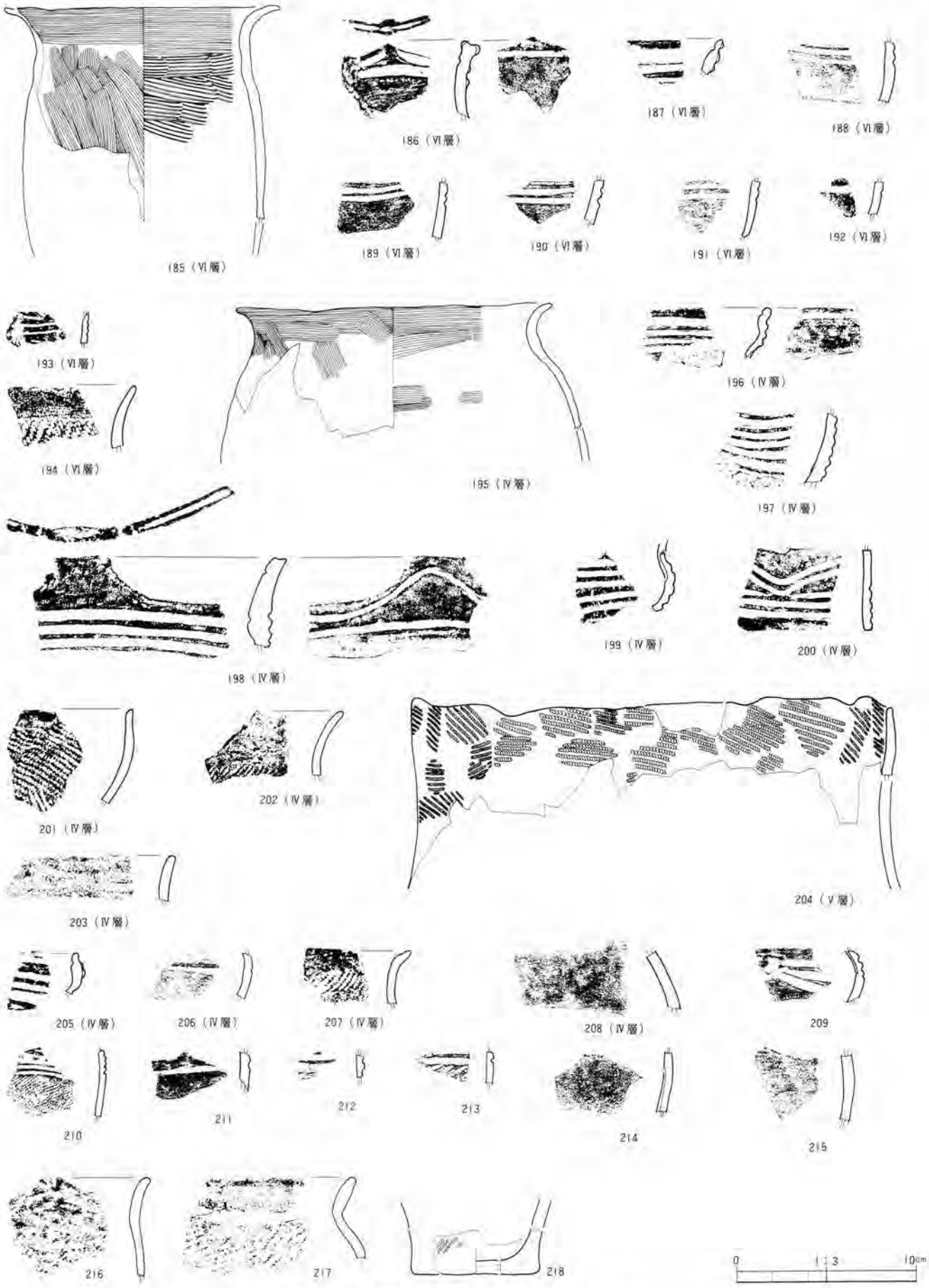
200は高坏の脚部で、下端に３条の平行沈線を施し、上位に２条の平行沈線による波状文を施す。

207は小形の粗製深鉢で、204は無文の壺である。

Ⅲ層～Ⅰ層出土土器（第38図・第39図）

209～231はⅢ層～Ⅰ層から出土した土器であるが、重機により掘り上げたために出土した層位が不明であり一括する。209～218が比較的下層から、219～231がこれより上層から出土している。

215は土師器甕の破片である。



第38図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物７（土器－6）

209・211～222・229は高坏や浅鉢等の破片で、いずれも沈線により施文される。

214・223・231は無文の土器である。

216～218・224～228は縄文のみを施す粗製浅鉢である。

210は鉢の破片で、平行沈線と刻み目により施文される。

出土石器（第39図）

出土点数も少ないので器種毎に説明する。

石槍

232～234は石槍である。232・233はやや小形であり、欠損しているが木葉形を呈するようである。両側縁に刃部調整されるがやや粗雑である。

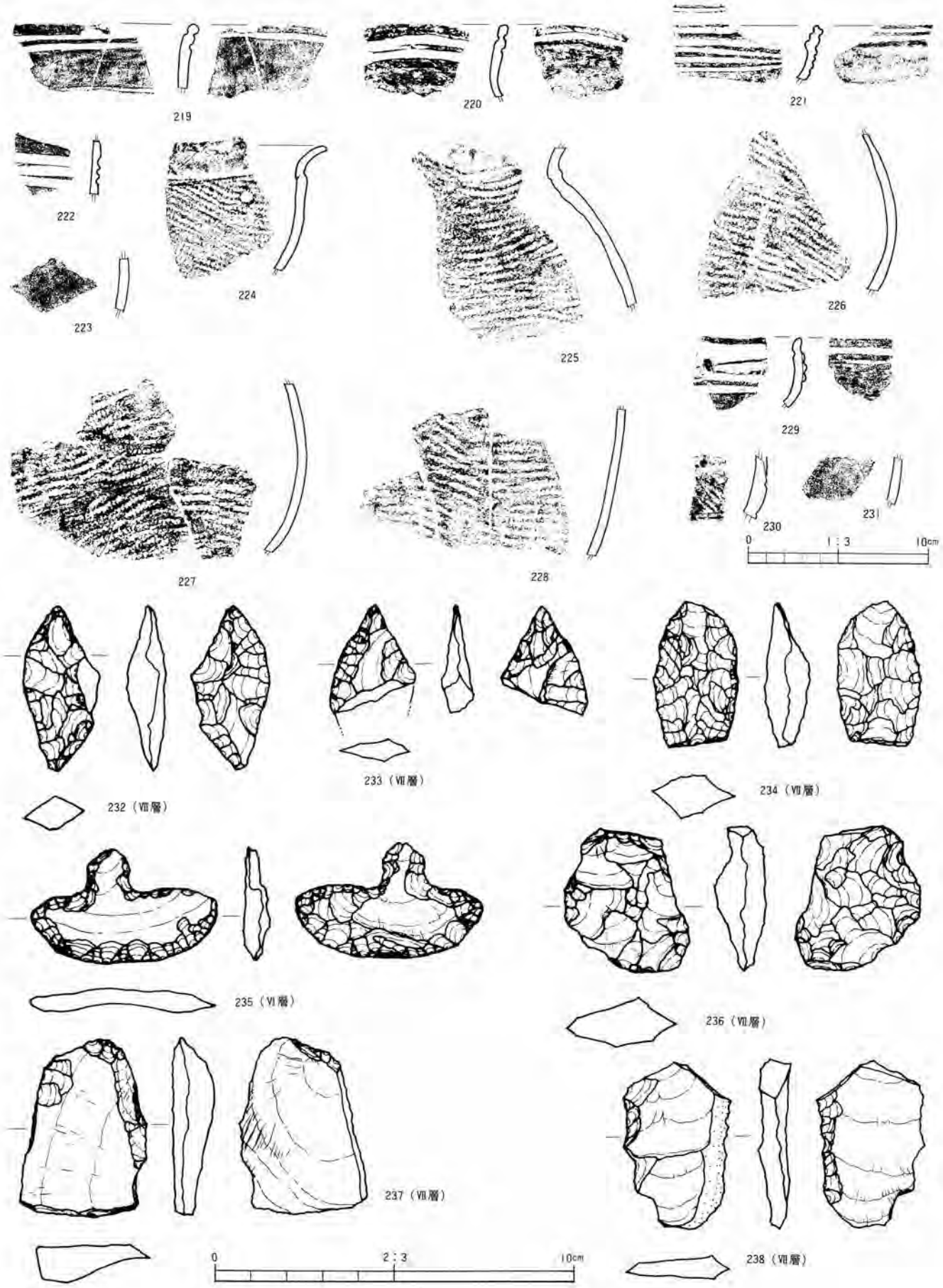
234は先端部を欠くが、柳葉形を呈するようである。比較的丁寧に調整される。

石匙

235は横形石匙で、周縁を調整する。刃部は両刃でやや角度が鈍い。

削器

236～238は不定形の削器である。236は両面を調整するもので、237・238は縦長の剥片の一側縁を片側から調整して刃部としたものである。



第39図　芋野Ⅱ遺跡出土遺物８（土器－7、石器－1）

Ⅳ　調査のまとめ

時間的制約と担当者の能力不足から十分な検討が加えられたとは言い難い現状ではあるが、今回の調査結果から細越Ⅰ遺跡と芋野Ⅱ遺跡について若干の問題点に触れてまとめにかえたい。

1．細越Ⅰ遺跡

(1)遺構について

本書では竪穴状の遺構を総称して竪穴住居跡とした。しかし、厳密な意味で竪穴住居跡としての要件を備えているのはカマドが確認された第２号～第４号・第９号竪穴住居跡だけである。

第１号・第７号・第８号・第10号竪穴住居跡は全掘しておらずカマドの有無は不明である。

第６号竪穴住居跡は第５号竪穴住居跡に著しく破壊されており、これも不明である。

しかし、第５号竪穴住居跡は全掘しカマドを持たないことを確認した。ただし、床面に焼土や柱穴を確認しており、また、規模や平面形もカマドを有するものと大差がない。

また、カマドを持たない竪穴住居跡については床面の焼土や屋外の焼土遺構がこれを補っていた可能性も想定できる。

従って、両者の性格について早急に結論づけるのは図難な状況である。

次にこれらの共伴関係であるが、重複関係や出土遺物では十分な情報を得ることができなかったので、試みに各々の竪穴住居跡の距離を計測してみた（註１）。すると、第１号・第９号・第４号・第７号竪穴住居跡がそれぞれ芯々で18ｍの等間隔となった。これをⅠ群と仮称する。　**Ⅰ群**

同様に、第２号・第３号・第５号・第８号竪穴住居跡がそれぞれ芯々で17ｍの等間隔となった。これをⅡ群と仮称する。　**Ⅱ群**

更に、第１号炭窯跡・第10号竪穴住居跡・第２号炭窯跡もほぼ等間隔で、それぞれ芯々で22～24ｍ程となる。これをⅢ群と仮称する。　**Ⅲ群**

Ⅰ群とⅡ群は竪穴住居跡同志の組み合わせであり、出土遺物からは両群の間に大きな時間差は認められない。従って比較的短期間（同一時期）での遺構変遷を示している可能性が大きい。

両群は直接重複していないことから前後関係を導き出すことは難しいが、このことはむしろ両群の時間差が小さいことを裏づけているのかもしれない。

第４号・第５号竪穴住居跡間では、第４号竪穴住居跡の埋土が褐色土等を多く含み人為堆積的様相を呈するのに対し、第５号竪穴住居跡の埋土は自然堆積であることから、第５号竪穴住居跡造営時に第４号竪穴住居跡を埋め立てている可能性が指摘できる。

すると、Ⅰ群からⅡ群への変遷が想定される。しかし、同様な堆積状況が他の竪穴住居跡間でも確認されているわけではないので、確定はできない。

Ⅲ群については、性格の異なる遺構同志の組み合せであり、Ⅰ群・Ⅱ群とは異った様相を呈している。Ⅲ群の各遺構は、Ⅰ群・Ⅱ群の堆積が終了した後に両群の遺構を切って造営されており、Ⅰ群・Ⅱ群とはやや大きな時間差が想定できるかもしれない。

しかし、Ⅲ群からはほとんど遺物（特に土器）が出土していないので、どの程度の時間差があるのかは知るすべもない。

鍛冶炉　また、鍛冶炉とした遺構群については前述したとおり第１号竪穴住居跡の埋土中に営まれたものと、竪穴住居跡の床面に伴うものの２者がある。

第１号竪穴住居跡埋土中からは17基の鍛冶炉が検出され、これを鍛冶炉群として一括したうえで、下層のものをＢ群・Ｃ群、上層のものをＡ群と分類した。更に、規模から大形のもの、中形のもの、小形のものの３形態があることも判明している。

これらはいずれも楕円形や円形に掘り込んだ浅い土壙状の底面に酸化状態及び環元状態で焼成を受けただけのものであり、基本的には下部構造を持たないものである。また、炉内や炉の周辺部からは炉壁などの上部構造に関係する遺物も発見されていないことからも、極めて単純な構造の炉であると言える。更に、鍛冶炉群に伴う柱穴や掘り込み等は検出されなかった。

鍛冶炉群に伴う遺物としては、炉内及び炉周辺から多量のハンマースケールが出土しているほかは、板状の鉄製品・鉄塊・椀形滓（炉底滓）・フイゴ羽口片や多量のスラグがある。

これらのことから、鍛冶炉群は屋外で操業したもので、鉄塊を原料として半製品としての板状の鉄製品を作っていたものと思われる。

遺構の重複関係からは鍛冶炉群はⅠ群とⅢ群の間に位置し、Ⅱ群との関係を強く想定することができるものと思われる。

床面に鍛冶炉を伴う竪穴住居跡は、第２号竪穴住居跡に１基、第３号竪穴住居跡に２基、第４号竪穴住居跡に１基である。

これらの竪穴住居跡は鍛冶工房に相当するもので、鍛冶炉は屋内で操業されたものと言える。

遺物の出土状況で注目されるのは第３号竪穴住居跡で、床面に比較的近いものとしてはカマド周辺に何らかの製品の残欠と同われる棒状の鉄製品、半製品と思われる板状の鉄製品が出土しており、同様にカマドわきの土壙（第３号土壙跡）からは鎌と椀形滓（炉底滓）が出土したほかに、多量のスラグ等が出土している。

また、住居跡埋土中から紡垂車と思われる鉄製の円盤と半製品と思われる板状の鉄製品が出土しているし、図示しなかったが若干の鉄塊も出土している。

この様に屋内の鍛冶炉には製品を伴っており、小鍛冶の段階に相当するものであろう。

屋外の鍛冶炉群については大鍛冶の段階なのか、あるいは小鍛冶でも製品を作る前の半製品を作る段階を想定すべきなのか、にわかには断定しかねるので、今後金属学的な分析等を通して検討して行きたい。

また、床面から鍛冶炉を検出できなかった竪穴住居跡にも鉄製品・フイゴ羽口・鉄塊・スラグ等が出土しており、何らかの形で鍛冶に深く結びつくものである可能性が大きい。

(2)土器について

今回の調査した土器はいずれも土師器の甕のみであり、土師器の坏類や須恵器は破片すら出土していない。

土師器甕はおおまかには大形のものと小形のものに大別され、前者が圧倒的に多い。

大形のものは体部が強く膨らむものとほぼ直線的なものの２種がある。また、底部の断面形が角がとれ丸味を有するもの、体部下端と底部に明瞭な境界線を有するもの、わずかな張り出しを有するものの３種がある。

口縁部はいずれも幅が狭く、やや外反するものが多い。頸部はほとんどが屈曲するものの段を有するものは無い。

器面調整は弱いヘラナデのみで、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラナデ、内面は縦方向及び横方向となる。

小形のもののうち図示できたものは１点のみである。口縁部はわずかに外反し、頸部の屈曲もわずかである。体部もわずかな膨らみを有するもののほぼ直線的であり、底部がやや張り出す。

器面調整はやはり弱いヘラナデで、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向、内面上半は横方向、下半は縦方向となる。

これらの土器群は出土点数も少なく明言はできないものの器形や器面調整に類似点が多く、あまり大きな時間幅を考えられないものと思われる。

県内の類似資料としては高橋信雄の第Ⅳ期（註２）や相原康二の第Ｘ群（註３）などが上げられ、平安時代後半期、おおむね11世紀代の年代観が与えられるようである。

ただし、宮古市内の古代の土器については磯鶏館山遺跡や花輪鰹沢遺跡から比較的良好な資料がまとまって出土しており、これらの整理が終了した段階で再度総括的な検討を加えることとしたい。

(3)動物遺存体と炭化種実について

動物遺存体については第５号竪穴住居跡の埋土中及び第４号竪穴住居跡埋土中や第５号土壙跡の埋土中に形成された小規模な廃棄ブロックのみに注目していたが、フルイ分けの結果微量ではあるが第９号竪穴住居跡カマド崩壊土中のドングリ廃棄ブロックからも貝殻片やカニのハサミが検出されており、他の竪穴住居跡のカマドや焼土の周辺にも微量の動物遺存体が伴っていた可能性は否定できない。

第５号竪穴住居跡及び第５号土壙跡には合計５単位の廃棄ブロックが確認されたが、いずれもイガイ・エゾイガイ・ムラサキインコガイといった岩礁性二枚貝類とフジツボなどにより構成されている。

岩礁性二枚貝類はいずれも保存状態が悪く計測できなかったが、幼貝を含み大きさにはかなりバラつきがある様である。また、特定の種のみに片寄った出土状態は特にみられなかった。また、魚骨や獣骨等は全く検出できなかった。

更に、検出された種の大半は潮間帯付近で容易に採集できるものばかりである。

これらのことからこの廃棄ブロックは、高度な漁業技術を持った人々により形成されたとは考えられず、また、種やサイズが精選されていないことから交易品とも考えづらい。

おそらくは集落の構成員が直接海岸にて採集したものを持ち帰って食料とした結果形成された廃棄ブロックであると見るのが妥当であろう。

とすれば、遺跡から海岸線までの直線距離は５～６㎞程であるので、半径数㎞程度の生活領域が想定されるかもしれない。

次に第９号竪穴住居跡のカマド崩壊土中に形成されたドングリ廃棄ブロックであるが、調査中に肉眼で確認できたのはドングリ類のみであったが、フルイ分けの結果微細な炭化種実を多

量に検出することができた。

これらの炭化種実をサイズ毎に分類すると、①楕円形で長軸７～14㎜のもの41個（最小個体数21個）、②径２㎜程度の円形のもの1,659個、③径１㎜程度のもの16個に分けられる。

①はサイズからコナラの種子に類似する。②はアワの種子に類似する。③については不明である。しかし、これらは正式な鑑定を経たものではないので確定できない。今後専門家に鑑定を依頼した上で何らかの形で補って行きたい。

以上から本遺跡でのメニューの一部として、雑穀類(？)、アク抜きの必要なドングリ類、岩礁性二枚貝類、フジツボ、カニが上げられる。

ｄ）まとめ

今回の試掘調査及び本調査を通して29棟の竪穴住居跡を検出している。未調査部分にも同様な割合で竪穴住居跡が存在するとすれば、全体で200棟～250棟程度の大集落となる可能性がある。

しかし、これらのすべてが同時に存在したものではなく、Ｉａ区では３期に遺構が変遷する可能性が想定された。また、IIａ区では重複する３棟の竪穴住居跡に１棟の竪穴住居跡が密接する検出例があることから、遺跡全体では最低でも４期くらいの変遷が想定できそうである。とすれば、同時に存在した竪穴住居跡は50棟程度と考えることができる。

今のところ田代川流域における該期の集落跡は極めて少ないが、本遺跡が当地域の中心的な大集落であることは改めて言うまでもないのであろう。

本遺跡が鉄器生産に深く結びつくものであることは今まで述べてきたところであるが、本報告では遺跡内でどの段階から行われていたのか明確に出来なかった。

スラグの中にはわずかではあるが流動滓に類似するものが含まれているため、遺跡周辺部での製錬炉の有無を確認する必要がある。また、屋内の炉は小鍛冶の段階を考えて大過無いと思われるが、屋外の鍛冶炉群が大鍛冶の段階であるのか小鍛冶であるのか今後金属学的分析を含めて検討課題としたい。

２．芋野II遺跡

ａ）遺構について

今回の調査により検出した遺構は第１号土壙跡のみである。この土壙跡は規模、形態、遺物の伴出状況から墓壙跡であると判断した。周辺部に周湟等の付属施設は検出されなかった。

市内での古代の墳墓あるいは古墳の報告例は今のところ長根古墳群（長根Ｉ遺跡）が唯一であるので、これと比較してみる。

長根古墳群からは昭和63年度の発掘調査により28基の古墳と２基の方形周溝が検出されている（註）。

このうち古墳については、周溝のみのもの10基、主体部のみのもの１基、主体部と周湟がセットとなるもの17基であるが、主体部や周溝のみが単独で検出されたものは、本来両者がセットとなるもので、重複や斜面部の崩壊等により失われたと考えるのが妥当だと思われる。

現存する主体部18基は平面形がいずれも長方形を呈し、規模は長軸方向で180～275㎝、短軸方向で70～118㎝となるが、長軸210㎝以上の大形のものが主体となる。

また、底面には両端部に仕切溝とされた短い溝状の付属施設をもつものが8基ある。

古墳群の造営時期は伴出貴物から8世紀代を中心とし、一部7世紀後半代へ上るものと、9世紀代へ下るものがあるようである。

一方、芋野II遺跡の墓壙跡は、平面形が隅丸方形を呈し、規模は長軸が115cm、短軸が100cmとなり、長根古墳群とは形態や規模が全く異っていることが分かる。

更に、周湟を持たない点が決定的な相違点となっている。

伴出遺物は、土師器甕破片と鉄器類がある。土師器甕については小片であり明確ではないが器形等から平安時代に伴う可能性が大きい。また、鉄器類のなかで、鋤先は県内の資料を集成した高橋義介の分類（註4）によると平安時代に伴うIII類、IV類のうちIV類に類例を求めることができる。

以上により類推すれば、芋野II遺跡の墓壙は長根古墳群等の終末期古墳群の退化形態か、または別系統の墓壙であると考えられる。

今後、類似資料の蓄積を待って再度検討することとしたい。

また、埋土中に検出した焼骨片は小片であり同定できるものは含まれていなかった。このため、人骨（火葬骨）であるのか、食料とした獣骨等であるのかは不明であった。

b）遺構外出土遺物について

遺構外の遺物包含層から出土した土器はやや出土量が多かったものの、各層ともに堆積時以前の土器片を多量に含み、層位毎のセットをつかむことはできなかった。また、ほとんどが破片であり、器種も不明瞭なものが多い。

ここでは、時期毎に大別し、概要を記すに留めることとする。

尚、土器類については小田野哲憲氏に実見して頂いた上で所属時期等について御教示頂いた。記して感謝の意を表したい。

第I群土器（8・9・173・175）

縄文時代晩期後半に伴うものを一括した。器種は、皿・深鉢等がある。VIII層から単独で出土している。

第II群土器（26・28～33・45～46・52～95・101～145・186～194・196～200・205～209）

弥生時代前期初頭の砂沢式に伴うものを主体とするが、一部縄文時代晩期末葉のものを含む可能性は残る。出土点数は最も多いものの単独で出土した層は無い198は他の遺跡にて合口で出土したものに胎土や焼成が類似する。

また、95・208は遠賀川系の土器である可能性が大きい。

器種は、高坏・浅鉢・壺・深鉢などがある。

第III群土器（23～25・96～100）

弥生時代中期に伴うもので、二枚橋式などに併行するものと思われる。

第Ⅳ群土器（10～22・34～43・204）

弥生時代後期に伴うもので、天王山式に伴う交互刺突文を施すものと、赤穴式に伴う特徴的な地文を施すものの２種がある。

出土点数は少ないものの、Ⅶ層の最新型式であり、この層の堆積時期を決める資料となった。

第Ⅴ群土器

古代に伴うと思われる土師器を一括した。Ⅵ層より上層の最新型式であり、これらの層の堆積時期を決める資料となった。

墓壙跡の伴出遺物との時期差については不明であるが、器形や器面調整に類似性が見られることから、両者ともに平安時代と見做しておく。

（註記）

註１　平成元年度に発掘調査を実施した狐崎遺跡でも尾根上に奈良時代の竪穴住居跡がほぼ等間隔に検出されている。

註２　高橋信雄　1982「古代」『岩手の土器』岩手県立博物館　より

註３　遠藤勝博・相原康二　1983「岩手県南部における土師器の細分」『考古学論叢』　より

註４　高橋義介　1984「岩手県における奈良・平安時代の鉄製品について」『紀要Ⅳ』(財)岩手県埋蔵文化財センター

〈参考引用文献（前掲したものは除く）〉

岡田要　1965『新日本動物図鑑』　北隆館

島津光夫・田中啓策・吉田尚　1970『田老地域の地質　地域地質研究報告』　地質調査所

岩手県　1973『北上山系開発地域　土地分類基本調査　田老』

波部忠重　1977『日本産軟体動物分類学　二枚貝綱／掘足綱』　北隆館

石塚和雄ほか　1979『宮古市の自然』　宮古市

波部忠重・奥谷喬司　1983『学研生物図鑑　貝Ⅰ・Ⅱ』　学習研究社

岸昌一　1984『宮古市史　資料集　近世（一）』　宮古市

田村忠博　1986『宮古地方の中世史　古城物語』

写　真　図　版

第１図版

細越Ⅰ遺跡作業風景

細越Ⅰ遺跡検出遺構

第２図版

第１号竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡内鍛冶炉群

第３図版

第１号竪穴住居跡内鍛冶炉群

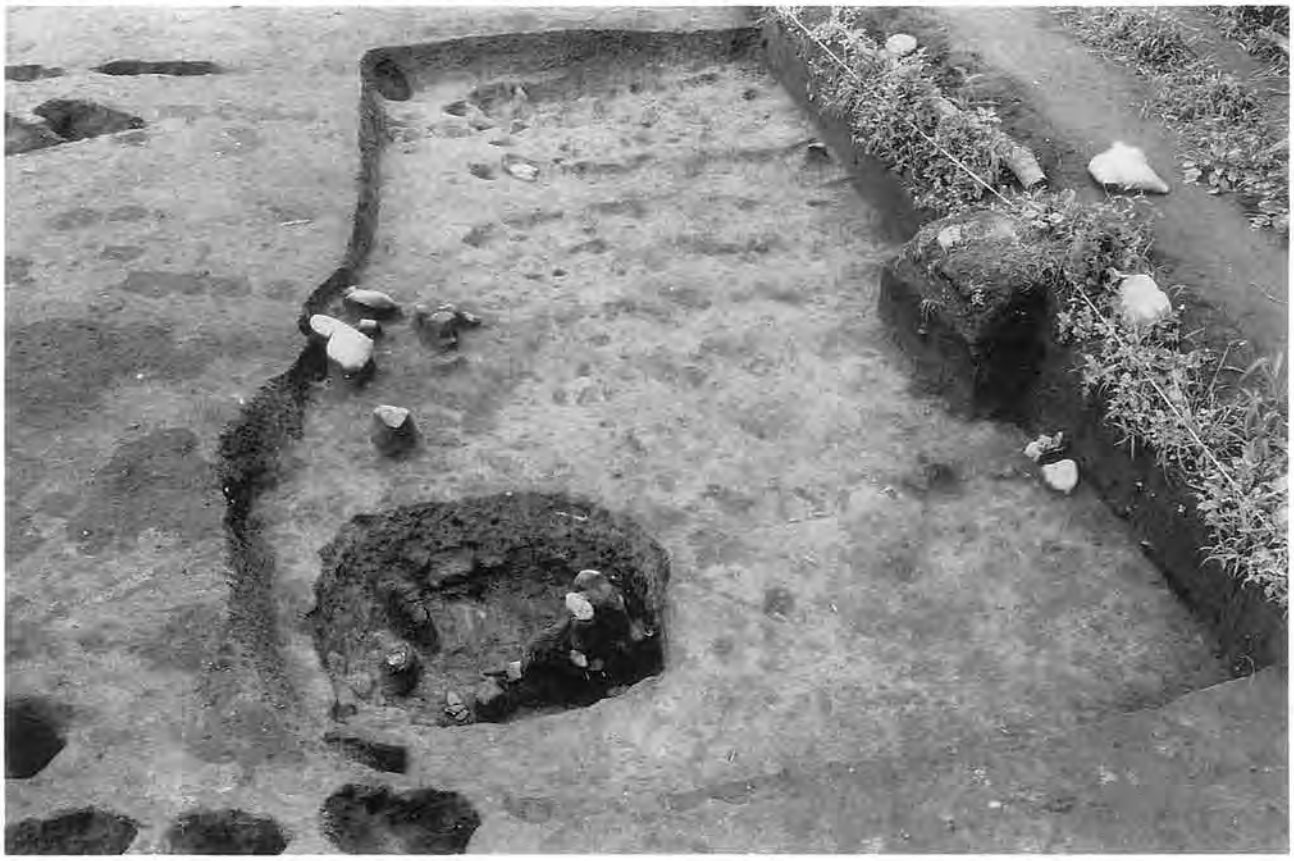
第２号竪穴住居跡

第４図版

第２号竪穴住居跡埋土堆積状況

第２号竪穴住居跡内第18号鍛冶炉

第５図版



第３号竪穴住居跡

第３号竪穴住居跡鉄製品出土状況

第６図版

第４号竪穴住居跡

第４号竪穴住居跡カマド

第７図版

第５号竪穴住居跡・第６号竪穴住居跡

第５号竪穴住居跡・第６号竪穴住居跡埋土堆積状況

第８図版

第５号竪穴住居跡内第５号土壙跡

貝ブロック検出状況

第９図版

貝ブロックＥ

第７号竪穴住居跡

第10図版

第９号竪穴住居跡

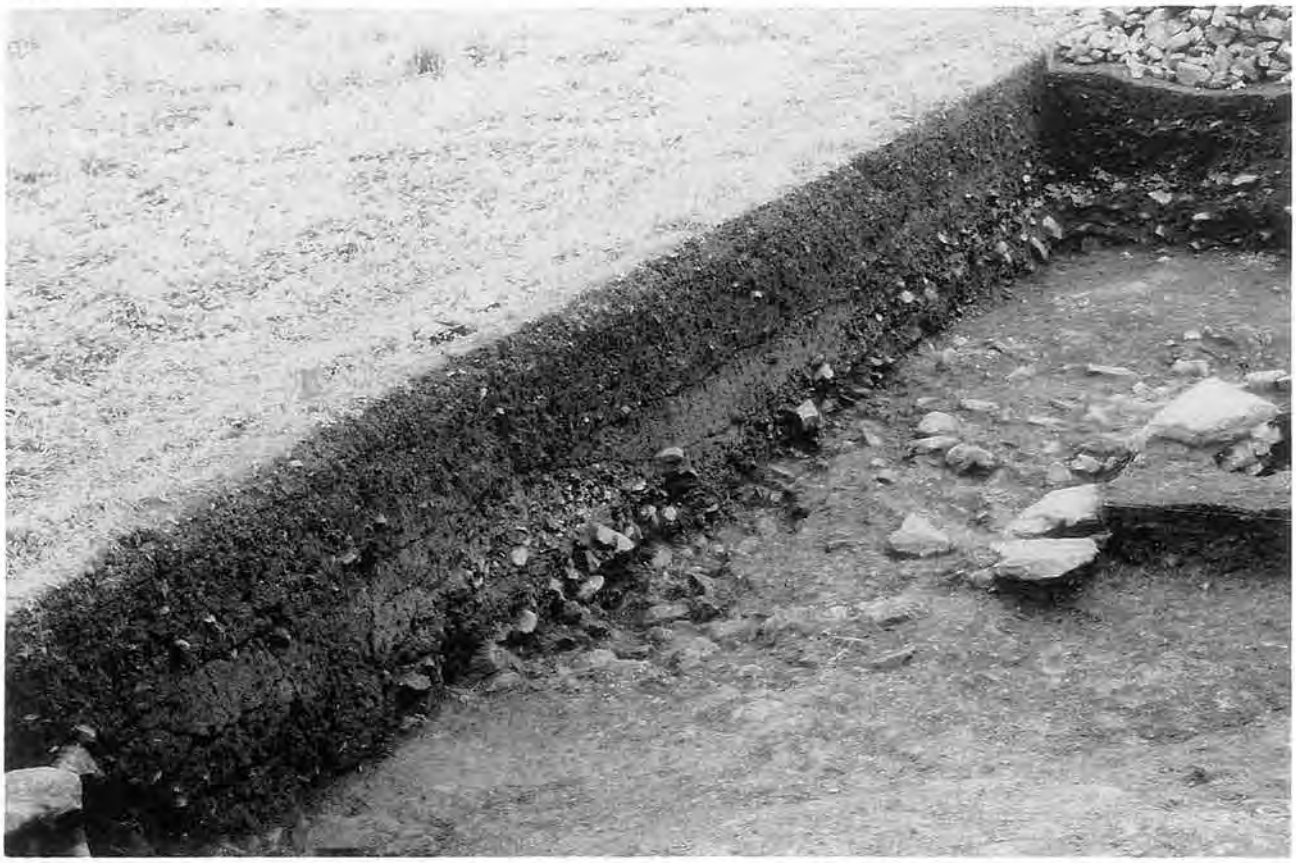
第９号竪穴住居跡カマド

第11図版

第10号竪穴住居跡

芋野II遺跡調査区全景

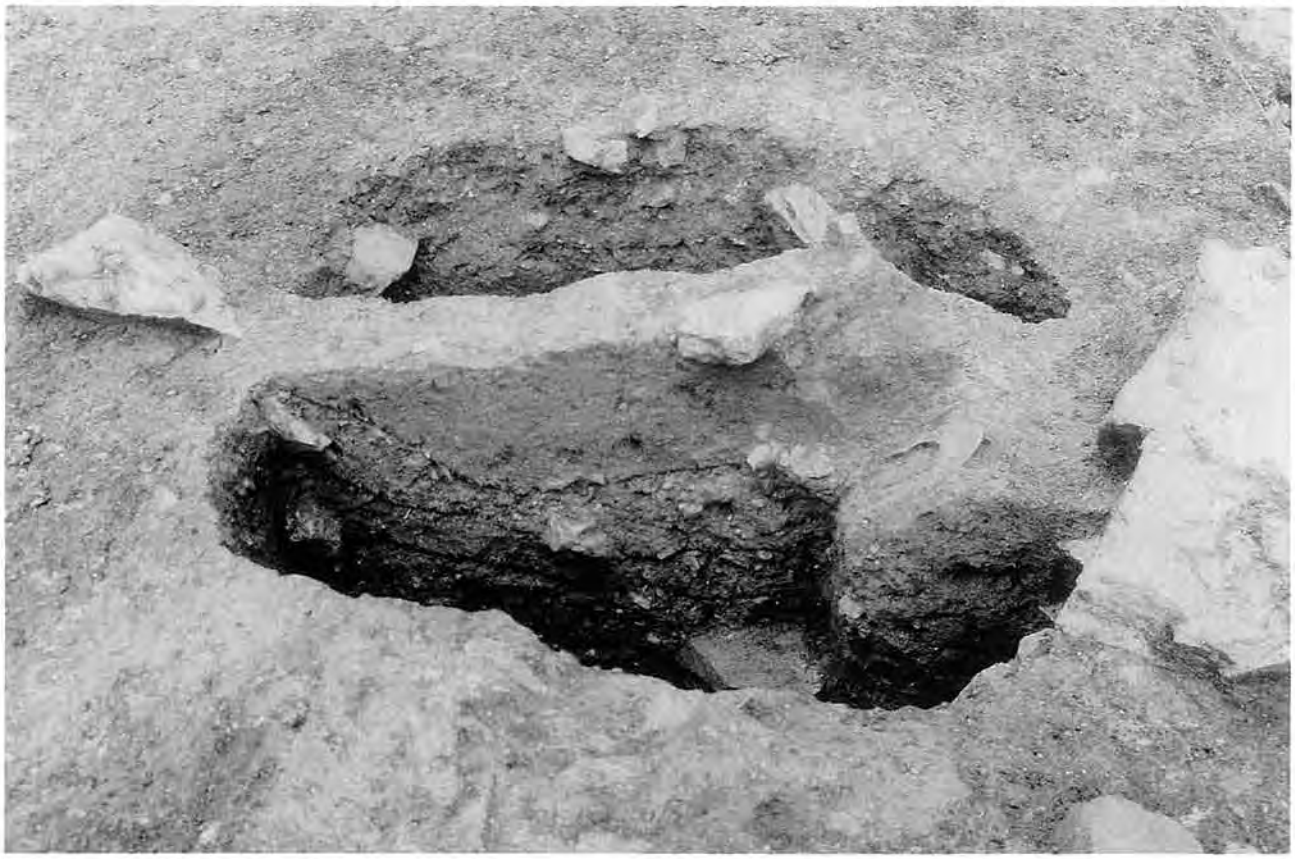
第12図版



芋野II遺跡堆積状況

第Ⅰ号土壙跡完掘状況

第13図版



第１号土壙跡埋土堆積状況

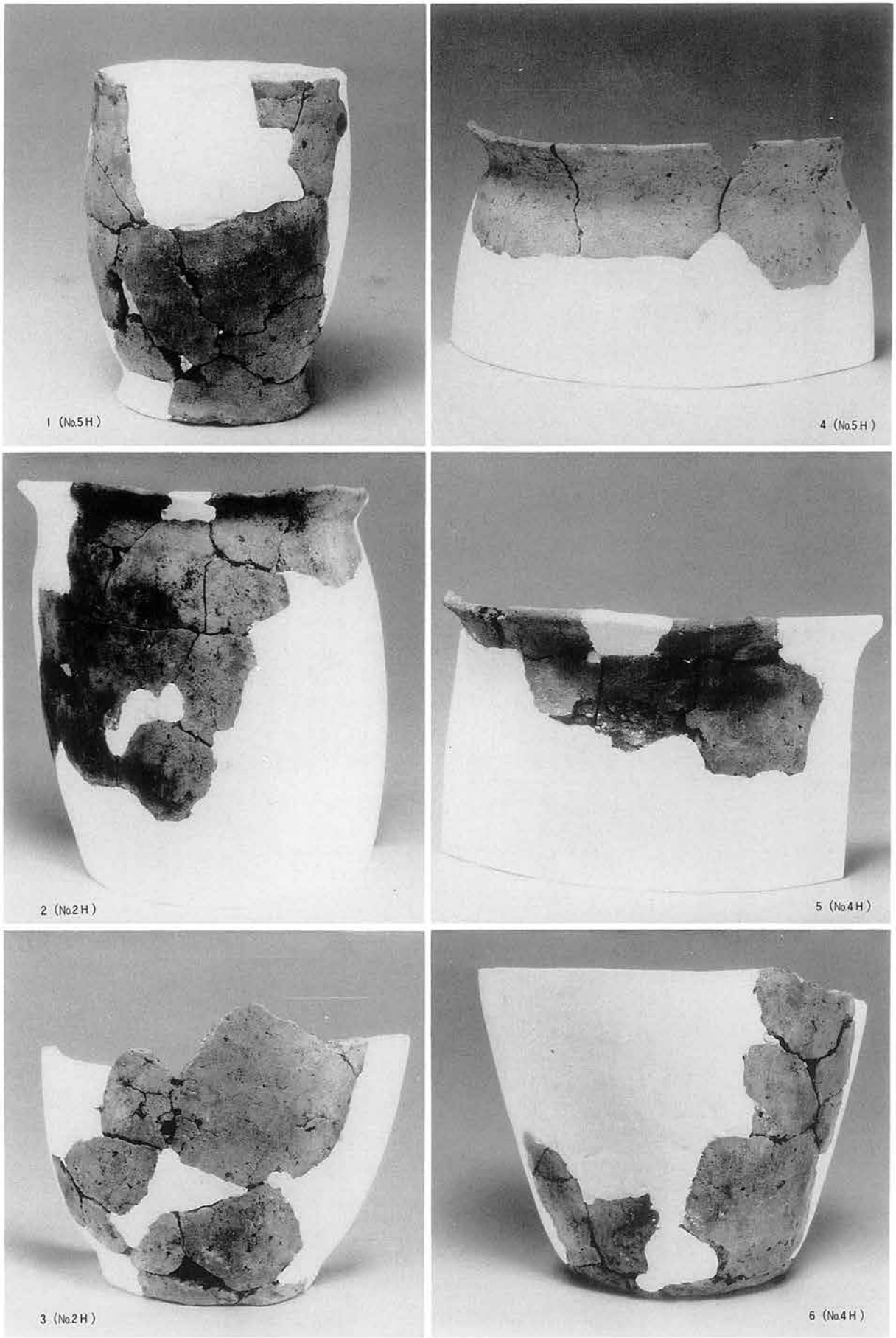
第１号土壙跡遺物出土状況

第14図版

遺物出土状況

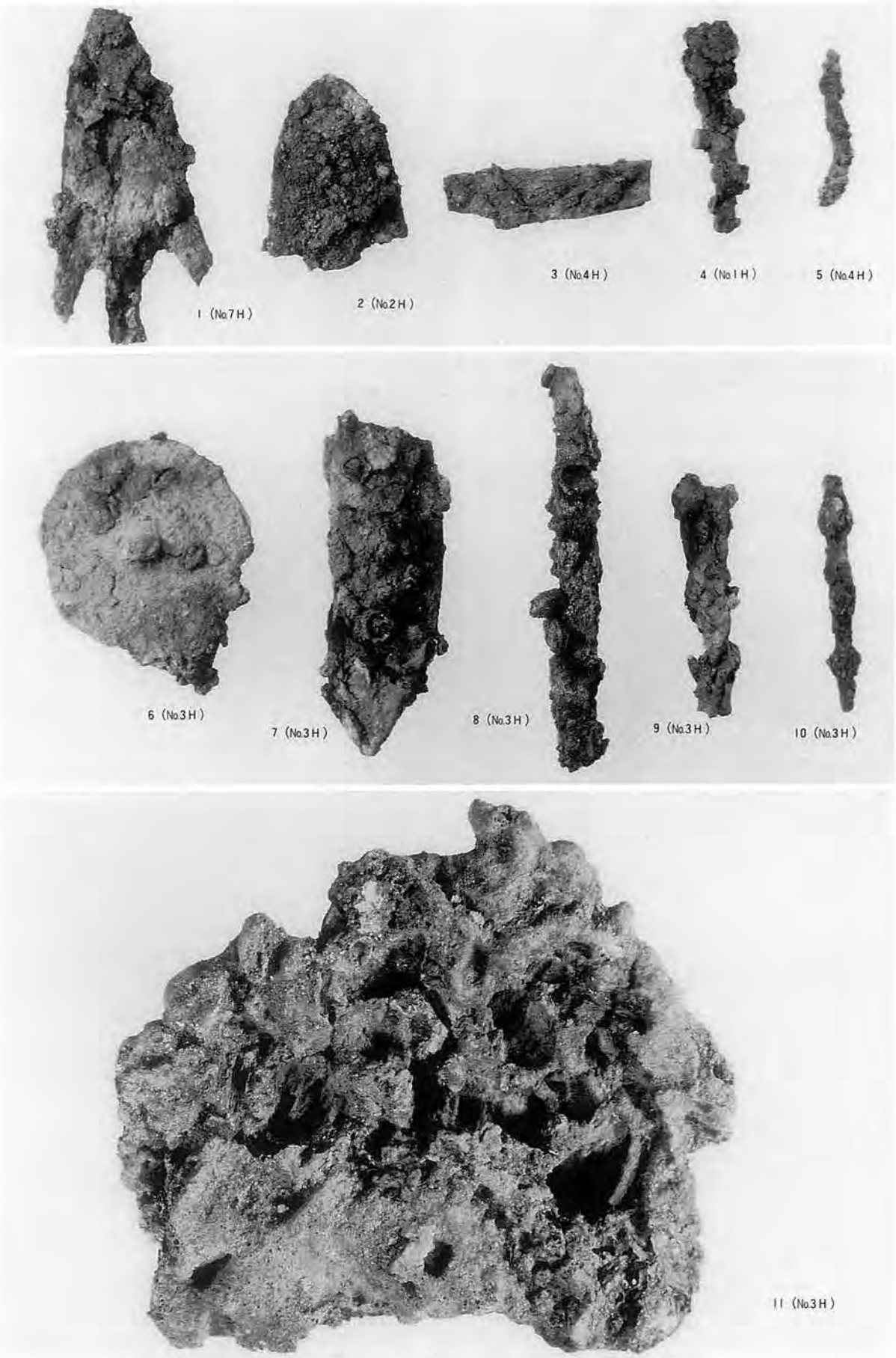
遺物出土状況

第15図版



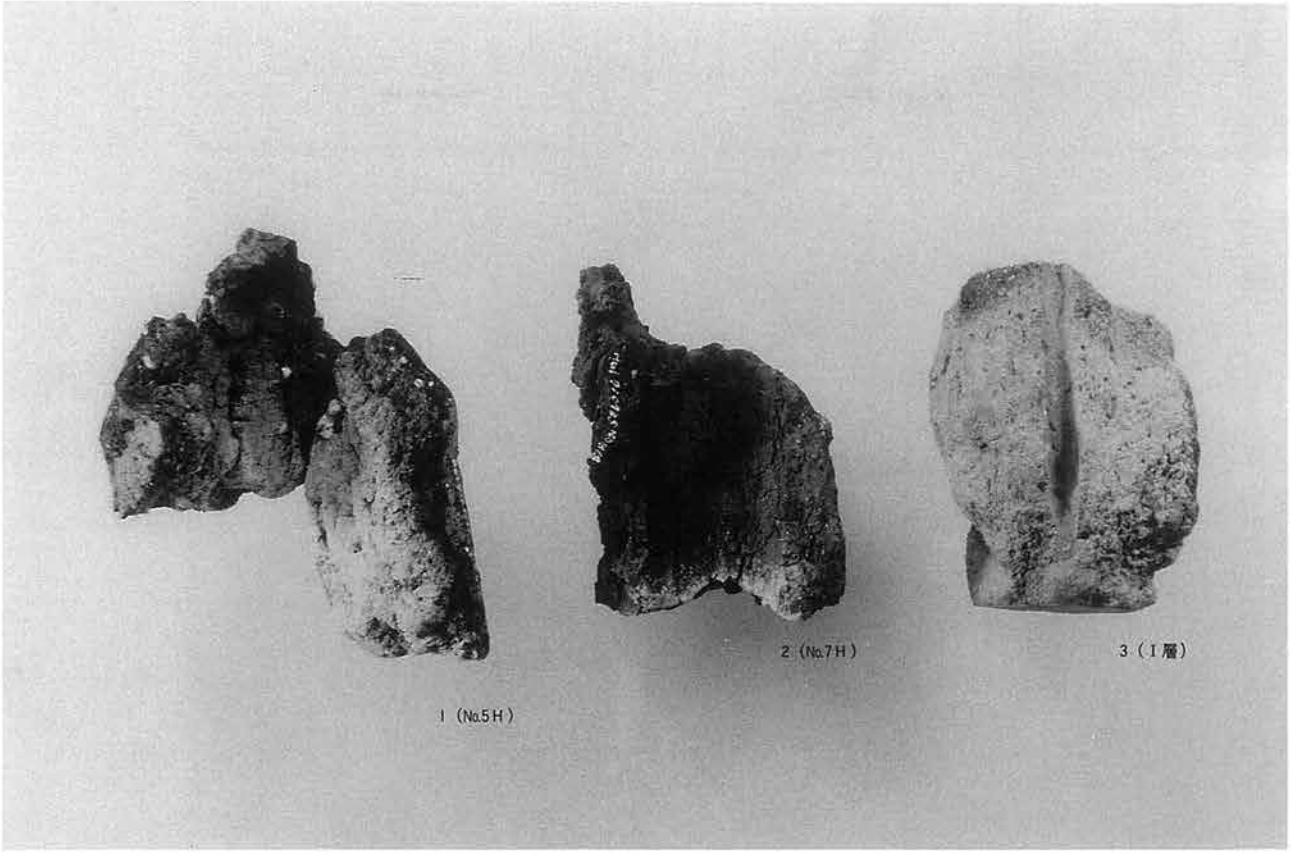
細越Ⅰ遺跡出土遺物Ⅰ(土師器)

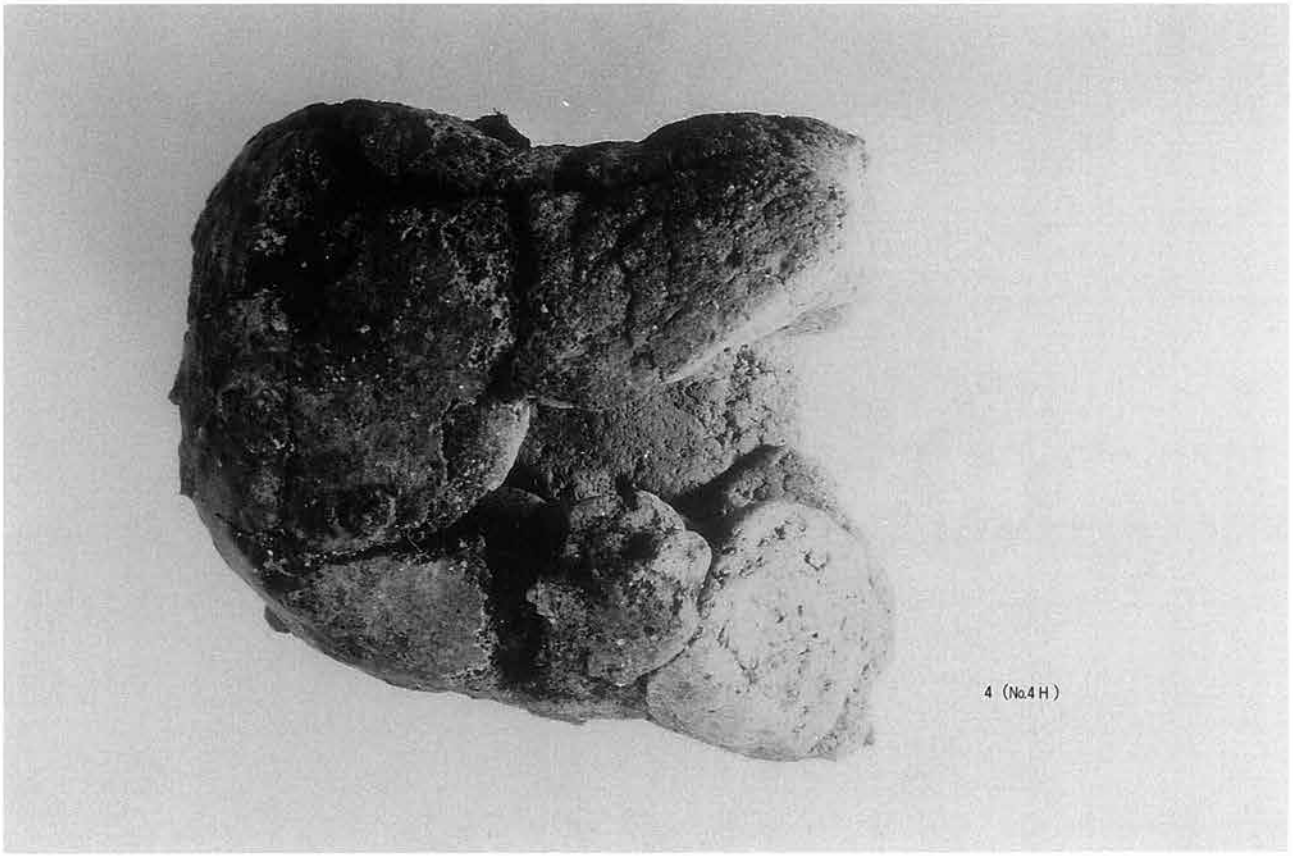
第16図版



細越Ⅰ遺跡出土遺物2（鉄製品、椀形滓）

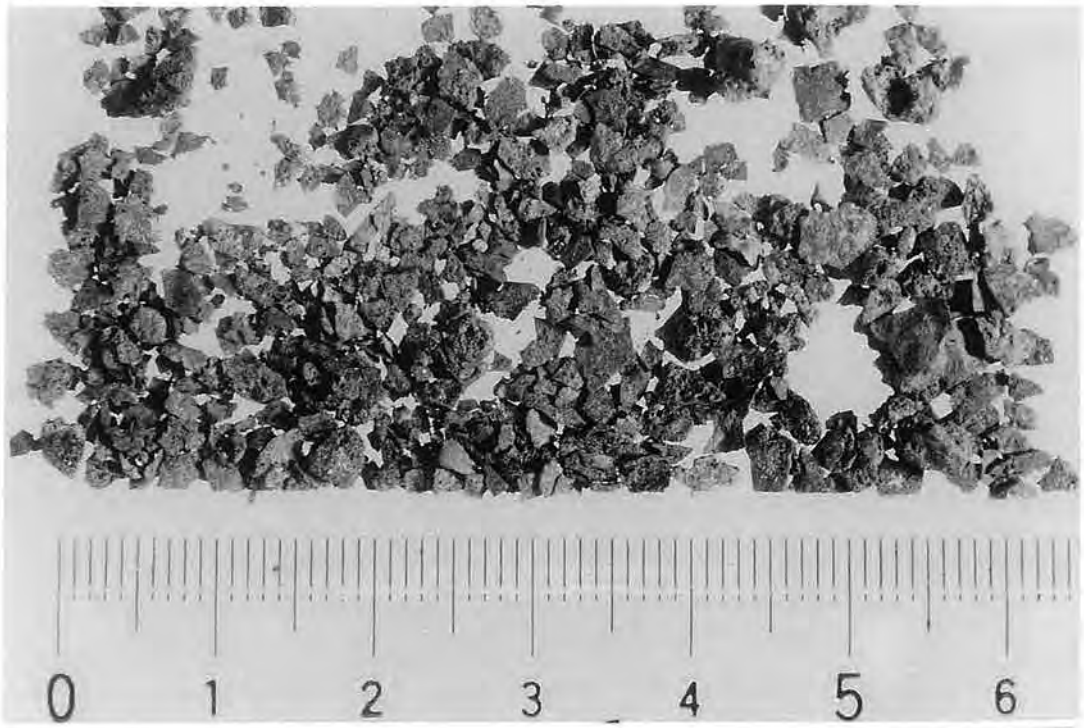
第17図版





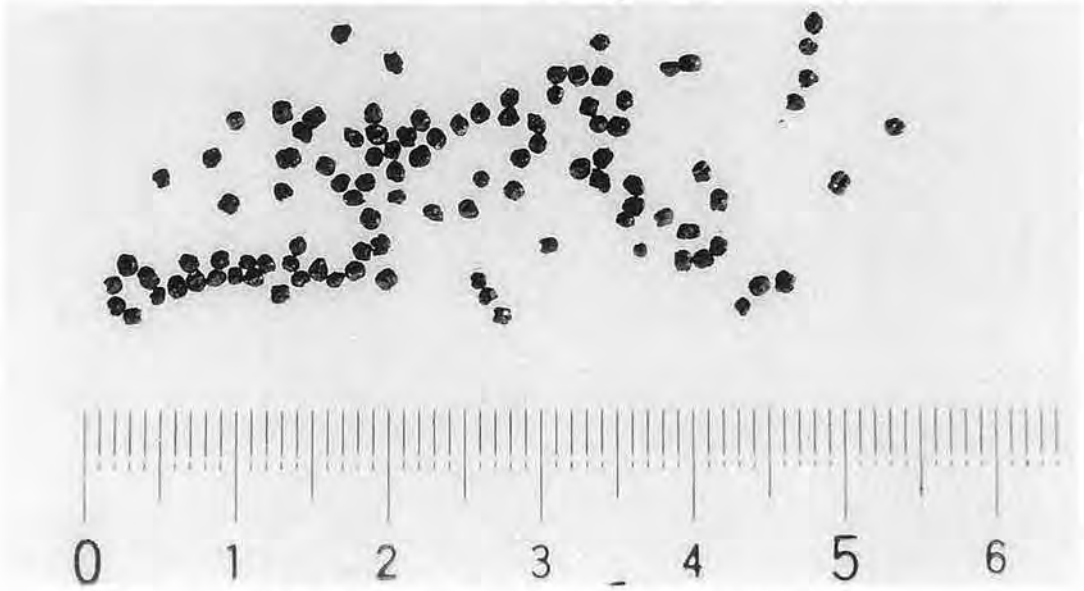
細越Ⅰ遺跡出土遺物3(フイゴ羽口、カマド支脚)

第18図版



1 ハンマースケール

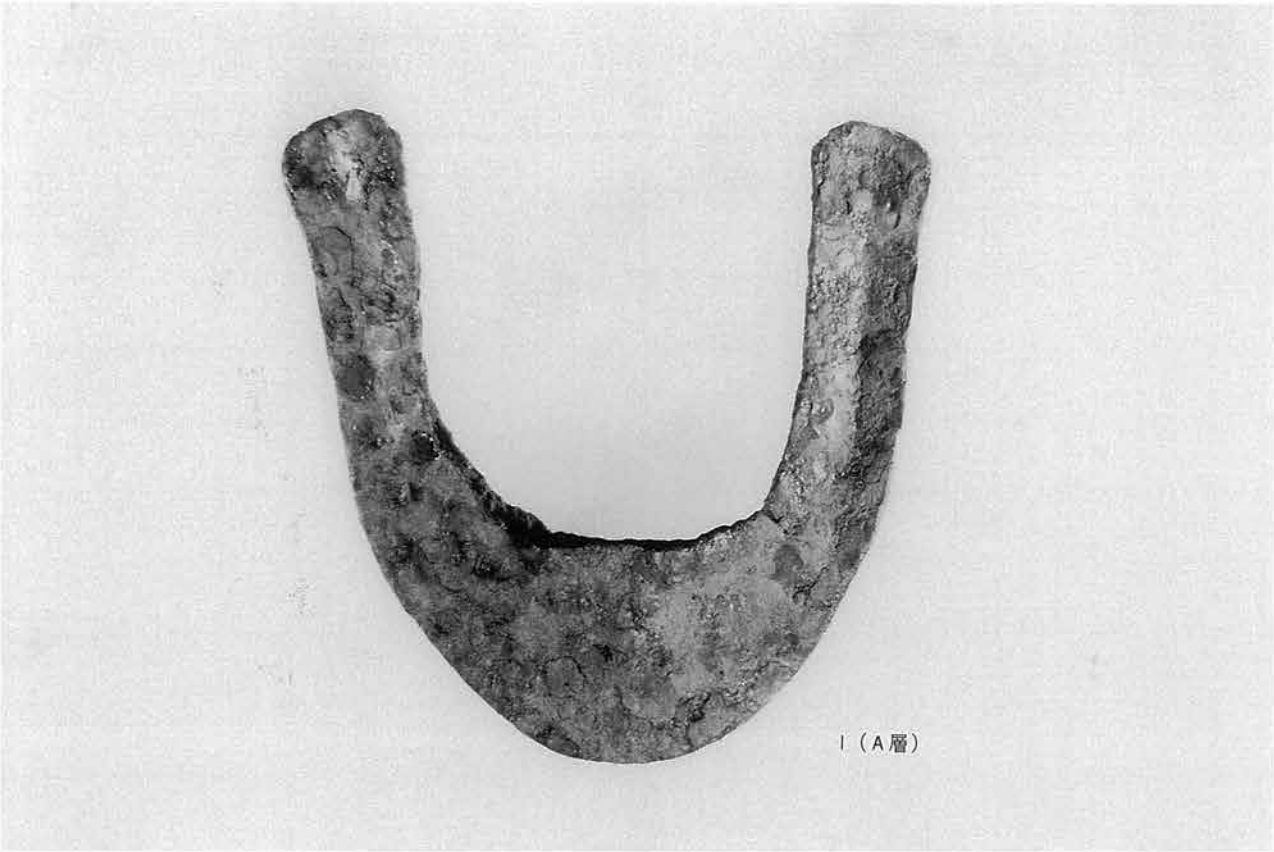
2 ドングリ状炭化種実
(No.9Hカマド)

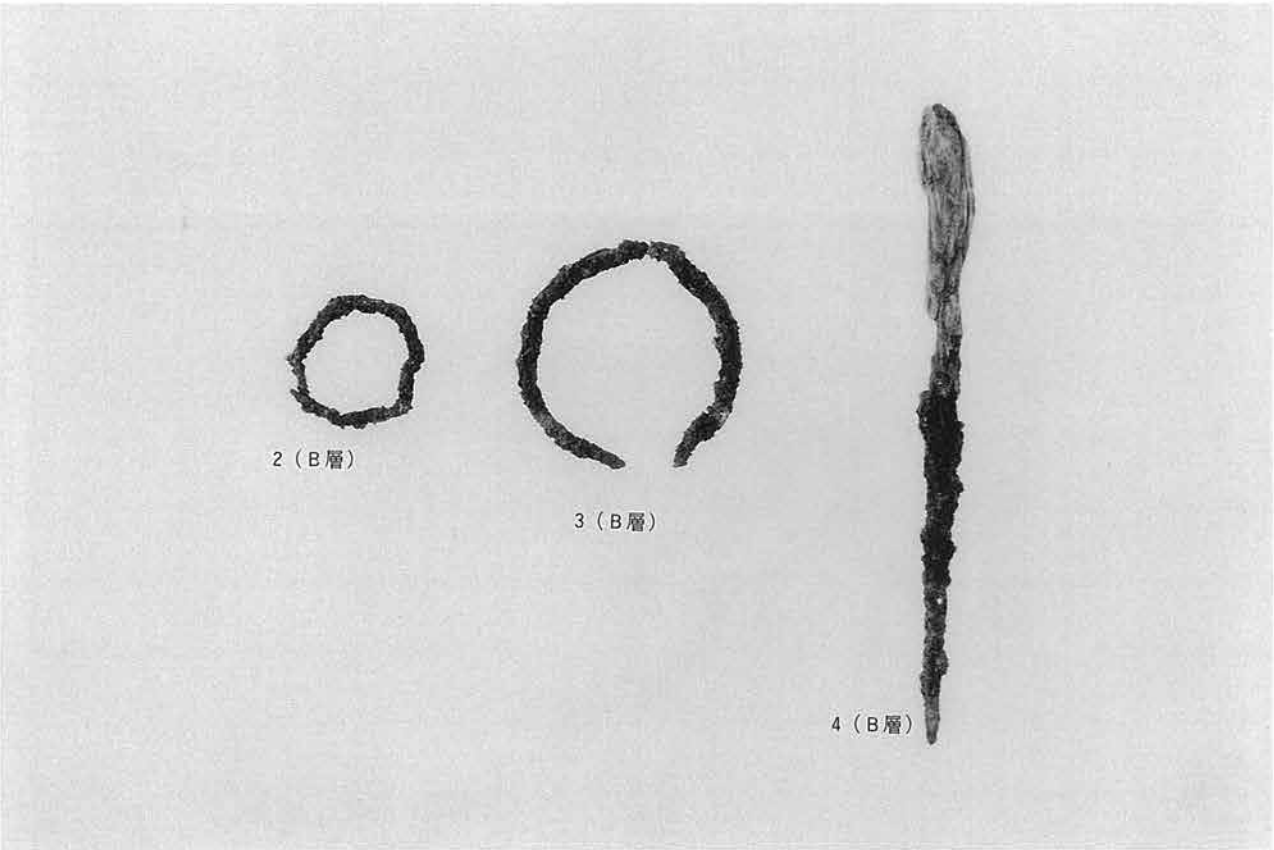


3 アワ状炭化種実
(No.9Hカマド)

細越Ⅰ遺跡出土遺物4（ハンマースケール・炭化種実）

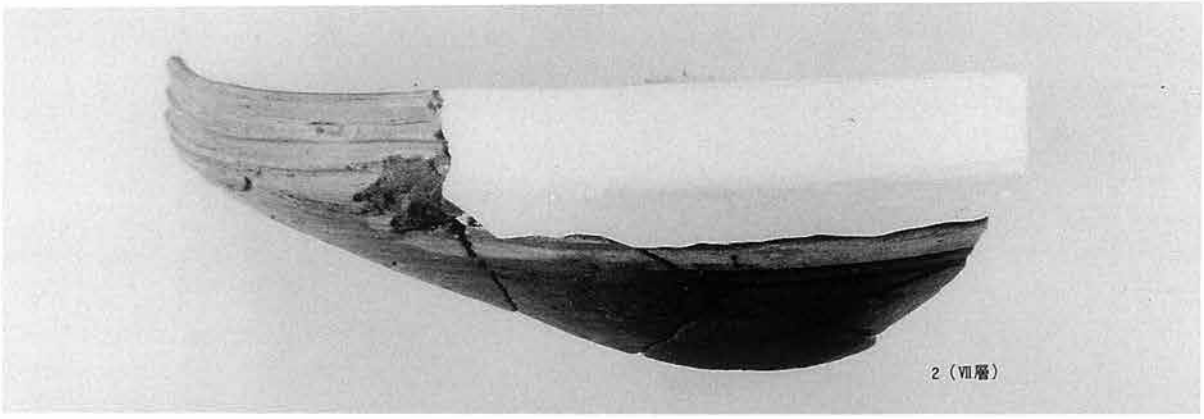
第19図版

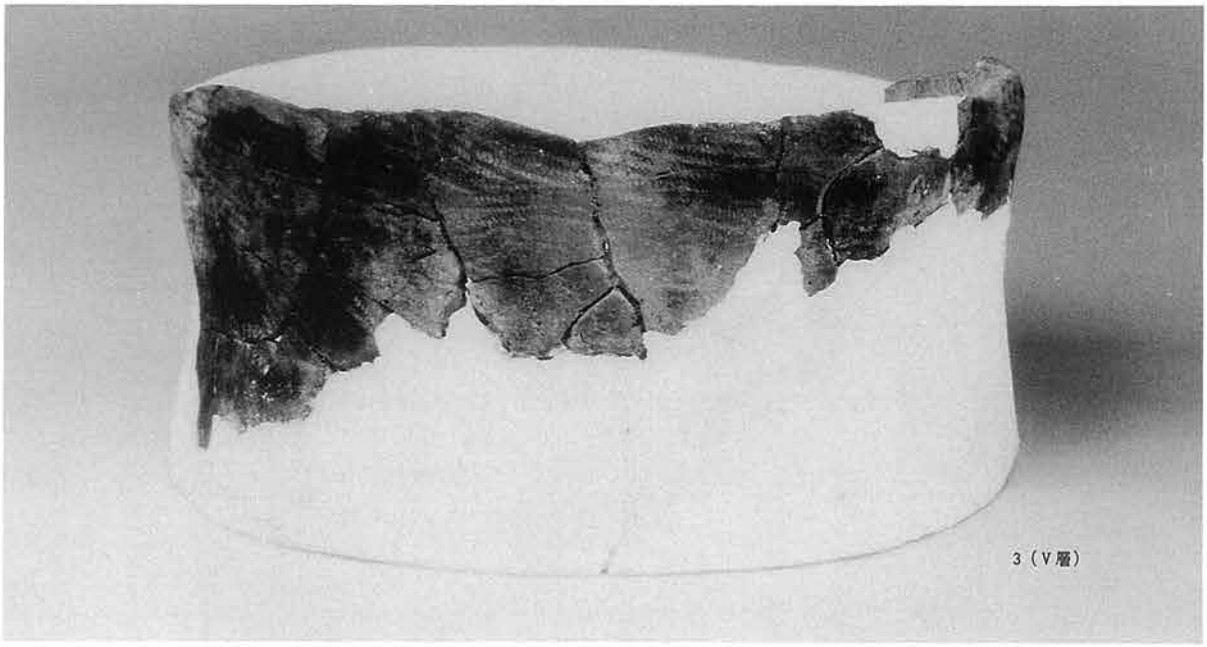




芋野II遺跡出土遺物1（第1号土壙跡）

第20図版





芋野II遺跡出土遺物2（土器）

宮古市埋蔵文化財調査報告書36

—農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書—

細越Ⅰ遺跡
芋野Ⅱ遺跡

1992.3

発　行　岩手県宮古市教育委員会
〒027 岩手県宮古市新川町2番1号
TEL 0193（62）2111

印　刷　花坂印刷工業株式会社
〒027 岩手県宮古市新川町1－2
TEL 0193（62）3125㈹